

77  
3

帝國百科全書

第六百二十六編

文學士 大町芳衛著

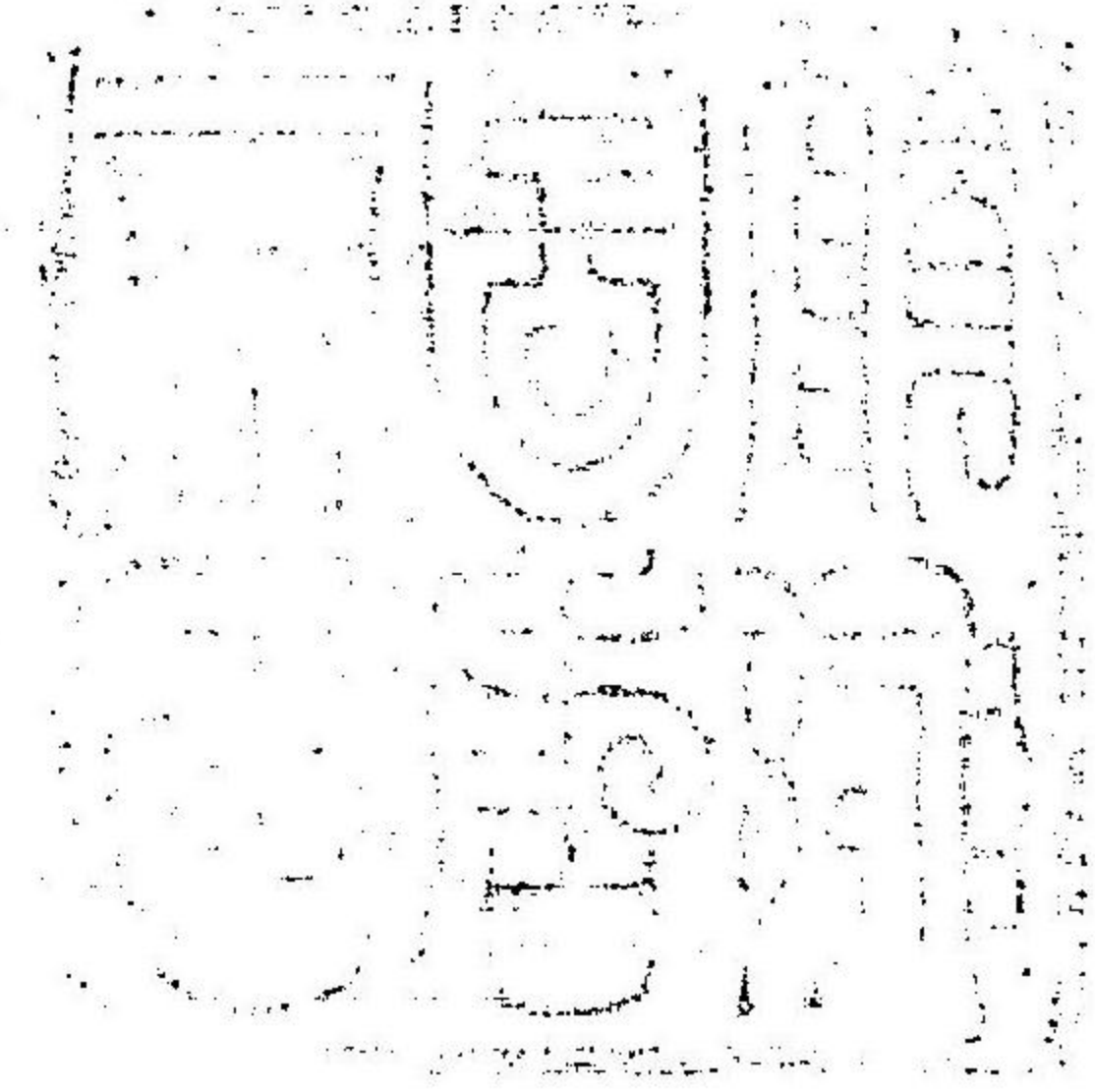
日本文章史

明治四十年四月出版

東京博文館藏版

文學士大町芳衛著

日本文章史



東京博文館藏版

明治  
40 6 8  
内交

## 序

在來、日本文學の歴史は、多く世にあらはれたれど、日本文章の歴史は、未だ之あるを聞かず。われ遺憾に思ひて、數年前より之を作らむと思ひたちたるが、恥かしや、所謂梟の宵だくみ、學淺く、識足らず、精力もなくして、今日に至るも、日本文章の歴史の研究は、不十分の上に、不十分也。幾度も筆をなげうちしが、書肆との約束には違ふべからず。終に思ひ切つて、此篇を著はしける也。

歴史、文法などの書には、多く大小の別あり。詳細なるを大と稱し、簡約なるを小と稱す。大小いづれが先きに出來たるものか、一々詮索はせざれど、思ふに、十分なる研究ありて、大の方を先きにし、然る後に、要をつまみて、小をものするが順序なるべし。今、百科全書は、紙數

わづかに三百頁と定まれり。もとより大なる文章史は、作るべくもあらず、姑息の考なるべけれど、余は小を先きにし、大を後にせむと決心せり。この書は、余の小なる日本文章史のつもり也。後日、大なる文章史をつくらむと欲する也。

小なる文章史といへども、簡約、其要を得たれば、取るべし。然るにこの篇は、ただ粗策也。到底大方の看に供するに足らず。唯時代々々を代表するに足るべき文章を撰ぶには、苦心したり。もし初學の士にとりて、之によりて、日本文章の變遷の大體を知り、作文練習上に裨益する所あらば、余が望外の幸也。

明治四十年の春

大町桂月

## 日本文章史目次

### 第一 總論

文章と人格……日本語の美……日本人の音聲……日本語の特質……日本天然の美……文章の根本……日本文章の第一期……日本文章の第二期……日本文章の第三期……日本文章の第四期……日本文章の第五期……日本の漢文……日本文章と日本國民の性情……日本國民性情の美

### 第二 上古の文章

上古の日本國民……日本の天然……古語の特質……言靈の國……文字なき時代……上古の文章の種類……敬神と文章……忠君と文章……祖先崇拜と文章……祝詞……大祓の詞……日本國民の聖典……祝詞の文章の美……宣命……文武天皇即位の宣命……神武天皇の宣命の漢譯……藤原永手を弔ふ宣命……日本宣命の特色……壽詞……中臣の壽詞……

史傳の文……氏文……風土記……出雲風土記の一節……古事記……古事記の一節……上宮記……法隆寺藥師佛光背銘……天壽國曼陀羅繡帳……言文一致……上古文章の特質……憲法十七條……日本書紀……律令……書簡……耳に訴ふる文

### 第三 平安朝の文章

四五

平安朝の文章の種類……平安朝の漢文……弘法大師の文……假名の發明……竹取物語の文……竹取物語と古事記……落語の落ちの祖……事實上の滑稽……伊勢物語……業平朝臣の文……文章家としての紀貫之……國文の古今集序……漢文の古今集序……古今集の和漢兩序の比較……國文上の新生面……土佐日記……平安朝初期を代表する文章……漢詩漢文の影響……平安朝の小説……源氏物語……紫式部の文……自叙傳的文章……業平朝臣と和泉式部……和泉式部の文章……紀行文……土佐日記と更科日記……土佐日記の文章……更科日記の文章……

王朝文の代表者……枕草紙の文……清少納言と紫式部……小説ならぬ物語……大和物語の文……今昔物語の文……國文の歴史……榮華物語と大鏡……大鏡の文……奥儀抄の文……尺牘體の文……往來體の文……消息體の文……平安朝文章變遷の概要……平安朝の末の文章

### 第四 鎌倉時代の文章

一〇七

殺関の世と文章……和歌の隆盛……漢文の衰微……僧侶と文章……武士と文章……日本化せる佛教……小説の餘脈……四鏡……日記草子の系統……戦記……言語の變遷……和漢混交文……耳に訴ふる文……對偶句の流行……散文と韻文との調和……七五調の文章……日本男子固有の面目……武強と優美……古今著聞集と十訓抄……撰集抄の文……撰集抄と西行法師……保元物語の文……義經記……曾我物語の文……平家物語と源平盛衰記……平家物語の文……源平盛衰記の文……水鏡と今鏡……文章家としての鴨長明……紀行の文……東關紀行……吾妻

鑑の文……書簡……義經の腰越状……西行の手紙……阿佛尼の乳母の文……法然上人の文章……御文章の一節……親鸞の文章……日蓮の文章

### 第五 室町時代の文章

一七二

五山文學……僧義堂の漢文……謠曲の文章……狂言の文章……室町時代第一の文豪……北畠親房の文章……神皇正統記……増鏡……太平記の文章……吉野拾遺物語……梅松論……伯耆卷……後醍醐天皇の勅書……足利義滿の文……兼好法師の徒然草……室町時代の紀行……一條兼良の文章……細川幽齋の覺書……室町時代の書翰……御伽草子……連歌俳諧の隆盛……蓮如上人の御文章

### 第六 江戸時代の文章

二〇二

江戸前半の漢學者……漢學の隆盛……江戸時代の漢文……頼山陽の日

本外史……新井白石の文章……漢文訓讀と國文との關係……安藤爲章の文章……貝原益軒の文章……室鳩巢の文章……蕃山……芳洲……春臺……柳澤淇園の文章……荻生徂徠の文章……江戸後半の漢學者……帆足萬里の文章……國學復興……江戸時代の擬古文……伴蒿蹊の文章……本居宣長の文章……口語體の文章……心學者の文章……鳩翁道話の一節……平田篤胤の文章……平田篤胤の書翰……江戸時代の書簡……俳文……芭蕉の俳文……許六の俳文……也有的俳文……狂文……蜀山人の狂文……風來山人の狂文……京傳の狂文……脚本……院本……近松門左衛門の文章……小説……西鶴の文章……其磧の文章……浮世草子……洒落本……人情本……江戸時代の物語讀本……實錄物……草双紙……讀本……種彦の文章……馬琴の文章……和莊兵衛と夢想兵衛胡蝶物語……遊谷子の文章……和莊兵衛と八犬傳……滑稽小説……一九と三馬……一九の文章……滑稽の漢文……江戸繁昌記……江戸時代の紀行……江戸時代の洋文翻譯……イソップ物語の翻譯……江戸時代の普通文……

武士と文章……平民と文章……江戸兒氣象と文章

第七 結論……………二八〇

明治の前半……西洋崇拜……洋文翻譯……漢文直譯體……新聞……中村  
 正直の文……福澤諭吉の文……明治前半の小説……政治小説……明治  
 の後半……徳富蘇峯の文……國學復興……落合直文の文……雜誌……明  
 治後半の小説……口語文……山田美妙齋……尾崎紅葉……明治の脚本  
 ……明治の書簡……批評家……明治の文章諸家……口語體と文語體……  
 ……巖谷小波の文體……國文變遷の大體……漢字と國文……日本將來の  
 文字……教育勅語

目次畢

日本文章史

文學士 大町芳衛著

第一 總論

「文章は經國の大業、不朽の盛事」との語もあれば、『文章は彫蟲琢刻の末技』との語もあり。知らずいづれか是にして、いづれか非なる。

文章は一の技術に過ぎず。されど、之を用ゐる者は、人也。作者の人格如何によりて、不朽の盛事ともなれば、彫蟲の末技ともなる也。文章を大別すれば、形式と内容と也。形式とは、文句のつかひ具合也。内容とは、思想也。普通、文章を説くものは、この二者にとゞまれるやうなれど、なほ進んで、文句のつかひ具合の由る所をさぐり、思想のもとづく所をさはむれば、終に作者の人格に歸す。人格の大小高卑は、實に人物の價値のわかるゝ所也。事業の興廢のわかるゝ所也。國家社會の盛衰のわかるゝ所也。人文の進否のわかるゝ所也。彫蟲の末技とは、人格の小に

文章と人格

して低きものが徒に形式の上に小才を弄したるもの事也。然れども人格高きものもしくは大なる者の作にいたりては、其人格自から文章にあらはれて、經國の大業となり、不朽の盛事となる也。

世界の各國民には、それく特質あり。文の基礎は、人格なれば、その特質は、自から文章にあらはる。文章は、言語をつらねたるもの也、言語をはなれては、文章なし。之を文字にあきあらはすものも、とより文章なるが、之を口に言ひあらはすものも、亦文章たらずんばあらず。われ、日本以外の文章にありては、漸く、漢文をよみかじり、英獨羅匈の文をよみかじれるに過ぎず。くはしく比較して、優劣を判するに由なけれど、試にせまき知識を以て判せんに、英や、獨や、漢や、羅匈語の流麗優美なるに如かず。されど、羅匈語もなほ我日本語の流麗優美なるに如かりては、幾んどすべて母音也、從つて優美也、從つて最も音樂的也。語既に優美なれば、發音も之に伴うて優美なるは、言ふまでも無し。なほ、そのもとにさかのぼれば、國民の人格の優美なることを證する也。面貌は、心情を語るものなりと

日本語の美

日本人の音聲

は、真理也。愚者は、愚者らしき面貌あり、智者は、智者らしき面貌あり、大人らしき面貌あり、小人は、小人らしき面貌あり、陰氣なるとや、快闊なるとや、鄙吝なることや、恬淡なることや、すべて、面貌にあらはる。人のみならず、動物も、亦然り。羊は、どう見ても、よわ／＼しく、獅子は、どう見ても、たけ／＼し。なほその特質は、聲にあらはる。雀の聲のさう／＼しき、鴉の聲のいやらしき、猫の聲のこびたる、獅子の聲の猛き、たゞ聲のみのものにあらずして、各動物の本質をあらはせるもの也。之を人に見るも、歐米人は、蠻音にして、動物に近く、日本人は、やさしくして、一層音樂的なるを見る。人格猛惡なれば、その聲も、從つて猛惡也、人格優雅なれば、その聲も、從つて優雅也。之を男女兩性に驗するに、男性うたひ、女性黙するが、動物一般のさま也、人にありては、女性も歌ふ。されど、その聲、高くして小也、男性は、大にして強し。女性の聲は、清く、うはるはしきやうなれど、軽く、男性の聲は、濁れど、重くして、情を含む。動物一般の自然は、人間にも及びて、やはり、人も男性の方が音樂的也。推して之を國民の性情に見るに、我國民の發音言語の優美なるは、我國民の人格の優美なるに基づくもの也。



日本語の特質

わが國語は、所謂連結語にして、土耳其、蒙古、朝鮮などもおなじ種類也。助字の作用にて、自由自在にむすびつく。漢語にありては、『武松殺虎』といふより外には、言ひあらはし方なけれど、國語にありては、『武松、虎を殺す』と云へれば、『虎を殺す、武松が』とも云へ、『殺す、虎を、武松が』とも云へ、副詞、形容詞を添へれば、更に多く變化す。かく變化自在なるを以て、文、自から窮屈ならず、よく委曲をつくす。これ連結語より來れる特色也。殊に、母音連續するを以て、優雅にして、音樂的也。此連結語、土耳其、蒙古の如き亞細亞の一部にもひろまれど、月明かに花うるはしき東洋の別天地、自然の風光は、人を化して、優美にし、發して聲音の美となり、言語の美となり、文章の美となる。所詮、文章は、人格をはなれざる也。

日本天然の美

文章を説くに唯、形式のみを見ては、非也、思想のみを見るも、非也。人格が、文章の根本也、作者の人格あらはれて、その人の文章となり、國民の性情あらはれて、國民の文章となる。文章史は、畢竟するに、人物史也、日本文学史は、日本國民の性格史也。

文章の根本

我國に文章起りてより、茲に幾千年、時に盛衰あれども、一種日本固有の文章は、

日本文学の第一期

有史以來、傳はりて今に至る。漢語入り、佛語入り、近世西洋の文章も入りて、日本の文章は、變化も多くなり、種類も豊富也。太古より奈良朝の末までは、純粹なる日本固有の文也。之を日本文学の第一期となす。祝詞、宣命、古事記、風土記の一部の文、之を代表す。この時代は、言語ありて、文字なき時代也、文字あるも、漢字を借用したる時代也。漢學も盛になり、佛敎も盛になりて、一方には、第二の國文とも云ふべき漢文起れり。法令布告みな漢文也、官の一事業なる歴史も、漢文也、書翰も漢文也。純粹の國文は、一方に屏息せり。平安朝となりては、假名起りて、國文また起れり。されど、女文字と稱せられて、女子專有のものとなり、男子も之を用ゐるものあれど、そは、稀なる事にして、學問あるものは、漢文をものしたり、漢文をものすることを名譽とし、女文字をものすることを、むしろ、耻辱と思へり。奈良朝より平安朝の半まで、かけては、實に漢文の全盛時代也。六朝初唐の文牀を傳へて、他國人の漢文としては、その美をさはめたり。遣唐使の事やまれるころより、漢學衰へ、漢文も衰へ、一方には、男子も女文字を用ゐるやうになり、歴史も、六國史以後は、漢文のものなくなりて、女文章の歴史となり、一方には、拙なる漢文起

日本文学の第二期

日本文章の第三期

り、漢にあらず、和にもあらざる文體起れり、明月記、吾妻鑑の如きもの、これ也。女文字起りてより、書翰は、所謂女文字の消息文起りしが、和漢混淆文起るに及びて、書翰もその影響をうけて、所謂候文體も起れり。又一方には、女文字に、漢語多く加はりて、平家物語、源平盛衰記の如き者ならはれて、和漢調和し、茲に國文は一變せり。今日にいたるも、さまでの大變化は無し。足利時代にいたりて、太平記、神皇正統記起りて、一方の國文を代表し、一方には、徒然草、吉野拾遺の如きもの起りて、女文章の古文の係を傳へ、また一方には、吾妻鑑風の和漢混淆文もつゞきしが、世は戰國となるにつれて、學問すたれ、從つて、文章もすたれぬ。江戸時代にいたりて、世は太平となり、漢學盛になり、一方には、漢文盛になり、漢學が士大夫の學問となれる世の中、從つて學問あるものは、競うて、漢文をものし、この風は、今の明治の二十年頃までも及べり。されど、一方には、神皇正統記、太平記の文體は、學者の著述にも多く、小説にも多く、一般の國文となり、一方には、和學者の間に、女文學の遺跡、即ち擬古文もありしが、これは、一部に限られて、一般に行はれず、吾妻鑑風の文體は、書牘にのみ、おもに、其係をとゞめたり。

日本文章の第四期

日本文章の第五期

かゝる様にて、明治の世に入りしが、西洋の文物盛に入るにつれて、漢學すたれ、漢文そのまゝにては、世に通用せらるべくもあらざるより、漢文直譯體盛になりたり。一方には、洋文直譯體も起れり。漢學者の漢文も、世に多くあらはれたり。かくて明治二十年以後にいたりては、國粹保存論あるにつれて、國學も起り、擬古文も世にあらはるゝにいたりしが、その影響する所、漢文直譯體を破り、洋文直譯體をも斥けて、今の時文、世に行はるゝに至れり。かゝるさまにて、文字にあらず文章は、日常口にする言語とは、別なるものとなり、口語と文章語と、全く相分れしが、戰國の末に、お安物語の如きものあり、徳川時代になりて、學者の講義の筆記などもありしが、明治二十年以後には、口語をそのまゝなる小説あらはれ、その風次第にひろまりて、小説は、幾んどすべて言文一致體となり、尙ほ論文にも及ぼして、分量の上より云へば、言文一致體の方が、文章語體よりも多くなりぬ。この言文一致體は、將來の國文となるべく、文章語體は、一方に生存をたもつの有様となるにいたるべし。

國文は、斯くの如くに發達し來りぬ。茲に惜むべきは、戰亂の世は知らず、奈良

日本の漢文

時代、平安時代、徳川時代の如き學問の盛なりし時代に、學問あり、識見ありて、社會の表にたちし人物が大抵力を漢文にのみそゝぎしこと也。奈良、平安兩朝の漢文と徳川時代の漢文とにあらはれたる力量を、轉じて國文に用ゐるなば國文は、今一層の光彩を放ちしなるべし。もとより、一方には、外國文の發達すべき必要もあり、たまた、國民の心力の餘裕をもあらはせども、外國文は、到底、其本國の大家を凌ぐあたはず。古來、日本人の文章家の力は、一半は漢文にそゝがれたれども、到底、支那の文章を凌ぐ能はざる也。殊に國民の特性は、言語にあらはれ、音調にあらはる。一國の文章は、一國の言語、音調によらざるべからず、然らざれば、十分に一國民の性情をあらはすべからざる也。

日本文章と日本國民の性情

文章は、人格也。日本文章史を草するに際して、余は、おもに、日本國民の性格をきはめざるべからず。日清戦争、日露戦争を経て、日本は世界強國の一なりと、世界の識者一般に認めらるゝにいたりぬ。されど、日本國民は、猛烈一方の民なりと思はるゝ、これ全く日本國民の性格を知らざる也。日本の言語、音調、文章にあらはるゝが如く、日本國民は、優美なる性格の民也。されど、柔弱にはあらざる也。

日本國民性情の美

日本の歴史をとつて、他の國民の歴史に比較するに、血痕はあれども、そは、忠君愛國、義侠、仁慈の情より出でたる也。所謂「武夫は物のあはれを知る」、野獸的猛烈にして、殘酷にすぐる人は、日本國民になく、日本の歴史には、發見すべからざる也。道鏡將門、尊氏の如きは、逆臣にかぞへらるゝも、他の外國の歴史に見る如き野獸的暴逆なるものには、あらざる也。優美にして、憐悪ならずといふ事は、開闢以來、日本國民を一貫せる性情也。優美は、柔弱に陥りやすし、優美なる日本國民が、競争につよくして、競争場裡に濶歩するは、一寸了解しがたき現象の如くなれども、その優美なるは、畢竟するに、自我の念よりも、博愛の心つよきに由る也。既に博愛の心つよし、故によく公に奉じ、義につよし。妄りに、他に殘虐を加へざれども、一朝公の爲め、義の爲めに起てば、眼中たゞ、公と義とありて、人なく、己れなし。公義の爲めに全力をそゝげは、いづくんぞ武強ならざらんや。元來、日本國民は、死を輕んず。これ戦にかつ所以なるが、その死を輕んずるは、他國民に比して、自我の念強からざるに由る。故に廉恥心つよくして、一身の生死よりは、男子の一分立たざることが苦痛也。その廉恥心は、一身より父祖に及ぼし、更に國家に及ぼ

して、父祖の名をけがさじ、國家の名をけがさじと思ふを以て、一身の利害生死は、自然に平氣にてよそにする也。かく廉恥心のつよきは、潔癖のいたす所也。支那國民を最も潔癖ならざる民とすれば、日本人は最も潔癖なる民也。潔癖なる爲めに、一方には島國的偏狹の弊なしとせざれども、その偏狹や、一身の利害生死の問題より出でたるにあらずして、公と義とに對して、潔癖なるを以て、こゝに純忠純義の民となる。清濁あはせ呑むの必要あれども、それは少數の人傑に必要なことにして、國民の大多數がこの風になれば、廉恥心なくなりて、優柔となるべし。潔癖にして、自我の念乏しければ、無邪氣となり、恬淡となり、快闊となり、敬虔となり、眞面目となりて、所謂物のあはれを知る。威ありて猛からざるの氣風は、實に日本國民に於て之を見る也。

征露の大捷は日本國民の武強のみに歸するも、亦誤れり。今の戦争は、腕力のみ戦争にあらずして、實に智力の戦争也。元來、日本國民は、模擬にも長ずれども、また獨創力にもとめり。後進の國にして、世界の文化をひと呑みにし、文明の諸利器に於ても、優に世界第一流に位するに足るを以て、征露の大捷の如き、花々

しき大活動も出來たるなれ。今の戦争にかつものは、あらゆるものに勝つものなりと言ひても可也。日本國民の腦力よくして、智力にとめることは、單に日露戦争に徴しても、之を知るを得べし。元來、日本國民は、感情の民也。その感情や自我一方にあらざるを以て、眞によく物のあはれを知る。故に發して、優美なる言語となり、音調となり、文章となる。而して、世界無比の秀麗なる國土は、之と呼應して、茲に一種獨特優秀なる日本國民をつくり出せる也。

文章は、一種の技なれども、技巧のみのものに非ず。單に形式を説き、又單に思想を説くは、これ文章を見る所以に非ず。文章に於ては、實に人を見、國民を見る也。余は、この見地よりして、我國文の變遷を觀察せむと欲する也。日本國民の性情の美は、あつまりて、日本の文章にあり、日本文章史は、實に日本國民の性情の美をきはめむとする也。

文章と文學とは、自から別あり。文學は、文章の一部分なるが、別に韻文あるを以て、文章の圏外に出づ。文章は、散文のあらゆる文學をふくめる外に、政治上宗教上道德上の事にわたり、書牘にも及び、日本國民が内部の活動、外部の活動、一切

を包含す。文學よりは範圍更にひろし。從來の文學史には、今昔物語、神皇正統記の如きものをも加へたれど、これ嚴密に云へば、文學史よりも、文章史に屬すべきもの也。その外、文學の性質をはなれたるものに、名文多し。文章史は、文學史と相並びて、文藝上、必ず之を缺くべからざるもの也。

### 第二 上古の文章

我國の上古史は、大和民族の勃興史也。高天原より下りて、九州を平らげ、東して大和地方を平らげ、これより東に、西に、漸々化育を擴め、蝦夷に及ぼし、三韓にも及ぼせり。その活動めざましくして、雄壯なること、その比稀なるが、さりとて、猛惡殘虐なりしには非ず。日本人の日本人たる所以の特質は、既にこの際に發揮しつくせり。印度の如き極熱の地に住める民は、天恵に浴することも多けれども、むしろ天候の爲めに苦しみて、自然の前に苦悶し、終に萎縮して、茲に厭世思想を生じ易し。北歐の如き極寒の地に住める民は、天恵に浴することも少なく、止むを得ず、自から奮起すれども、やゝもすれば、反抗の餘殘酷となりて、溫和の情を缺

上古の日本國民

日本の天然

古語の特質

言靈の國

く。日本の如き、氣候その中を得たる處にありては、自然の前に萎縮することなく、さればとて、わざ／＼自然に反抗することもなく、よく自然と相融和し、自然を畏れ、自然を敬し、自然を愛す。其思想は、現世的也、樂天的也。これ今日にいたるまでも、日本人の精神を支配する根本の思想也。故に、優美なれども、柔弱ならず、武強なれども、猛惡ならず、長上を敬ひて、よく忠に、祖先を、尙びて、よく孝に、その性情は、誠實也、無邪氣也、輕快也、瀟洒也。古事記一部、よく之を證す。言語は、性情の反射也。かゝる性情を有せる日本國民の言語は、自から優雅ならざるを得ず。言語のみならず、音聲も亦性情の反射也。我古語を驗するに、『しや』『さや』『しよ』など云ふが如き拗音なく、『ばびぶべぼ』の半濁音なく、『ラ、リ、ル、レ、ロ』や、濁音の語頭に來ることなし、其音、優雅也、其言語も優雅也。武強無双、戈を執つて天下を闊歩する大和民族も、日本自然の美と相融和して、所謂武夫は物のあはれを知る。音聲言語にも、大に重きを置きたり。『言靈の幸はふ國』『言靈の助くる國』とは、古書に散見する所也。これ言語に靈ありと信じたる也、例へば、幸コトくあれと云へば、その幸の語に靈驗ありて、眞に幸あること、思へる也。心既に誠實也、發

して言語となるも、亦同じく誠實なるを以て、言靈の感を抱きたるも、亦偶然にあらず。従つて言語の美を尙び、よく言語の美を發揮して、宇宙間有数の優雅なる文章をつくり成したることは、祝詞宣命に、その痕跡を留めたり。

いづれの國民も、詩は、文にさきだつ。日本國民も亦之を免れず。所謂神世にも歌多く、神武天皇以後も、歌は世々にたえず、上古の歌は、古事記と日本書記とに残れり、残れるは、一部分に過ぎざるべし。文章も、亦神代にありたれど、惜しいかな、今に傳はらず。天照大神が天岩戸に隠れ給ひし時、天兒屋根命が告白せし言、非常に美はしかりければ、大神爲めに心動き給へりとあるを見れば、その言ひしことは、さはめて優美にして、祝詞の如きものなりしや、必せり。

余は、文章史を草するに際して、假名の發明なかりしまでの世を、上古と稱す。即ち奈良朝の末まで也。この時代には、立派なる言語あり、立派なる文章ありしかど、文字は無かりし也。漢字入りて、はじめて、文字あり。漢文も起れり。後、世書物の上より見れば、はじめてあらはるゝは、國文にあらずして、漢文也。聖德太子の憲法十七條の如きもの、これ也。既にして、文字上は漢文の如く逆讀する中に、國

文字なき時代

上古の文章の種類

文をそのまゝ、うつしたるもの起れり。古事記、風土記の如きもの、これ也。更に進みて、逆讀することをさけ、漢字の音を假り、訓を假りて、國語をうつすに至れり。所謂萬葉假名也。おもに奈良朝時代の歌をあつめたる萬葉集は、この書きかた也。祝詞、宣命も、大躰は之に據れり。文字なき時代あるも、漢字をかきし時代、散逸せし所は、頗る多かるべけれども、なほ歌は、古事記、日本書記、萬葉集に残り、文章は、祝詞、宣命、古事記に残り、燦として、上古の文化をあらはし、日本國民の性格をあらはせる也。

上代の文章として残れるもの、種類は、一、神に告ぐるもの也、二、君の詔也、三、臣下の奏上也、四、歴史也。これ以外の文章は、今日に傳はらず。されど、傳はるも、種類は、ほゞ之につきたるべし。

日本は、古來敬神の國也。誠實敬虔なる日本國民は、眞面目に神を敬し、上下風をなせり。政は祭事なるを見ても、その一般を知るべし。既に神を敬す、神に對する告白なきを得ず。かく敬神の風盛なるを以て、我國の文章は、既に神代に起れり。日本の文章は、實に敬神より出でたる也。その痕、祝詞に残れり。

敬神と文章

忠君と文章

我國は萬世一系の皇統をいたゞける國也。天皇、臣民に對しては、詔あり、臣民、天皇に對しては、上奏あり。その天皇は、所謂現つ神也。現代の神也。先代の天皇が神也。神と君とは、幾んど一體にして、敬神、忠君その揆、一也。日本の文章は、また實に忠君より出でたる也。その痕、宣命に残れり、壽詞に残れり。

祖先崇拜と文章

日本は、祖先敎の國也。一家にありて、その祖先を崇敬するのみならず、ひろめて、君に及ぼし、君の祖先、即ち神に及ぼせり、祖先の遺言、遺事は、實に國民の道德經也、他に聖典を要せざる也。爐邊に祖先の遺事を語りつたへて、子孫自から化せし也。かくて、文章起る。その朝廷に傳はれるは、古事記也。家々に氏文あり、高橋氏文の如き、これ也。

かくて、上古の文章の一部は、今日に傳はれることなるが、この時代の文章は、神に告ぐるの文也、君につぐるの文也、詔也、祖先の遺功也。従つて、自から言語の粹也、日本國民の精神の粹也、日本國民の性格、こゝに全く活躍し來る。

祝詞

神に對するの告白は、祝詞に残れり。これ日本文の最も古きもの也。茲に先づその實例を示さむに、

大祓の詞

大祓の詞(祝詞)

集侍れる親王、諸王、諸臣、百官人等、もろ／＼聞こし召せと宣る。

天皇が朝に仕へまつる、ひれ挂くる伴の男、たすき挂くる伴の男、鞆負ふ伴の男、太刀佩く伴の男、伴の男の八十伴の男をはじめ、官々に仕へまつる人等の、過ち犯しけむ、くさ／＼の罪を、今年六月晦の大祓に、祓ひ給ひ清め給ふことを、もろ／＼聞こしめせと宣る。

高天原に神留ます、皇親神漏岐、神漏美の命もちて、八百萬の神等を、神集へつどへ給ひ、神議りはかり給ひて、わが皇御孫の命は、豊葦原の水穗の國を、安國と、平らけく、しろしめせと、事よさしまつりき。

斯くよさしまつりし國中に、荒ぶる神等をば、神問はしに問はし給ひ、神掃ひに掃ひたまひて、語問ひし磐根樹立、草の垣葉をも、語止めて、天の磐座放ち、天の八重雲を、いづの千別にちわきて、天降しことよさしまつりき。

斯くよさしまつりし四方の國中と、大倭日高見の國を、安國と定めまつりて、下つ磐根に、宮柱ふとしき立て、高天原に、千木高知りて、皇御孫の命のみづの

御舍仕へまつりて、天の御蔭、日の御蔭と隠りまして、安國と平らけく知しめさむ國中になり出て、天の益人らが、過ちをかしけむくさく、の罪事は、天の罪とは、咩放ち、溝埋め、桶放、頻蒔、串刺、生剝、逆剝、尿戸、こゝだくの罪を、天つ罪と法わけて、國つ罪とは、生膚斷、死膚斷、白人、胡久美、己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪、畜犯せる罪、昆虫の災、高津神の災、高津鳥の災、畜、虫物なせる罪、こゝだくの罪いでむ。

斯く出でば、天つ宮事をもちて、大中臣、天つ金木をもとうち切り、未うち斷ちて、千座の置座におき足らはして、天つ菅を、本かり斷ち、未刈りきりて、八針にとりさきて、天つ祝詞の太祝詞ごとを宣れ。

斯くのらば、天つ神は、天の磐門を、あしひらきて、天の八重雲を、いづの千別に千別きて、聞こしめさむ。國つ神は、高山の末、短山の末に上りまして、高山のいほり、短山のいほりを、かさわけて、聞こしめさむ。

斯く聞こしめしてば、皇御親の命の朝廷をはじめて、天の下四方の國には、罪といふ罪は、あらじと、科戸の風の、天の八重雲を、吹さはなつことの如く、朝の

御霧、夕の御霧を、朝風、夕風の吹きは、らふことの如く、大津べに居る大船を、舳ときは、なち、艦とき放ちて、大海原におしはなつことの如く、彼方の繁木が、本を、燒鎌の利鎌もちて、うち拂ふことの如く、遺る罪は、あらじと、祓ひ給ひ、清め給ふことを、高山の末、低山の末より、さくなだりに、落ちたぎつ、早川の瀬に、ます瀬織津姫といふ神、大海原にもち出でなむ。

斯くもちいていなば、荒鹽の鹽の八百道、の鹽の八百會に、ます、速開都姫といふ神、もちかゝ、吞みてむ。

斯くかゝのみてば、氣吹戸に、ます氣吹戸主といふ神、根の國底の國にいぶき放ちてむ。

斯くいぶき放ちてば、根の國底の國に、ます速佐須良姫といふ神、もちさすらひてむ。

斯く失ひてば、天皇が朝に仕へまつる、官人どもを始めて、天の下、四方には、今日よりはじめて、罪といふ罪は、あらじと、高天原に、耳ふりたて、聞くものと、馬ひきたて、今年の六月晦日の夕日のくだちの大祓に、祓ひ給ひ、清め給ふ



ことをもろく聞こしめせと宣る。四國のト部ども、大川道に、もちまかり出で、祓ひやれと宣る。

日本國民の聖典

祝詞の文章の美

大祓とは、毎年六月三十日に朝廷にて行はれし祭事にして、百官臣民を集めて、神に祈りて、天下一同の罪障災害を祓ひ給ふ祭式也。現世主義なる日本國民は、妄りに未來の冥福を祈りて安心立命すべくもあらず。されど、さすがに犯せる罪を悔む、もろくの災害を恐るゝの念なしとせず。之を察して、大祓は起れり。もとより忠君の臣也、敬神の民也、皇城の前、朱雀門の外、祭儀肅々、威儀堂々、百官臣民一つになりて、最も優雅なる文章を、最も優雅なる音聲に言ひあらはすを聞きては、誰か感動せざるものあらむ。仰いて神徳を思ひ、君恩を思ひ、俯して一身を顧みて、邪念全く失せ、清淨潔白なる身の心地して、茲に全く安心立命を得たり。大祓の詞は、實に日本國民に於ける聖典といふも可也。

なほ立ち入りて、大祓の詞の如何なるものなるかを驗せむに之を讀みあぐるは、世々祭儀をつかどれる中臣氏也。『聞こしめせと宣る』とは『天皇の勅令を聞き給へと中臣が申し聞かす』との意也。第一節、先づ集れる人に謹聽せよと宣

言し、第二節、蒼生一般の罪科を祓ふ旨を告げ、第三節、天孫降臨の由來を説き、第四節、天孫の功業を説き、第五節、天皇の恩恵を説きて、庶民の罪の種類を示し、第六節、その罪を除く方法をとき、第七節、山岳を聯想して、神祇の照臨を説き、第八節、巧なる譬喩を以て罪障のはらはるゝ様を形容し、第九節、川を聯想して、罪を川神に托し、第十節、海を聯想して、海神に托し、第十一節、氣吹戸に移し、第十二節、根の國に移し、第十三節、一篇を總束して、罪障の全く消えたるを説く。層々順序ありて、所謂一糸紊れず。この中に山水の壯大もふくまれ、神明の徳もふくまれ、國躰の淵源もふくまれ、當時の人情上、國民が安心を得べき條件は、すべて含まる。これを除きては、日本國民の聖典は無し。日本の國躰に於てはじめて見るべき最も尊嚴高大なる大文章也。祝詞の中にも、この文が、最も有名也、最も美をきはめたるもの也。第三、四、五節あたりの國躰を説けるは、實に日本獨特也、他の祝詞にも見えず、柿本人丸などの長歌にも及べり。人をして自から國躰の尊きを感じしむ。『下の磐根に、宮柱ふとしき立て、高天原に千木高知る』の語、皇居を形容して、壯と美とをきはめたり。第八節『科戸の風の天の八重雲を吹きはなつことの如く、

朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹きはらふことの如く、大津べに居る大船を舳  
とき艦とき放ちて大海原におしはなつことの如く、彼方の繁木が本を焼鎌の利  
鎌もちてうち拂ふことの如く」と面白き形容、滾々出て、盡きず、よくも、かく人  
を動かすに切なる言ひ方を爲せるもの哉。「さくなだりに落ちたぎつ」の語に  
て、溪流のさまよくあらはれ、「荒鹽の鹽の八百道の八鹽道の鹽の八百會」と鹽  
の字をかさねて、怒濤さかまく大海の様、眼前に躍動す。徹頭徹尾、日本語の特長  
をつくし、その中に、國民性の粹をふくめり。古語なれども、さまで今人にも解し  
難からず。唯罪の種類は、解し難きものあり。且つ上古の人情風俗を知るたよ  
りにもなることなれば、茲に畧解して見ひに、まづ、「天つ罪」の方の「畔放」と  
は、田の畔を切り放ちて界をみだること也。「溝埋」とは、田に水を引く溝を破壊  
すること也。「樋放」とは、水田用にたくばへたる池の水を出す也。「頻蒔」とは、  
時をはからずに幾度となく種をまくこと也。「串刺」とは人の入るを防がむと  
て、串をかくし刺して、一寸人をこまらせること也。「生剝逆剝」とは、生きたるま  
ゝの動物の皮を剥ぐこと也。逆剝は、生剝の一層意地わるき者にて、尻尾より剝

ぎはじめて、その苦しめるさまを面白半分に見物すると也。「屎戸」とは、處を擇  
はず、大便すること也。以上は所謂天つ罪なるが、みな、寧ろ滑稽なる小兒的のい  
たづら也。これらは、素盞鳴尊が犯したまひたる所なるが、高天原民族は、さげめ  
て、純潔無邪氣にして、罪といふ罪は、これ以上の事はなかりし也。姦惡ならざる  
日本人の祖先の性情は、この天つ罪の種類にても想像することを得べし。高天  
原民族の罪を天つ罪と云へるに對して、他の征服せられたる民族の罪を國つ罪  
と稱す。これとても、動物の自然に出て、姦惡といふことは無けれど、天つ罪に  
比すれば、大に下品也、天つ罪が小兒的ならば、國つ罪は、動物的也。「生膚斷」とは、  
生人に傷をつけること也。「死膚斷」とは、死人を傷けること也。今も清國人露  
國人には、之を爲すものあること、日清戦争と日露戦争とにあらはれたり。「白人」  
とは、肉色の白く變じたるものにて、潔癖なる日本國民は、忌みきらひて、これを罪  
としたるものと見ゆ。「胡久美」とは、寄肉也、身軀上の異形也。「己が母を犯せる  
罪」は、母を姦淫する也。「己が子を犯せる罪」は、娘を姦淫する也。「母と子とを  
犯せる罪」は、女を娶りたる上に、その女が他にて生みたる娘と通ずる也。「子と

母とを犯せる罪』は、妻の母と通ずる也。『畜を犯せる罪』は、畜類を姦すること也。『昆虫の災』は、蝮などの害、『高津神の災』は、雷の害、『高津鳥の災』は、鷲などの害、『畜作』は他の畜へる牛馬などを害すること、『蟲物なせる罪』は、恨をふくみて、他を呪ふこと也。天つ罪は、無邪氣なるいたづら也。日本人の本質こゝにあらはる。國つ罪にいたりて、動物に近づきたるもの多く、利己の念つよくなりて、不平怨恨をもふくむ。高天原民族には無かりしこと也。日本國民とても、人皇以後には、なほ悪き罪を犯したるものなれど、神代にありては、これくらゐの罪なりしなるべく、而して、これだけの罪として數ふるを見れば、祝詞は、神代の遺物なること自から明か也。

祝詞とは、宣り解き言の意にて、上下一般に通ずれども、今に祝詞として残れるは、神を祭る詞也。その數三四十、延喜式に見えたり。かくて、祝詞は、平安朝の世になりて、はじめて、文字にあらはれて、後世に備はるやうになりたるが、奈良朝時代の製作にかゝるもの多けれども、中には、神代よりつたはれるものもあり。日本最古の文章と見て可也。その文跡は、大稜の詞の冒頭の如きは、『集侍親王諸

宣命

王諸臣、百官人等諸、開食止宣』とありて、漢字を假りて、逆續せざるやうにし、助詞は、細字を用ゐたり。之を見て、其一斑を知るべし。讀み難ければ、すべて、今の書き方にかへて、前に録出したる也。

宣命は、天子の詔也。文武天皇より桓武天皇にいたるまで、即ち奈良朝の詔は、續日本紀に出てたり。その數六十餘、かき方は、祝詞に同じ、後世宣命として傳はれものこれ也。この時代、別に漢文の詔もありて、相混交す。文武天皇以前にも、この體の詔ありしなるべけれど、日本書紀は、すべて、漢文にかきあらためたり。されば、今日に存せる宣命は、奈良朝のものなれども、それは神代以來の體をつげるものにて、祝詞につきて、日本最古の文章なりと云ひて可也。こゝに、最も先きに續日本紀にあらはれたる宣命を録せむに、

文武天皇即位の宣命

現つ御神と大八島國しるしめす天皇大命らまると宣り給ふ大命を、うこなはれる皇子等、王、臣、百官人等、公民もろく、聞こしめさへと宣る。  
高天の原に事はじめて、遠天皇祖の御世中、今に至るまでに、天皇御子の生れ

文武天皇即位の宣命

まさむいや繼ぎくゝに大八島國しらさむ次と、天つ神の御子ながらも、天に坐す神の依さしまつりしまにくゝきこしめしくる此の天つ日嗣高御座の業と、現つ御神と大八島國しろしめす倭根子天皇命の授けたまひ負せ給ふ、貴き高き廣き厚き大命を受けたまはり、かしこみまして、この食す國天の下を調へたまひ、平らげたまひ、天の下の公民を、恵み賜ひ、なてたまはむとなも神ながら思ほしめさくと宣り給ふ天皇が大命をもろく聞こしめさへと宣る。

こゝを以て、百官人等、四方の食す國を治めまつれと任けたまへる國々の宰等にいたるまでに、天皇が朝廷の敷きたまひ、行ひたまへる國の法をあやまち犯すことなく、明き清き直き誠の心もちて、いや進みくゝて、たゆみ怠ることなく、つとめしまりて仕へまつれと宣り給ふ大命をもろく聞こしめさへと宣る。

故れ斯くのさまを聞こしめしさととりて、いつくしく仕へまつらむ人は、その仕へまつれらむ状のまにくゝしなく、讚め給ひ、上げたまひ、治めたまはむ

ものぞと宣りたまふ天皇が大命をもろく聞こしめさへと宣る

これ文武天皇が即位の時にし給へる詔也。わざとらしからずして、自から莊重也。古文の粹也。直接につたへずして、間接に傳ふるやうに言ひあらはせり。神代以來、中臣氏が詔勅を傳ふる役目なれば也。世々即位の時の宣命の式も、これと大同なるべけれども、日本書紀に漢譯せられて、本物の殘らざるは惜むべし。

神武天皇奠都の詔(日本書紀)

神武天皇奠都の詔の漢譯

自我東征、於茲六年矣、賴以皇天三威、凶徒就戮、雖邊土未清、餘妖尙梗、而中州之地、無復風塵、誠宜恢廓皇都、規摹大壯、而今運屬此屯蒙、民心朴素、巢棲穴住、習俗惟常、夫大人立制、義必隨時、苟有利民、何妨聖造、且當披拂山林、經營宮室、而恭臨寶位、以鎮元々、上則答乾靈授國之德、下則弘皇孫養正之心、然後兼六合以開都、掩八紘而爲宇、不亦可乎、觀夫畝傍山、東南樞原地者、蓋國之塙區乎、可治之、これ日本書紀に漢譯したる神武天皇奠都の詔也。これが宣命のまゝにて傳はり居らば、我が上古の文章上の偉觀なるべき也。

宣命は、詔勅なれば、自然に莊重也。されど、日本國民の性情の致す所、いやに、いかめしく構ふることなく、四角ばることなく、真情流露す。今左に光仁天皇が藤原永手の死を弔ひ給ふ宣命を録せむに、

藤原永手を弔ふ宣命

藤原永手を弔ふ宣命

藤原左大臣に宣り給ふ大命を宣る。  
大命にませと宣り給はく、大臣、明日は参りて來仕へむと待ちたまふ間に、やすまりて、参りてますことは無くして、天皇が朝をおきてまかりぬますと聞きしめして、おもほさく、偽まごかも、たはことをかも云ふ。まことにしあらば、仕へまつりし大政官の政をば、誰に任ましかも罷まりぬます、誰にさづけてかも罷まりぬます。うらめしかも、悲あはしかも。朕わがが大臣、誰にかも我が語らひけむ。誰にかも我が問ひさけむと、悔あはしみ、あたらしみ、痛み、かなしみ、大御泣おほみ泣なしますと宣り給ふ大命を宣る。

悔あはしかも、惜あはしかも。今日よりは、大臣のまをし、政は、聞しめさずやならむ。明日よりは、大臣の仕へまつりしすがたは、見そなはさずやならむ。月日か

さなりゆくまに、悲あはしきことのみし、いよく起るべきかも。歳時つものゆくまに、さぶしきこと、いよくまさるべきかも。朕わがが大臣、春秋のうるはしき色をば、誰にかも見そなはし弄あそびたまはむ。山川の清き處をば、誰と共にかも見そなはしあからへ給はむと、歎あはき給ひ、うれひ給ひ、おほましますと宣り給ふ大命を宣る。

みまし大臣の萬政ふさねもちて、怠りたゆむことなく、まげかたぶくるとなく、王、臣等をも、かれこれ、別わかく心なく、普ねく、平らけく申さひ、公民おほみの上をも、廣くあつくめぐみて申さひしこと、これのみにあらず。天皇が朝をしばらくの間も、罷り出て、休まうことなく、食たす國の政のよくなるべき状、天の下の公民のやすまるべきことを、且夕夜晝といはず、思ひはかり申さひ仕へまつれば、いそしみ、あきらけみ、おだひしし、樂もしみ思ほしつゝ、おほまします間に、忽たちちに、朕わがが朝をさかりて、まかりましましぬれば、言ことはむ術すべもなく、爲なむすべも知らに、悔あはし給ひ、わび給ひ、おほましますと宣り給ふ大命を宣る。また事わけて宣りたまはく、仕へまつりしこと、廣み、あつみ、みなし大臣の家

日本宣命の特色

内の子等をもはふりたまはず、失ひたまはず、めぐみ給はむ、起したまはむ、たづね給はむ、かへり見たまはむ、みまし大臣の罷路も、うしろ軽く、心もおだひに思ひて、平らけく、幸く罷りとほらすべしと宣り給ふ大命を宣る。

この宣命をよみまつりて、泣かざるものは人にあらざる也。左大臣の死をい、たみ、その功勞を思ひ、更に推してその遺孤を憐み給ひて、情いたり、辭いたり、言々肺腑より出て、至誠人を動かすの大文章也。股肱の重臣を悼み給へる至情、萬古この文より以上には出づべくもあらず。萬乘の尊を以てして、妄りに尊大ぶるさまなく、而かも自から莊重にして、真情流露す。宣命中の最も美なる文章にして、實に我上古文の花也。否、我國體、我國民の性格に於て、はじめて見るべき宇宙間有数の文字也。

壽詞

祝詞、宣命と共に、日本最古の文に數ふべきものあり。壽詞これ也。壽詞とは、臣下が朝廷に奉つる賀詞也。宣命と共に、朝廷に於ける君臣相對の文なるが、宣命は上より下るもの、壽詞は下より上りたてたつるものなれば、文のかき方、自から異ならざるを得ず。惜むらくは、家々言ひ傳ふるにとゞまりて、文字になりて残ら

中臣の壽詞

ざれば、今は之を見るを得ず。唯一つ藤原頼長の台記に、中臣の壽詞をのせたり。平安朝の末近衛天皇の時に、中臣清親が上りたるもの也。されば、これ平安朝の文なれども、上古以來、職掌として、中臣家が云ひつたへたるを、そのまゝに、唯末尾の年號姓名だけを入れかへらるものにて、上古の壽詞も、さまで之と異なりたるものにあらざるべし。

中臣の壽詞

現つ御神と大八島國しろしめす、大倭根子天皇が御前に、天つ神の壽詞を稱、辭定めまつらくと申す。

高天原に神留ます、皇親神漏岐神漏美の命をもちて、八百萬の神たちを集へたまひて、高天の原に事はじめて、豊葦原の瑞穗の國を安國と平らけくしろしめして、天つ日嗣の天つ高御座におはしまして、天つ御膳の長御膳の遠御膳と、千秋の五百秋に瑞穗を平らけく、安らけく、ゆにはと知ろしめせと、事任さしまつりて、天降りまし、後に、中臣の遠祖、天の兒屋根命、皇御孫の尊の御前に仕へまつりて、天の忍雲根の神を、天の二上に奉りあげて、神漏岐神

漏美命の前に、受けたまはり申しに、皇御孫の尊の御膳つ水は、うつし國の水に、天つ水を加へて、奉らむと申せと事教へ給ひしによりて、天の忍雲根の神、天の浮雲に乗りて、天の二上へのぼりまして、神漏岐神漏美の命の前に申せば、天の玉櫛をことよさしまつりて、此の玉櫛を刺したて、夕日より朝日にいたるまで、天つ祝詞の太祝詞を以ちて宣れ。斯く宣らば、まちは、わかびるに、ゆつ五百篋生ひ出でむ。その下より天の八井出でむ。此をもちて、天つ水と開しめせと、事よさしまつりき。斯くよさしまつりしまに、聞くしめす、ゆには、の瑞穂を、四國の卜部ども、太占の卜事をもちて仕へまつりて、悠記に、近江國の野州、主基に、丹波の國の氷上を齋ひ定めて、物部の人ども、酒造兒、酒波粉走、灰焼薪採、相作、稻實の公等、大嘗會の齋場にもちゆまはり参る來て、今年十一月の中つ卯の日に、ゆしり、いづしり、持ちかしくみ、かしこみも清まはりに仕へ奉りて、月の内に日時を選びさだめて獻る、悠記主基の黒木白木の大御酒を、大倭根子天皇が天つ御膳の長御膳の遠御膳と、汁にも、實にも、赤丹の穂にもさこしめして、豊の明りに明りまして、天つ神の壽詞を稱辭

氏文

史傳の文

定めまつる、皇神等も、千秋五百秋の相嘗に、あひうづのひまつり、かきはに、常磐に齋ひまつりて、いかし御世に榮えしめまつり、康治の元年よりはじめて、天地月日と共に、照し、明らし、ましまさむことに、本未傾けず、いかし槍の中と、りもちて仕へまつる中臣祭主、正四位上行、神祇大副、大中臣朝臣清親、壽詞を稱辭と定めまつらくと申す。

又申さく、天皇が朝に奉へまつる、親王等、王等諸臣、百官人等、天の下四方の國の百姓もろく、うこなはりて見たべ、尊みたべ、歎びたべ、聞きたべ。天皇が朝に、いかし世に、八桑枝の立ちさかえ仕へまつるべき禱を、聞こしめせと、恐みくも申し給はくと申す。

なほ日本最古の文章として見るべきは、史傳也。史傳は、實に日本國民の教典也。祖先崇拜の民にして、かねて、言靈を尊ぶ民也。むかしの儘にかたりつぎ、年代を経るも、すたらざりしが、その朝廷につたはりしものは、古事記となり、地方々々につたはりしものは、風土記となり、家々につたはりしものは、氏文となりぬ。

風土記

氏文は、高橋氏文、その一例として、今にれ残り。この書は、延暦十一年に、高橋氏より朝廷に上りたる高橋氏の歴史也。之を文字にあらはしたるは、平安朝のはじめなれども、祖先以來の言ひつたへをかきたるものなれば、やはり、上古の文也。世下るに従ひて家々の歴史といふことは、稀になりたれど、祖先崇拜の國柄なれば、單に系圖となりて残りて、今にいたるも、なほ上古の氏文の痕跡を存す。

風土記は、元明天皇の世に、國々に命じて奉らせたるものにして、一種の地誌也。されど、その中に、面白き史傳あり。各國の古老の言ひつたへたる言をそのまゝに録せるものにて、一種の地方史也。

國 引出雲風土記

出雲風土記の  
一節

意宇と名づくる故は、國引きませる八束水臣津野命の宣り給はく、八雲立つ出雲の國は、狹布の稚國なるかも。初國小さく作らせり。故れ作りぬはむと、宣り給ひて、栲衾、新羅の三崎を國の餘ありやと見れば、國の餘ありと、宣り給ひて、童女の胸鉏取らして、大魚のさだ衝きわけて、旗薄穗ふりわけて、みつよりの網打かけて、しもつゝらへなく、に、河船ものそろく、に、國來くと、

引き來縫へる國は、こづの打絶よりして、八穗に杵築の御崎なり。斯くて、かため立てしかしは、石見國と出雲國との塚なる三瓶山これなり。また持ちひける網は、その、長濱なり。また北門崎の國を、國の餘ありやと、宣り給ひて、童女の胸鉏取らして、大魚のさだ衝きわけて、旗薄穗ふりわけて、みつよりの網うちかけて、しもつゝらへなく、に、河船ものそろく、に、國來くと、引き來縫へる國は、たぐの打絶よりして、狹田の國これなり。また北門ぬなみの國を、國の餘ありやと見れば、國の餘ありと、宣り給ひて、童女の胸鉏とらしめて、大魚のさだ衝きわけて、旗薄穗ふりわけて、みつよりの網うちかけて、しもつゝらへなく、に、河船ものそろく、に、國來くと、引き來縫へる國は、たぐひの打絶よりして、關見の國なり。また、こしのつぬの三崎を、國の餘ありやと見れば、國の餘ありと、宣り給ひて、童女の胸鉏取らして、大魚のさだ衝きわけて、旗薄穗ふりわけて、みつよりの網うちかけて、しもつゝらへなく、に、河船ものそろく、に、國來くと、引き來縫へる國は、三穗の崎なり。もち引く網は、夜見島なり。かため立てしかしは、伯耆國大神岳これなり。今は、國引



き終へぬと、宣り給ひて、意字の森に御杖つきたて、意惠と宣り給ひき。故れ、意字といふ。

これ出雲風土記に出てたる所にして、一種古雅なる文章也。出雲風土記の外、常陸風土記、肥前風土記、豊後風土記、播磨風土記は、そのまゝに、今につたはれり。この外の風土記は、みなうせて、時に断片を諸書にとゞむるに過ぎず。時に面白き史傳もあれど、大抵乾燥無味也。こゝに録せる國引の如きは、風土記中、稀に見るの明文にして、世に有名なるもの也。

史傳の朝廷につたはりしものは、古事記となりて、文字に上りぬ。天武天皇、古傳の散逸せむことを憂れさせ給ひ、稗田阿禮きはめて強記なりければ、之に命じて古來の傳説を讀み習はしめ給ひしが、元明天皇、太安麻呂に命じて、稗田の記懸せるまゝに筆記せしめ給へり。これ古事記也。日本書紀にさきだつこと、數年也。安麻呂は、書紀の編纂にも加はりたる能文の士なるが、古事記は、逆讀するやうに書きたるも、純粹の日本語にして、漢文にあらず、漢譯にあらずるやうに書けり。

古事記

古事記の一節

天の岩戸(古事記)

故れ、こゝに、天照大御神、見かしこみて、天の岩屋戸をたて、さしこもりまし。くき。すなはち、高天原みな暗く、葦原中國ことくにくらし、こゝに、よるづの神のおとなひは、狭蠅なすみな涌き、よるづの妖は、ことくくに起りき。こゝをもて、八百萬の神、天の安の河原に神集ひ、ひとひて、高御産巢日神の子、思金の神に思はしめて、常世の長鳴鳥をあつめて鳴かしめて、天の安の河の河上の天の堅し石を取り、天の金山の鐵を取りて、鍛人天つ麻羅をまぎて、伊斯許理度賣の命に科せて、鏡をつくらしめ、玉祖命におほせて、八尺の勾瓊、五百つのみすまるを作らして、天兒屋命、太玉命をよびて、天の香山の眞男鹿の肩をうつぬきに抜きて、天の香山の天のは、かを取りて、トヘまがなはしめて、天の香山の五百つ眞神を根こじにこじて、上枝には、八尺の勾瓊、五百つみすまるの玉をもちつけ、中つ枝に、やた鏡をとりかけ、下枝に、白にぎて、青にぎてをとりして、このくさくさの物は、太玉命、太御幣と、取りもたして、天兒屋命、太祝詞言ねぎ申して、天手力男神、戸のわきに隠りたゝして、天鈿女命、天の

香山の天の日影をたすきにかけて、天のまさきをかづらとし、天の香山の笹葉をたぐさに結びて、天の石屋戸に桶をふせて、踏みとゞろこし、神懸りして、胸乳をかきいで、裳紐をほとになし垂れき。爾れ高天原ゆすりて、八百萬の神ともに笑ひき。

こゝに、天照大御神、あやしとおもほして、大石屋戸をほそめにひらきて、内より宣りたまへるは、わがこもりますによりて、天の原自からくらく、葦原の中國もみな暗けむと思ふを、なとて、天鈿女命はゑらぐ、また八百萬の神もろく、笑ふぞと宣りたまひき。

すなはち、天鈿女命申さく、なか命にまさりて、貴き神いですが故に、ゑらぎ笑ふと申しき。かく申す間に、天兒屋命、太玉命、其鏡をさしいで、天照大御神に見せまつるときに、天照大御神、いよ、怪しとおもほして、や、戸より出て、臨みます時に、そのかくり立てる天手力男神、その御手を取りて、ひき出しまつりき。すなはち、太玉命、しりくめ繩をもちて、そのみしりへに引きわたして申さく、こゝより内に、な還りいりましそと申しき。故れ、天照大御神い

てませる時に、高天原も、葦原の中國も、ちのづから照りあかりき。

これ古事記中の一節也。古事記は、今日に傳はれる國文の歴史の最も古きもの也。稗田の記臆は、奈良朝のものもあれど、神代の部あたりは、神代そのまゝの傳説もあるべし。三卷あれど、下巻よりは中巻が面白く、中巻よりも上巻が面白く、上巻にて、日本最古の文章の一斑を見るべし。古事記は、飾らず、つくらず、素朴にして簡勁也。祝詞、宣命の幾んど全く接續詞なきと異なりて、非常に接續詞の多きは、文牒の幼遅にもとづく點もあれど、事實を記するには、自から免れざる所もあるべし。全篇にわたりて、輕快、無邪氣、更に進んで滑稽なる事實多く、文も之につれて、ねばり氣なく、從つて接續詞多きも、やはり當時の國民の性情のほどばしれる也。

以上、神に對する文、即ち祝詞、君臣相對する文、即ち宣命、壽詞、父祖の事跡を傳ふる文、即ち氏文、風土記、古事記にて、上古の國文はつきたり。されど、なほ漏れたる者を求むれば、古事記よりも早く成れりと云はれ、聖德太子の事を記せるものならむと想像せられ、而かも全部散逸して、一部わづかに、釋日本記に残れる上宮記

上宮記

も漢文の如く逆讀牀にかきて、國文に讀ましむる文也。もし今に残れるものゝ中にて、國語を漢文に寫したる文の最も古きものを求むれば、推古天皇の世に成れる法隆寺藥師佛光背の銘也。文字の上にはあらはれたる最古の國文なるを以て、原字のまゝに、こゝに録すべし。

法隆寺藥師佛光背銘

法隆寺藥師佛光背銘

池邊大宮治天下天皇、大御身勞賜時、歲次丙午年、召於大王天皇與太子、而誓願賜我大御病大平欲坐故、將造寺藥師像、作仕奉詔、然當時崩賜造不堪者、小治田大宮治天下大王天皇、及東宮聖王、大命受賜而、歲次丁卯年仕奉。

文として、何等見るべき所なければ、ともかくも、書の上に見ゆる最古の國文なるを以て、こゝに録する也。これより後十數年を経て成れる天壽國曼陀羅繡帳は、『斯歸斯麻宮治天下天皇、名阿米久爾意斯波留支比里爾波乃彌已等』といふが如き書き方にて、萬葉假名の先驅をなせるもの也。

ともかくも、祝詞、宣命、古事記にて、上古の國文は、つきたり。つきずといへども、粹はつきたり。連結語の特長として、助字にて自由自在につらなりて、同じ助字、い

天壽國曼陀羅繡帳

言文一致

上古の文章の特質

くたび重なるも、いとはず、優長にして、なだらかなるが、國文の特長也。漢語、漢文脈入るに及びて、口語と文章語と別れ、時代かはれるにつれて、死語多くなり、口語と遠ざかるにいたれども、上古にいたりては、通用語の外に死語幾んど無く、且つ漢語未だ入らず、のちに入りたるも、之を妄りに挿入せざりければ、我が上古の文は、言と文と一也。即ち言文一致體也。而して文字なくして、たゞ記臆に存せざるべからず。記臆に存せむには、諷誦しやすきやうに、きツかけをよくせざるべからず。かくて、重語、序語、枕詞、層疊句、偶對句など起れり。重語とは、『燒鎌の利鎌』『荒鹽の鹽の八百道の八鹽道の鹽の八百會』といふが如く、同じ字をかさねて、語意をつよむる也。序語とは、長きといふことを言ひ出さむために、『足引の山鳥の尾のしだりをの』と云ふが如し。歌にもあれば、文にもあり。枕詞とは、山をいふ爲めに、『足引の』をかぶらせる如し。祝詞に、願る多し。層疊句とは、大祓の詞の罪散る様を形容して、『如く』をいくつも重ねたるが如し。偶對句とは、『下つ岩根に宮柱ふとしまたて、高天原に千木高知る』といふが如し。これも祝詞に多し。されど、支那の六朝駢儷文の如く、對句のみにて、一篇をなさず。

その偶對句も、わざとらしからずして、きはめて自然なり。これ一種の句法として、永く文章の修辭法の一なるべき也。對話に入るゝ場合には、『曰く』の語にはさむも、古文の法也。『申さく』とはじめて、『申す』と結ぶが如し。殊に神に對し、君に對しては、自から眞面目になるものなるが、我國は何事も神がもとになり、皇室がもとになりて、文章もこれより起りたれば、こゝに國民の性情はいよ／＼醇によく日本國民性の粹を發揮せり。萬世一系の皇室は、實に國民の根本なるのみならず、亦我國文の由來する所也。

上古時代は、國文ありて、國字無かりし時代也。その國文や、全く漢文と組織を異にす、漢文より出てたるものにはあらざる也。されど、國文の用は、おもに朝廷のみに限ぎられて、それに國民性はあらはれたるが、個人間には、歌が行はれたり。記紀、萬葉の歌に、上古の個人性を見るべき也。

應神天皇の御世に、漢籍渡來して、日本の文明に、一大變化を與へたるが、履仲天皇の御世には、既に諸國に史官を置かれたり。その史官は、歸化人なりしなるべく、從つて漢文にて記せしなるべけれども、後世につたはらず。欽明天皇の世に

佛教つたはりてより、更に日本の文化に變化を與へたるが、今日に傳はれる最古の漢文は、おもに佛教に關するもの也。伊豫の碑、憲法十七條、法隆寺釋迦佛背銘など、最古の漢文なるが、いづれも推古天皇の世に出來たり。左に憲法十七條中の一節を摘出すべし。

憲法十七條中の一節

二曰、篤敬三寶、三寶者、佛法僧也、則四生之終歸、萬國之極宗、何世何人、非貴此法、人鮮尤惡、能教從之、其不歸三寶、何以直枉、

これ聖德太子のつくり給へる者にて、世に有名なるもの也。聖德太子は更に國史を編みたまひしが、やがて失せたり。今日に残れる漢文の國史にては、元正天皇の第六年、即ち養老四年に出來上りたる日本書紀を以て、最も古き者とす。國文の古事記は、之に先立つこと八年、即ち元明天皇の和銅五年に出來上りたるもの也。以後歴史は、漢文にてかゝるゝやうになりたり。古事記の如きは、本文は國文なれども、序文は、太安麻呂の作りたるものにて、立派なる者也。之よりさき、文武天皇の大寶元年に、律令成りたるが、これも漢文なり。詔勅は、國文の宣命

憲法十七條

日本書紀

律令

書簡

と漢文の詔勅と相まざり、段々漢文の方が多くなり、書簡も支那の尺牘にならひて漢文也。斯く漢文勃興して、國文屏息せしは、上古の世の有様なりしが、幸なる哉、假名の發明あり、一方には漢學ます、榮えしも、一方には國文も生面をひらけり。

茲に一括して、上古文の特質を言はむにまづ、着目すべきは、言語ありて、文字なかりしこと也。次に着目すべきは、文字なき故に文章はすべて目に訴へずして、耳にのみ訴へし也。従つて、言文一致也。既に耳に訴ふるの文なるを以て、人の注意をひかむとする場合には、偶對句もあり、されど、技巧を銜ひて、四六駢儷文の如く、偶對のみにては、かためず。これ支那の四六文と趣を異にする所也。耳にうつたへて、人を動かさかむとするものなれば、目で見ては、うるさきばかり、形容をならぶることもあり。單に山と早く言ひては、人の注意を惹き難ければ、『足引の』といふが如く、枕詞を用ゐること多し。これ、人の感情に訴へむとする自然の勢也。上古の文を見む者は、耳に訴へたるものとして、おもむろに之を味はさるべからず。次に、上古文の特色は、文に作の者名なきこと也。一身の名譽を得む

耳に訴ふる文

とて、作りたる者にあらねば、誇氣なく、衒氣なく、ありのまゝに、日本國民の性情をあらはせる也。現世的、樂觀的、快澗、誠實、無邪氣、剛健なる日本上古の國民性は、あらはれて、上古の文章となれり。漢文も、よほど巧になりたれども、漢文にては、國民の性格をあらはさむことは難し。上古の漢文は、名文として見るべきもの、無しと云ひても可也。

### 第三 平安朝の文章

平安朝四百年、その末造に、源平都に相闘ふまでは、最も太平なりし時代也、藤原氏の威福を弄したりし時代也、天台眞言の二宗新に起りて、佛教の感化多かりし時代也、漢學の盛になりたる時代也。之を人心の上に見れば、太平の餘弊と佛教の感化と漢學熱とを受けて、日本固有の武健素朴の氣風うせたりし時代也。之を文學上より見れば、漢詩漢文が、幾んど我國のものになりし時代也、されど、假名出來て、國文、即ち所謂中古文の勃興したる時代也。

漢文漢詩は、貴顯必須の藝能となり、娛樂となり、實用に供せられては、歴史とな

平安朝の文章の種類

り、詔勅となり、法令となり、官符となり、尺牘となれり。公の通用文は、實に漢文なりし也。國文起りたりとは云ふもの、漢文の如くは實用にやく立たず、娛樂が主にして、追々實用にも近けり。その種類を云へば、小説一也、紀行二也、逸話三也、序文四也、日記五也、隨筆六也、消息七也、史傳八也、歌論九也。國文の種類は、ほゞ之に盡きたり。

時代によりて別てば、宇多醍醐二天皇の際までは、漢詩漢文勃興したる時代也。和歌はむしろ振はざりし時代也。漢文にかきたる國史、即ち日本書紀とあはせて、六國史と稱せらるゝもの、出てたる時代也。以後、遣唐使やまりぬ。修史もやまりぬ。而して勅選集始まりぬ。和歌盛になりぬ。これより以前には、國文の書は、竹取物語と伊勢物語との二書あるのみなりしが、醍醐天皇の御世に、紀貫之出て、土佐日記あり。以後追ひ々女文字盛になりて、終に平安朝の双璧と稱せらるゝ紫清二女もいづるにいたれり。

平安朝は、漢文が實用に供せられたる時代也。されど、要するに、この時代の漢文は、支那の模倣也、四五駢儷の流を汲みて、浮華に陥りたり、巧みなる漢文家多く、

平安朝の漢文

巧なる漢詩人も多かりしかど、到底詩は、白氏文集以上に出てず、漢文は文選以上に出てざる也。延喜年間あたりまでに、續日本紀、日本後紀、續日本後紀、文德實錄、三代實錄の如き國史出てたり、弘仁格式、貞觀格式、延喜格式の如き法令書も出てたり。その他、古語拾遺、姓氏錄なども出てたり。詩集、文集も多く出てたり。一言すれば、我國の漢詩、漢文は、この際に成熟せり、一般の實用となり、士人の技藝となり、娛樂となりたり。されど、惜むらくは、六朝の四六文の眞似せしに過ぎず。文學としては、さまでの價值なき也。家集には、弘法大師の性靈集あり、都良香の都氏文集あり、菅原道眞の菅家文章あり、諸家の文をあつめたるものには、本朝文粹あり、以て其一斑を知るべし。一例として、左に弘法大師の文を録せむに、

弘法大師の文

慧果和尚之碑一節 (弘法大師)

嗚呼哀哉、天返歲星、人失惠日、筏歸彼岸、溺子一何悲哉、醫王匿迹、狂兒憑誰解毒、嗟呼痛哉、簡日於建寅之十七、下墜于城邱之九泉、斷腸埋玉、爛肝燒芝、泉扉永閉、愆天不及、茶蓼嗚咽、吞火不滅、天雲驟々現悲色、松風々應含哀聲、庭際綠竹葉如故、隴頭松檟根新移、鳥光激廻恨情切、蟾影幹轉攀新、嗟呼痛哉、奈若何、弟子空

海願桑梓則東海之東想行李則難中之難波濤萬々雲山幾千也來非我力歸非我志招我以鉤引我以索泛船三朝數示異數歸帆之夕縷說宿緣和尚掩色之夜於境界中告弟子曰汝未知吾與汝宿契之深乎多生之中相與誓願弘演密藏彼此代爲師資非只一兩度也是故勸汝遠涉授我深法受法云畢我願足矣汝西土接我足吾也東生入汝之室莫久遲留吾在前去也竊願此言進退非我能去留隨我師孔宣雖泥怪異之說而妙幢說金鼓之夢所以舉一隅示同門者也詞徹骨髓誨切心肝一喜一憂胸裂腸斷欲罷不能豈敢懼歎雖憑我師之德廣遠恐斯言之墜地歎彼山海之易變懸之日月之不朽

これ弘法大師が其師慧果を弔ふの詞也。全文長ければこゝに一節を録す。

弘法は日本の聖人也。萬能のあまりに漢詩漢文をもよくす。弘法は一面は平安朝初期の文星也この文以て其文藻を伺ふべし。

斯く漢文漢詩の盛なりし時代に假名出來たり。弘法の發明と稱すれども未だ信ずべからず。思ふに萬葉假名より次第に變化して一は片假名となり一は平假名となりしなるべく決して一人が一時の發明にはあらざるべし。假名が

假名の發明

竹取物語の文

出來たれば國文の書もぼつ／＼出來たるべけれど紀貫之以前のものにて今に残れるは竹取物語と伊勢物語と也。こゝに先づ竹取物語の文を示さむに、

竹取物語の一節

かぐや姫容世に似ずめてたきことを帝さこしめして俄に日を定めて御狩に出で給ひてかぐや姫の家に入り給ひて見たまふに光満ちけうらにて居たる人あり。これならむとおぼして近くよらせ給ふに逃げて入る。袖をとらへ給へば面をふたぎてさうらへど始めよく御覽じつれば上なくおぼえさせ給ひて許さじとすとて率ておはしまさむとするにかぐや姫答へて奏す己が身はこの國に生れてはべればこそつかひ給はめ。いとわておわし難くや侍らむと奏す。帝などか然あらむ猶率ておはしまさむとて御輿を寄せ給ふにこのかぐや姫きと影になりぬ。

はかなく口をしとおぼしてげにたゞ人にはあらざりけりとおぼしてさらば御供には率て往かじもとの御容となり給ひぬ。それを見てだに歸りなむと仰せらるればかぐや姫もとの容になりぬ。帝なほめてたく思しめさ

ること、せきとめ難し。かく見せつる造麻呂を悦び給ふ。さて仕う奉る百官の人々に、あるじいかめしうつかうまつる。

帝かぐや姫を留めて歸り給はむことをあかず口をしくおぼしけれど、たましひを留めたる心地してなむ、歸らせ給ひける。御輿に奉りて後に、かぐや姫に

歸るさのみゆき物憂くおもほえて、そむきてとまる、かぐや姫ゆゑ。

御返事を

菴はふ下にも年は経ぬる身の何かは玉の臺をも見む。

これを帝御覽じて、いと歸り給はむ空もなくおぼさる。御心は更に立ちかへるべくもおぼされざりけれど、さりとて夜を明し給ふべきにもあらねば、歸らせ給ひぬ。常に仕うまつる人を見たまふに、かぐや姫の傍に、寄るべきだにあらざりけり。こと人よりは、けうらなりと、おほしける人の、かれに思し合はすれば、人にもあらず。かぐや姫のみ御心にかゝりて、唯一人すぐし給ふ。よしなくて、御方々にもわたり給はず。かぐや姫の御許にぞ、御文

をかきて、通はせ給ふ。御返事さすがに憎からず聞えかはし給ひて、おもしろき草木につけても、御歌を詠みて遣はず。

かやうにて、御心を互に慰め給ふ程に、三年ばかりありて、八月十五日ばかりの月に出て居て、かぐや姫といたく泣き給ふ。人めは今はつゝみ給はず泣き給ふ。是を見て、親ども、何事ぞと問ひさわぐ、かぐや姫なくく云ふ、さきくも申さむと思ひしかども、必ず心惑し給はむものぞと思ひて、今まで過し侍りつるなり。さのみやはとて、打出て侍りぬるぞ。己が身は、この國の人にもあらず。月の都の人なり。それを昔の契ありけるによりてなむ、この世界には参うて來りける。今は歸るべきになりければ、この月の十五日に、かの本の國より迎に人々参うて來んず。さらずまかりぬべければ、おぼし歎かむが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなりと云ひて、いみじく泣く。

翁こはなでふことを宣給ふぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種の大さおはせしを、我たけ立ち並ぶまで養ひ奉りたる我子を、何人か迎へ聞



えむ。まさに許さむやと云ひて、我こそ死なめとて、泣きのしるごと、いと  
 堪へがたげなり。かぐや姫の曰く月の都の人にて、父母あり。片時の間と  
 て、かの國より參うて來しかども、かくこの國には、數多の年を経ぬるになむ  
 ありける。かの國の父母の事も覺えずこゝには、かく久しく遊び聞えてな  
 らひ奉れり。いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されど、己が  
 心ならず罷りなむとす、るといひて、諸共にいみじう泣く。  
 かゝる程に、宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家のあたり、晝の明さにも過ぎ光  
 りたり。望月の明さを十あはせたるばかりにて、ある人の毛の穴さへ見ゆ  
 るほど也。大空より人雲に乗りて降り來て、地より五尺許あがりたるほど  
 に立ち連ねたり。その中に、王とよぼしき人、屋の上へ飛車をよせて、いさか  
 ぐや姫、穢き所に、いかて久しくおはせむといふ。立ちこめたる所の戸、即、た  
 いあきに開きぬ。媼抱きて居たるかぐや姫、外に出で、御心惑ひぬ。文を  
 書き置きて罷らむ。戀しからむをりく取り出で、見給へとて、打泣きて  
 書くことは、この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬ程まで侍らて過ぎ別

れぬること、かへすく本意なくこそよぼえ侍れ。脱ぎ置く衣をかたみと  
 見給へ。月の出でたらむ夜は見おこせ給へ。見すて奉りてまかる。空よ  
 りも墮ちぬべき心地すと書きおく。

天人の中に持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。又あるは不死の藥入れ  
 り。一人の天人いふ、壺なる御藥奉れ。きたなき所のもの、きこしめしたれ  
 ば、御心地悪しからむ者ぞとて、持てよいたれば、いさゝか嘗め給ひて、少しか  
 たみとて、脱ぎ置く衣に包まむとすれば、ある天人包ませず、御衣を取ら出で  
 著せんとす。その時に、かぐや姫、しばし待てといひて、衣着つる人は、心こ  
 とになるなり。物一言いひ置くべき事ありと云ひて、文書く。

天人おそしと心もとながり給ふ。かぐや姫、物知らぬ事な宣給ひそとて、い  
 みじく靜かに、おぼやけに、御文奉り給ふ。あわてぬ様なり。かく數多の人  
 を給ひて留めさせ給へど許さぬ迎まうて來て、取り率てまかりぬれば、口を  
 しく悲しきこと、宮仕つかうまつらずなりぬるも、斯く煩しき身にて侍れば、  
 心得ずよぼしめしつらめども、心強くうけ給はらずなりにしこと、なめげな

るものに思しめしとゞめられぬるなむ心にとまり侍りぬ、とて、

今はとて天の羽衣さるをりぞ君をあはれとおもひいでぬる。

とて、壺の薬添へて、頭の中將を呼びて奉らす。中將に天人取りて傳ふ。中將取りつれば、ふと天の羽衣打ち着せ奉りつれば、翁をいとほし悲しとおぼしつるとも失せぬ。この衣着つる人は、物思もなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して昇りぬ。

その後翁、血の涙を流して惑へど、甲斐なし。かの書き置さし文を讀みて聞かせけれど、何せんにか命も惜しからむ。誰が爲にか何事もやうもなしとて、薬もくはず、やがて起きもあがらず病みふせり。

中將人々をひき具してかへり参りて、薬の壺に、御文添へてまゐらす。ひろげて御覽じて、いたくあはれがらせ給ひて、物もさこしめさず、御遊などもなかりけり。大臣上達部を召して、いづれの山が天に近きと問はせ給ふに、ある人奏す、駿河の國にある山なむ、この都も近く、天も近く侍ると奏す。これを聞かせ給ひて、

あふことも涙に浮ぶわが身には、死なぬ薬も何にかはせむ。

かの奉る不死の薬の壺に、御文具して、御使に給はす。勅使には、調岩笠といふ人を召して、駿河の國にあんなる山のいたゞきに、持て行くべきよし仰せ給ふ。峯にて爲べきやう教へさせ給ふ。御文不死の薬の壺ならべて、火をつけて燃すべきよし仰せ給ふ。そのよし承りて、兵士ども數多具して、山へ登りけるよりなむ、その山をふしの山と名名づけける。その煙いまだ雲の中へ立ちのぼるとぞいひ傳へたる。

竹取物語は、今日に傳はれる最古の小説也。平安朝の特産なる物語の祖也。

假名出来て始めて出来たる書也。素より斯る書が、忽然とひとり現はれ出づるものにあらず、必ずや支那小説の感化あるべし、また必ずや幾多の先驅者ありしなるべし。されど、思想も、形式も、外國にかぶれず。小説としては、空前なるが、その文は、踵を古事記に接す。古事記は、歴史也、竹取物語は、小説也。種類異なれば、一つに論ずるわけには行かざれども、竹取の文は、未だ直接に漢文の影響をうけず、古事記の文の一層發達して、且つ文學的となりたるもの也。古事記の如く簡

竹取物語と古事記

落語の落との祖

勁なれども古事記の如く、接續詞多からず、文章としては、一段發達せるもの也。剛健にして輕快なる日本男子の文也。かぐや姫は、作者が理性の女性也。元來日本の女性は、なびき易し。従つて、平安朝の風俗は、淫靡也。作者は、思ふに氣骨あるの士、かぐや姫の如き超人を描き來りて、あらゆる男子の甘言誘惑に引かれしめず、高根の花と高く標置す。その間、自から崇高にして痛快なる趣味あり。されど、日本の國體上、さすがに天皇の戀をよそにするに忍びず、さそふ水に、いなんとせし花の情をこめたり。されども、天上の種、久しく人間にとゞまるべからず、清く身を持して、飄然天に向つて去る。何等崇高の着想ぞや。短小なる小説なれども、作者の人格如何にも尊くして、實に日本文學史上に一大光彩を放てる小説也。而かも輕快なる日本人の性格あらはれて、到る處無邪氣なる滑稽多し。その滑稽も、事實上の滑稽也。文字上の滑稽も、少なからず。文字上の滑稽は、後世の日本文學に多き所なるが、その端は、既に古事記にもあり。竹取物語にも、子安貝をとり得ざるより、思ふことに違ふを「かひなし」と云ひけるといふが如き、文字上の洒落を各段の末に挿みたるは、後世の落語の所謂落ちの祖となれ

事實上の滑稽

るもの也。竹取物語一篇、崇高と滑稽とをかねて、その滑稽も、文字上のこそぐる滑稽のみならずして、事實上の滑稽ありて、文は簡勁にして素朴也。日本文學上の珍品なるのみならず、日本文學史上にも、上古より中古にうつる國文を代表したる唯一の傑作也。

伊勢物語

竹取物語と前後して、伊勢物語出てたり。竹取物語の作者は、わからず。伊勢物語の作者もわからざれど、思ふに、三人稱を用ゐたる在原業平の自叙傳也、歌を主とし、文をむしろ副としたる一種の日記也。同じ物語なれども、竹取の如き小説には非ず。その歌は、多くは業平の作也、事實も多く業平に關す。

業平朝臣の文

東下り (伊勢物語)

昔、男ありけり。その男、身を用なきものに思ひなして、京にはあらず、あづまの方にすむべき國もとめにとてゆきけり。もとより友とする人、一人二人して、もろともにいさけり。道しれる人もなくて、惑ひゆきけり。三河の國やつはしといふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもてなれば、橋を入つわたせるによりてなむ、八橋とはいひける。その澤のほ

とりの木の蔭にあり居て、かれいひ食ひけり。その澤に、かきつばたといふもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、かきつばたといふ五文字を上にするて、旅のこゝろをよめといひければ、よめる。

唐衣きつゝなれにしつましあれば、はるく來ぬる旅をしぞ思ふ。とよめりければ、皆人、かれいひの上に、涙おとして、ほとびにけり。ゆきく駿河の國にいたりぬ。宇津の山にいたりて、すゑなるめを見ること、思ふに、すぎやうじやに逢ひたり。斯る道には、いかでかはおはするといふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにて、文かきてつく。

駿河なるうつの山邊のうつゝにも、夢にも、人の逢はぬなりけり。富士の山を見れば、さつきのつごもりに、雪いと白う降り。

時しらぬ山は富士の根、いつとてかゝのこまだらに雪のふるらむ。その山は、こゝにたとへば、比叡の山をはたらばかり重ねあげたらむ程して、なりは鹽尻のやうになむありける。なほ行きくして武藏の國と下總との中に、いと大きな川あり、それを隅田川といふ。その河のほとりにむれ居

て、思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、わたしもり、はや船にのれ、日もくれぬといふに、乗りて渡らむとするに、皆人もわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、けさ鳥のはしと足と赤き、鳴の大きな水の上に遊びつゝ、魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見しらず、渡守に問ひければ、これなむ都鳥といふを聞きて、

名にし負はゞいざこと問はむ、都鳥むかしの人はありや無しやと。とよめりければ、船こぞりて泣きにけり。

これ伊勢物語中にて、最も長くつゞきたる文章なり。短句のみをかさねたること、歌の序としての用意もあるべけれど、またさつぱりしたる作者の性格にも、もとづくべし。業平は、平安朝初期唯一の大詩人也。その人多感多情にして、放縦不羈也、従つて、その歌、詞句に拘泥せずして、直に真情を吐露す。所謂歌を捏造するものにあらずして、天成の詩人也、伊勢物語の大半は、その歌にして、その文も、よく其歌に相應して、文字の末に層々たらず。歌も文も、必ず同人の手にいてたること、疑ふべくもあらず。業平死後の事實、時にまじれるは、後人の書き加へし

ものと見るべし。

思ふに、この際、假名出来たる便利に乗じて、國文の書多てたるべけれど、後世に傳はれるは、竹取伊勢の二物語のみ也。かくて、漢文漢詩は實用に供せられ、娛樂に供せられて、支那文學は、全盛をさめしが、醍醐天皇の延喜年間に、古今和歌集出でて、和歌こゝにまた盛になれり。國文も起れり。この際、歌人として、文章家として、月桂冠をいたゞけるものは、紀貫之也。

これ迄の國文は、作者の名はつたはらざれど、貫之にいたりて、その名はじめて、判然として傳はれり。古今和歌集の國文の序は、貫之の作也、大井川行幸和歌の序も、亦その作也。後年、更に土佐日記の著あり。これ我國紀行文の元祖也。先蹤ありしかも、知れざれど、後世に残れるものより見れば、貫之が先蹤也。貫之の作は、以上にとゞまれども、ともかくも、國文上に生面をひらけり。貫之を評するに先だちてその文を示さむに、

國文の古今集序

やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中に

文章家としての  
紀貫之

國文の古今集  
序

ある人事わざしげきものなれば、心におもふことを見るもの、聞くものにつけて、いひ出せるなり。花になく、鶯、水にすむ蛙の聲を聞かば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。ちからをも入れずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも、あはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、たけきもの、ふの心をもなぐさむるは歌なり。この歌、天地のひらけはじまりける時より、いで來にけり。しかはあれども、世につたはることは、久方の天にしては、下照姫にはじまり、あらがねの地にしては、須佐乃男命よりぞおこりける。千早ふる神代には、うたの文字もさだまらず、すなほにしてことの心わき難かりけらし。人の世となりて、須佐乃男命よりぞ、三十文字あまひいと文字はよみける。かくて、花をめで、鳥をうらやみ、霞をあはれび、露をかなしぶ心言葉多く、さまざまになりけり。遠きところもいて、たつ足もとよりは、じまりて、年月をわたり、高き山も、ふもとのちりひぢより成りて、あま雲たなびくまで、おひのぼれるがごとくに、この歌も斯くの如くなるべし。浪花津の歌は、みかどの御はじめなり。あさか山の言の葉は、采女のたはぶれよ

り咏みて、この二歌は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人のはじめにもしける。

抑、歌のさま、六つなり。からの歌にもかくぞあるべき。この六種のひとつには、そへ歌、大鷓鴣のみかどをそへ奉れるうた、浪花津にさくやこの花、冬ごもり今を春べと咲くやこの花。二つには、かぞへ歌、さく花に、ちもひつく身のあぢきなく、身にはたつきの入るもしらずて。三つには、なずらへ歌、君に今朝あしたの霜のちきていなば、こひしきことに、さえやわたらむ。といへるなるべし。四つには、たとへ歌、我戀は、よむとも盡きじ、ありそ海の濱のまさごはよみつくすとも。といへるなるべし。五つには、たゞこと歌、いつはりの無き世なりせば、いかばりひとの言の葉うれしからまじ。といへるなるべし。六つには、いはひ歌、この殿はひべもとみけり、ささくさのみつは、四つには、との作りせり。今の世の中、色につき、人の心花になりけるより、あだなる歌、果敢なきことのみ出でくれば、色ごのみの家に、うもれ木の人しれぬこととなりて、まめなるところには、花すゝき穂にいたすべきことにもあ

らずなりにたり。

そのはじめを思へば、かゝるべくなむあらぬ。古の世々の帝、春の花のあした、秋の月の夜ごとに、さふらふ人々を召して、ことにつけつゝ、歌をたてまつらしめ給ふ。あるは、花をこふとて、たよりなき處に、さまよひ、あるは、月を思ふとて、しるべなきやみにたどれる、心々を見たまひて、賢し愚かなりとしろしめしけり。しかあるのみならず、さゞれいしにたとへ、筑波山にかけて、君をねがひ、よるこび身にすぎたのしび心にあまり、富士の煙によそへて人を戀ひ、松蟲の音に友をしのび、高砂、住の江の松も、あひぢひのやうに覺え、男山の昔を思ひて、女郎花のひとしきをくねるにも、歌をいひてぞなくさめける。又春の朝に花のちるを見、秋の夕暮に木の葉のちつるをき、あるは、年毎にかゝみのかげに見ゆる雪と浪とをなげき、草のつゆ、水の沫を見て、わが身をおどろき、あるは、昨日は榮えをこりて、時をうしなひ、世にわび、親しかりしも、うとくなり、あるは、松山の浪をかけ、野中の水をくみ、秋萩の下葉をながめ、あかつきのしぎの羽がきを數へ、あるは、吳竹のうきふしを人にいひ、よしの

川をひきて、世の中をうらみ來つるに、今は富士の煙たゞずなりながらの橋もつくるなりとさく人は、歌にのみぞ心をなぐさめける。

古よりかく傳はるうちにも、平城の御時よりぞ、ひろまりける。彼の御世や、歌の心をしろしめしたりけむ。かの御時に、おほきみつの位柿本人麻呂なむ、歌の聖なりける。これは君も人も身をあはせたりといふなるべし。秋の夕、龍田川にながる、紅葉をば、みかどの目に錦とみたまひ、春のあした吉野のさくらは、人丸が心には雲かとのみなむ覺えける。又山部の赤人といふ人ありけり。歌にあやしく妙なりけり。人丸は赤人の上にたゞむこと難く、赤人は人丸の下にたゞむこと難くなむありける。この人々をおきて、又すぐれたる人も、くれ竹の世々にきこえ、かたいとによりく、絶えずぞありける。これよりさきの歌をあつめてなむ、萬葉集となづけられたりける。

こゝに古のことも歌の心をも知れる人、わづかにひとりふたりなりき。しかはあれど、これかれ得たる所得ぬ所、互になむある。彼の御時より、この

かた、年は百年あまり、世は十つぎになむなりける。古の事をも歌をも、知れる人、よむ人多からず。いまこの事をいふに、つかさ位たかき人をば、たやすきやうなればいれず。その外に、近き世にその名聞えたる人は、即ち僧正遍照は、歌のさまは得たれども、まこと少なし。たとへば、繪にかける女を見て、徒に心をうごかすが如し。在原業平は、その心あまりて、言葉足らずし、ぼめる花の色なくて、匂ひのこれるが如し。文屋康秀は、ことばたくみにて、そのさま身におはず、いはゞ商人のよき衣きたらむが如し。宇治山の僧喜撰は、ことばかすかにして、始め終りたしかならず、いはゞ秋の月を見るに、曉雲にあへるが如し。よめる歌おほく聞えねば、かれこれをかよはして、よく知らず。小野小町は、いにしへの交通姫の流なり。あはれなるやうにて強からず。いはゞ、よき女の歌なればなるべし。大伴黒主は、そのさま、いやし。いはゞ、薪あへる山人の花のかげに休めるが如し。この外の人々、その名きこゆる、野邊に生へるかつらの這ひひろごり、林にしげき木の葉の如くに多かれど、歌とのみ思ひて、そのさましらぬなるべし。

かゝるに、今すべらさの天の下、しろしめすこと、四の時こゝのかへりになむ  
 なりにける。あまねき御うつくしみの浪、八鳥の外まで流れ、ひろき御めぐ  
 みのかけ、筑波の麓よりも、しげくおはしまして、萬のまつりごととさこしめす  
 いとま、諸の事をすて給はぬあまりに、古の事をも忘れじ、ふりにしことをも  
 記し給ふとて、今もみそなはし、後の世にも傳はれとて、延喜五年四月十八日  
 に、大内記紀友則、御書どころのあづかり紀貫之、ささの甲斐掾官凡河内躬恒、  
 右衛門の府生壬生忠岑らにおほせられて、萬葉に入らぬ古き歌みづからの  
 をも奉らしめ給ひてなむ。それが中にも、梅をかざすより始めて、時鳥をさ  
 し、紅葉を折り、雪を見るに至るまで、又鶴龜につけて、君を思ひ、人をも祝ひ、秋  
 萩、夏草を見てつまをこひ、逢坂山にいたり手向を祈りあるは、春、夏、秋、冬にも  
 入らぬくさくさの歌をなむえらばせ給ひけるすべて、千うた、廿卷、名づけて  
 古今和歌集といふ。

かくこのたび集めえらばれて、山下水のたえず、濱の真砂のかずおほくつも  
 りぬれば、今の飛鳥川の瀬になるうらみも聞えず、さざれ石のいはほとなる

漢文の古今集  
 の序

喜のみぞあるべき。それ枕詞は、春の花匂ひ少なくしてむなしき名のみ秋  
 の夜の長きをかこてれば、かつは人の耳におそり、かつは歌の心に耻ぢ思へ  
 ど、たなびく雲のたちぬ、鳴く鹿のさきふしは、貫之らがこの世に同じく生れ  
 て、この事の時にあへるをなむ喜びぬる。人丸なくなりたれど、歌の事と  
 しまれる哉。たとひ時うつり事さり、たのしび、かなしび、往きかふとも、この  
 うたの文字あるをや。青柳の絲たえす松の葉のちりうせずして、まさきの  
 かづら永く傳はり、とりの跡久しくとまれば、歌のさまをも知り、ことの  
 心を得たちむ人は、大空の月を見るが如くに、いにしへを仰ぎて、今をこひざ  
 らめかも。

この文を評せむには、同じ序の漢文と比較せざるべからず。左にあはせ録せ  
 むに、

漢文の古今集序

夫倭歌者、託其根於心地、發其花於詞林者也。人之在世、不能無異思慮、易遷哀樂  
 和變、感生於志、詠形於言、是以逸者其聲樂、恐者其吟悲、可以述懷、可以發憤、動天



地感鬼神化人倫和夫婦莫宜於倭歌倭歌有六義一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌若夫春鶯之囀花中秋蟬之吟樹上雖無曲折各發歌謠物皆有之自然之理也然而神世七代時質人淳情欲無分倭歌未作逮于素盞鳴尊到出雲國始有三十一字之詠今反歌之作也其後雖天神之孫海童之女莫不以倭歌通情者也爰及神代此風大起長歌短歌旋頭混本之類雜體非一源流漸繁譬猶拂雲之樹生自寸苗之煙浮天之波起於一滴之露至如難波津之什獻天皇富緒川之篇報太子或事關神異或興入幽玄但見上占歌多存古質之語未爲耳目之翫徒爲教誡之端古之天子每良辰美景詔侍臣預宴筵者獻倭歌君臣之情由斯可見賢愚之性於是相分所以隨民之欲擇士之才也自大津皇子之初作詩賦詞人才子慕風繼塵移彼漢家之字化我日域之俗民業一改倭歌漸衰然猶有先師柿本大夫者高振神妙之思獨步古今之間有山邊赤人者並倭歌仙也其餘業倭歌者綿々不絕及彼時變澆漓人貴奢淫浮詞雲興艷流泉涌其實皆落其花孤榮至有好色之家以此爲花鳥之使乞食之客以此爲治計之媒故半爲婦人之有難進大夫之前近代存古風者纔三二人而已然長短不同論以可辨花山僧正尤得歌

體然其詞花而少實如圓畫好女徒動人情在原中將之歌其情有餘其詞不足如萎花雖少彩色而有薰香文琳巧詠物然其體近俗如賈人之著鮮衣守治山僧喜撰其詞華麗而首尾停滯如望秋月遇曉雲小野小町之歌古衣通姬之流也然飽而無氣力如病婦之着花粉大友黑主之歌古猿丸大夫之姿也頗有逸興而跡甚鄙如田夫之息花前也此外氏姓流聞者不可勝數其大抵皆以艷爲基不知歌之趣者也俗人爭事榮利不用詠倭歌悲哉悲哉雖貴兼相辨富餘金錢而骨未腐於土中名先滅於世上適爲後世被知者唯倭歌之人而已何者語近人耳義憤神明也昔平城天子詔侍臣令撰萬葉集自爾以來時歷十代數過百年其後倭歌棄不被採雖風流如野宰相雅情如在納言而皆以他才聞不以斯道顯陛下御宇于今九年仁流秋津洲之外惠茂筑波山之蔭淵變爲瀨之聲寂然閉口砂長爲巖之頰洋々滿耳思繼既絕之風欲興久廢之道爰詔大內記紀友則御書所預紀貫之前甲斐少目凡河內躬恒右衛門府生壬生忠岑等各獻家集并古來舊歌曰續萬葉集於是重有詔部類所奉之歌勅爲二十卷名曰古今倭歌集臣等詞少春花之艷名竊秋夜之長況哉進恐時俗之嘲退慚才藝之拙適遇倭歌之中興以樂吾道之

再昌嗟乎人丸既没倭歌不在斯哉于時延喜五年歲次乙丑四月十八日臣貫之等謹序

二者内容は、ほゞ同じ。漢文が、さきに出來たるか、和文が、さきに出來たるか、和文は、貫之の作と古來定まり居れど、漢文は同じく貫之の作なるか、他人の作なるか、これらは、古來未だ一定せる説あらず。余は獨斷の嫌あるかも知らねど、之に對して、斷定を下し、更に進んで二者の優劣を判し、以て貫之が文章家としての價値に及ばむとす。

先づ文字の上より見むに、漢文の冒頭には倭歌とあり、和文には、やまと歌とあり。當時、うたのをと、やまと歌と言ひしかも、知らねど、恐らくは倭歌を直譯したるものなるべしと思はる。次に、漢文には、『和歌有六義一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌』とあり。和文には、『抑歌のさま六つなり。からのうたにも、かくぞあるべき。その六くさの二つには、そへ歌。二つには、數へ歌。三つには、なずらへ歌。四つには、譬へ歌。五つには、たゞこと歌。六つには、祝ひ歌』とあり。これ詩經に於ける六義を、そのまゝ取りたるもの也。我國には、かゝる區

古今集の和漢  
兩序の比較

別なし。そへ歌以下の名目、強ひて、こじつけて名を付したるもの也。當時漢詩の流行きはめて盛なりしかば、我國にも六義ありなど、ハイカラ的に負け嫌ひの言をなしたるものにて、この句、前後に、毫も關係なくして、孤立す。ほんの見え坊の言也。和文の方に、『からうたにも斯くぞあるべき』と云ひたるは、甚だ輕薄にして滑稽也。堂々と勅選集に序すべき態度に非ず。漢文の方で、一寸見え坊の言を爲したるを和文にするに當りて、くどく言ひて、却つて、ぼろを出せる也。六歌仙の品評にいたりては、漢文が先にして、和文が後なること、益明か也。花のみにして實なき花山僧正の歌をたへて、漢文の方は、『如圖畫好女徒動人情』といへり。美なれども、繪也、生きたる美人の生動せるに若かずとの意よくあらはれたれど、和文の方には、『ゑに書ける女を見て、いたづらに心を動かすか如し』とあり。これは、畫美人の評にはならずして、生人ならぬ畫美人に戀れるたはけ者を譏る形容になる也、下手に漢文を譯し、そこなひたるなり。喜撰のうたを、『如望秋月遇曉雲』と云ひたるは、面白けれど、『秋の月をみるに、あかつきの雲にあへるが如し』と云ふに至りては、譯しそこないて、幾んど意味をなさぬ

もの也。『拂雲之樹生自寸苗之煙、浮天之波起於一滴之露』を言ひかへて、『出て立つ足もとより始まりて、歳月をわたり、たかき山もふもとのちりひぢより成りて、天雲たなびくまでおひのぼれるごとくに、このうたも、斯くの如くなるべし。』としたるは、たゞしき筆づかひにして、巧拙もとより同日の談に非ず。その他、和文の方には、たゞしき所多く、無理にこじつけて和譯したること、『時質人淳情欲無分、倭歌未作』の處に、『神代には、歌のもじもさだかならず、すなほにして、ことの心わきがたりけらし』としたるにて、その一斑を知るべし。漢文の方が、義理簡明、字句整齊にして、大に氣がきゝたり。この時代の一名文也。漢風盛にして、國風の振はざるを慨せるはよけれど、『適爲後世被知者、唯倭歌之人而已』といふにいたりて、穉氣あり、容氣あり、作者の人格小にして、必ずや年少者の作ならむと思はる。和文の方は、この點は、おほやう也、尊げあり。本朝文粹には、漢文の序は、紀淑望の作と署して出でたり。淑望は、貫之の甥也、年も必ず若かるべし、従つて、文にも、その年のわかきことがあらはる。この點にいたりては、貫之はさすがに、叔父だけの貫目あり。されば、二文とも、同じやうな事をいひ居れど、

國文上の新生面

作者の性格の異なりて、あらはるゝ處、漢文と和文とは、全く作者を異にす。漢學の盛なりし時代なれば、漢文の序を主として、和文のを副として、あはせのせたるものなるべし。

土佐日記

漢文との對比をはなれて、單に和文の序のみに就いて言はむに、これ、和文の序の元祖也。漢文の骨を傳へ、四六駢儷の風を移して、國文上に新生面をひらけるもの也。國文の歴史上、必ず、逸すべからざるもの也。なほ貫之には、大井川行幸和歌の序あり。これは、價值一層下りて、駢儷文の餘毒をうけて、浮華の詞を弄したるもの也、されど、これも古今集の序と同じく、後世に典型を残して、終に俳文を出すの基ともなれるもの也。斯く貫之の二序文とも、當時の漢學の感化をうけて、浮華の嫌あれども、後年作れる土佐日記にいたりては、簡勁素朴なる日本古文の趣を傳へ、しかも紀行文の祖となれり。竹取、伊勢に比するに、内容の面白さは、減ずれども、文致ほど同じく、巧緻時に二者を凌ぐ。出でし時代は、必ずおそかるべし。されど、三者鼎立して、平安朝の初期の散文を代表するもの也。三者とも、後世の典型となりたるものなれば、歴史的價值は、殊に大也。かく、貫之が、各

平安朝初期を代表する文章

方面に文章上の生面をひらきたるを見て、余は、之を文章の歴史上の一偉人とするもの也。その人となりや、詩人肌にはあらずして、循史肌の人也、その歌、感情の流露よりも、形式の構造に力を用ゐたる人也。真情流露、逸氣奔放の趣味を缺けども、形式の整へる上にて、和歌壇上にも、生面をひらきたり。貫之は、當時に於ける和歌の偉人也。貫之は、文字の上の詩人なれども、文字上のみ、詩人には非ず。なほ敦厚の風ありて、輕佻ならず。萬葉の風を傳へて、更に後世の歌風をひらけり。貫之以前は、修史時代にして、以後は勅選時代也。貫之は、恰もその過渡期に立てり。その形式を重んじたるも、要するに、時勢のいたす所也。

我國の文化は、よろづ、支那の影響を被れり。殊に遣唐使留學生の事ありて、うてば響くの譬の如く、神經の遲鈍ならずして、進取の氣象にとめる日本國民は、迅速に支那の感化を傳へたり。而かも模擬のみに甘んずるまでに獨創力なく、意氣地なき國民にはあらず。今單に之を文學の上に見むに、我國も、支那のかはるが如くに、かはれり。而して、模擬一方の民にあらざる證據は、そのかはり方を、國文國歌の上にも及ぼせり。

## 漢詩漢文の影響

この際は、支那にても、四六駢儷文の行はれたる際なれば、直に我國にも傳はりたり。當時の我國の漢文は、六朝の文也。詩の方は、唐にては、絶句律詩の如き所謂近躰の起りたる時也。我國も之を傳ふるのみならず、更に之を和歌にも及ぼせり。五七の古調が、七五の新調となりたるも、唐の近躰の影響ある也、長歌すたれて、短歌のみ盛になりたるも、唐に絶律の勃興したる影響也。駢儷文の偶對に苦心したる結果は、貫之の序文の如き浮華の詞となり、唐にて、賈島が『僧推月下門』の推を敲にせんかと三年間考へし事あれば、我國にて、都良香が、氣露風梳新柳髪と吟ずれば、空中聲ありて、『氷消波洗舊苔鬚』とつけたる事ありて、詞句に苦心すること、まづ漢詩に起り、ひいて和歌に、及び、真情流露、逸氣奔放の風なくなりて、修辭上に重きがおかるゝやうになりたる也。而して、之を國文國歌の上に發揮したるは、實に貫之也。以後、和歌の上に、少しく流弊をやぶりしものは、西行あるのみにして、定家、家隆にいたりて、終に修辭の極に達せる也。

竹取物語、伊勢物語、土佐日記は、所謂中古文の源流也。小説は、竹取物語にはじまり、宇津保物語、落窪物語を経て、源氏物語に至りて大成し、更に狭衣物語、濱松中

## 平安朝の小説

V

納言物語にいたりて、殘山剩水の觀あり。この外、小説といふべき物語頗る多し。一々あぐるにいとまあらず。又、名のみ傳はりて、本物の傳はらざるものも多し。されど、美は、源氏物語につきたり。

宇津保物語は、多くの男、一人の美人をしたひけるが、その女、終に皇子に嫁すといふ筋にて、竹取物語より出でたるもの也。落窪物語は、繼子なる一美人、繼母に虐けられしを、義侠なる少將すくひ出して、虐待のむくひに、繼母を懲らすといふ筋にて、強をくじきて、弱をたすくる日本人の性情をあらはせり。その懲らし方の甚しきに失するは、俠氣にとめる日本人の長所にして、かねて短所なるべし。この二者とも、竹取と源氏との中間にあるものにて、文章も、亦その中間にあるものと見て可也。簡勁にして氣力あるものを、竹取に代表さすれば、艶麗にして、やさしきものは、源氏に代表させざるべからず。竹取や、宇津保や、女一人に男多勢、男の描寫が得意なるを見ても、男性の作なることは、明か也。源氏物語は、之に反して、男一人に、女多勢、女の描寫が得意なるを見れば、必ずや、女性の作也、即ち日本有數の才女、紫式部の作也。

源氏物語

源氏物語の前に、源氏物語なく、源氏物語の後に、源氏物語なし。千古不朽の大文學也。大なる小説として、日本國民が永遠に誇りとするに足るべきもの也。よく當時の風俗人情を描き、而かも之を詩化し、描寫精をつくし、微をきはめ、人物紙上に動き、光景もまのあたりに見るが如く、殊に同情に富める筆致、艶にして麗也。糸をくるが如く、ずる／＼と麗句永くつゞきて、流暢宛轉、つふさに王朝の文の美をきはめたり。既に女の文章也。その弱々しきは、當然也。殊に佛教の盛なりし時代なれば、何となく陰氣くさきも、亦止むを得ざることも也。物語の美が源氏物語につくると共に、所謂女文章の美は、紫式部につきたり。式部別に紫式部日記あれども、これは、さまで價值もなければ、讀んで面白くも無し。源氏の中、到る處、すべて、妙文也。雨夜の品定、陋巷の夕顔、桐壺の終焉、殊に宇治十帖筆熟して、あはれ深きは、世の熟知する所也。

東山の夕 (紫式部)

日もいと長きに、つれづれなれば、夕ぐれのいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとにたちいで給ふ。人々は歸し給ひて、惟光ばかり御供にて、の

紫式部の文

ぞきたまへば、たゞかの西面にしも、持佛すゑ奉りて、行ふ尼ありけり。籬少しあげて、花たてまつるめり。中の柱によりゐて、脇息の上に、經を置き、いとなやましげに誦みゐたる尼君、たゞ人と見えず。四十あまりにていと白くあてに、瘦せたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうちくしげにそがれたるすゑも、なか／＼長さよりも、こよなう今めかしきものかなと、哀に見給ふ。清げなるおとな二人ばかり、さてはわらはべぞ、出て入りあそぶ中に、十ばかりにやあらむと見えて、白ききぬ、山吹などのなれたる。着て走り來たる女ご、あまた見えつることも似るべうもあらず。いみじう生先みえて、美しげなる形なり。髪は扇をひろげたるやうに、ゆら／＼として顔はいと赤くすりなして立てり。なにごとぞや。わらべと腹だち給へるか、と、尼君の見あげたるに、少しおぼえたる所あれば、子なめりと見給ふ。雀の子を、いぬきが逃がしつる。ふせ籠の中に、こめたりつる者をとて、いと口惜しとおもへり。この居たるおとな、例の心なしのかかるわざをして、さいなまるとこそ、いと心づきなけれ。いづかたへかまかりぬる。いとをかしう、やう

やうなりつるものを、鳥などもこそみつくれとて、立ちて行く、髪ゆるらかにいとながく、めやすき人なめり。小納言のめのと、ぞ、いふめるは、この子の後見なるべし。尼君いて、あなをさなや。いふかひなう物し給ふかな。おのがかく今日あすになりぬる命をば、何ともおぼしたらで、雀したひ給ふ程よ、罪うることをと常にきこゆるを、心憂くとて、此方やといへば、つい居たり。つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いわけなく、かいやりたる額つき、かんざしいみじうつくし。ねびゆかむ様ゆかしき人かなと、目とまり給ふ。さるは、限なう心を盡くし、聞こゆる人に、いとよう似奉れるが、まもらるゝなりけりと思ふにも、涙をおつる。尼君、髪をかき撫でつゝ、けづることをもうるさがり給へど、をかしの御髪や。いとかなうものし給ふこそ、哀にうしろめたけれ。かばかりになれば、いとかゝらぬ人もあるものを、故姫君は、十二にて殿に後れ給ひし程、いみじうものは思ひしりたまへりしぞかし。只今、おのれ見捨て奉らば、いかで世におはせんとすらむとて、いみじう泣くを見給ふも、すゑるに悲し。幼心地にも、さすがにうちまも

りて、ふしめになりてうつぶしたるに、こぼれかゝりたる髪つや／＼とめて  
たうみゆ。

おひたゝんありかも知らぬ若草を、おくらす露ぞ消えんそらなき。

また、おたるおとなげにとうちなきて、

はつ草のおひゆく末もしらぬまに、いかでか露の消えんとすらん。

と聞ゆる程に、僧都あなたより来て、此方はあらはにや侍らむ、今日しも端に  
おはしましけるかな。このかみの聖の方に、源氏の中將の、瘡病まじなひに  
ものしたまひけるを、たゞ今なむ聞きつけ侍る。いみじう忍び玉ひければ、  
えしり侍らで、此處に侍りながら、御とぶらひにも、まうでざりけりとの給へ  
ば、あないみじや。いとあやしきさまを、人やみつらむと、靡ゆるしつ。此世  
にのゝしり給ふ光源氏かゝるついでに見奉り給はんや。世をすてたる法  
師の心地にも、いみじう世の憂わすれ、齡のぶる人の御ありさまなり。いで、  
御消息きこえむとて、立つ音すれば、かへり給ひぬ。

紫式部と清少納言との優劣は、古來よく人の口に上りたる所なるが、もとく

自叙傳的の文  
章

業平朝臣と和

比較になるものに非ず。源氏物語は、文學として、千古不朽の傑作也。紫式部は、  
偉大なる詩人也。之に反して、枕草子は、區々たる漫筆也、清少納言は、詩人にあら  
ずして、一種の散文家たるに過ぎず。さらば、文章の點は如何。こは、後段、清少納  
言を説く時に譲るべし。

竹取物語の系統は、かく物語の隆盛を來したるが、一方の自叙傳的の伊勢物  
語の系統も蜻蛉日記となり、和泉式部日記となり、その他にも、この種類多くして、  
可成りに榮えたり。その中にて、伊勢物語と前後相對して好一對とも云ふべき  
は、和泉式部日記也。せまき道德の目より見れば、業平は好色漢、和泉は淫婦、少し  
容貌にたचितれば、業平は絶世の好男子、和泉は百代の美人也。淫靡風をなし  
たる平安朝の世の中、節操といふことは、重きことゝもせられねば、自から身持を  
よくせんとするも、人が許さざる也。平安朝四百年、その人となり、多情多感、真情  
流露して、天成の歌人といふべきは、男にては業平、女にては和泉、和泉は、女の業平  
也、業平は、男の和泉也、伊勢物語は、業平が自からの風流韻事をかきたるもの也、和  
泉式部日記は、和泉が自からの風流韻事をかきたるもの也。どちらも、遠慮なく、

さつくばらんに筆を走らせたるは、どこまでも、詩人肌也。唯時代の前後と男女の別とよりして、文章も相違あるのみにして、伊勢物語は、男の書きたる和泉式部日記也。和泉式部日記は、女の書きたる伊勢物語也。嗚呼、この佳人才子をして時を同じうせしむれば、乾坤更に如何なる風流韻事を添へたりけむ。

左にかゝぐる和泉式部日記の一節、文情絶世、人の魂を銷せしめずんばあらず。

朝の思 (和泉式部)

女は、やがて起きて、いみじう、さりわたりたる空をながめつゝ、あかくなりぬれば、この曉あきのほどの心に覺ゆる事どもを、はかなきものに書きつくる程にぞ、宮より例の御文ある。たゞ

秋の夜のありあけの月の入るまでに、やすらひかねて歸りにしかな。いでやげに、いかに口惜しきものにおぼされつらむと思ふよりも、猶をりふしすぐし給はずかすと、誠にあはれなる空の景色を見給ひけると思ふに、いとをかしうて、この手ならひのやうに書きたるものをぞ、御返しにやうに、ひ

和泉式部の文章

き結びて奉る。風の音木の葉の残りあるまじげに吹きみだる。常よりも物あはれに覺ゆる。ことごとくしう、かき曇るものから、唯けしきばかり雨うち降るは、せん方なく、あはれに覺えて

秋のうちに朽ちはてぬべし、ことわりの時雨に誰か袖をからまし。

と歎かしう思へど、知る人も無し。草木の色さへ見しまゝにもあらず成りもてゆく。しぐれむ程の久しさも、まださに覺ゆるに、風に心苦しげにうちなびきたるには、唯今も消えぬべし露の我身ぞあやしう、草葉につけて、悲しきまゝに、奥にも入らて、頓て、端に臥したれば、つゆ年ふべくもあらず。人の皆うちとけて、寝たるに、その事と思ひわくべくもあらねば、つくづくと目をのみ覺して、何心なうらめしうのみ思ひ臥したる程に、雁のはつかにうち鳴きたる、人はかうしも思はずやあらむ。いみじう堪へがたき心ちして、

まどろまで、あはれ、幾夜になりぬらむ、唯かりがねを聞くわざにして、かくてのみ明かさむよりはとて、つま戸あしあけたれば、大空に西にかたぶきたる月のかげ、遠くすみわたりて見ゆるに、さりわたりたる空の氣色、鐘の



紀行文

音とりの聲、ひとつにひびきあひて、更に過ぎにし方、いまゆく末のこともかゝる折はあらしと袖の色さへ、あはれにめづらかなり。

土佐日記と更科日記

竹取物語、伊勢物語と共に、平安朝の三古文と云はるゝ、紀貫之の土佐日記は、紀行文也。その系統は、傳はりて、菅原孝標の女の更科日記となりぬ。左に二者の文例をならべて、對照に便にせむとす。

土佐日記の一節（紀貫之）

九日、つとめて大湊より那波の泊をおはむとて、漕ぎ出てにけり。これかれ互に國の境のうちはとて、見おくりにくる人數多が中に、藤原のときざね、橘の季衡、長谷部の行政等なむ御館より出てたうびし日より此所彼所におひくる。この人々ぞ志ある人なりける。この人々の深き志は、この海には劣らざるべし。これより今は漕ぎ離れてゆく。これを見送らむとてぞ、この人どもは追ひ來ける。かくて、漕ぎ行くまに、海の邊にとまれる人も遠くなりぬ。船の人も見えなくなりぬ。岸にも言ふことあるべし。船にも思ふことあれど、甲斐なし。かゝれば、この歌を獨言にしてやみぬ。

土佐日記の文章

更科日記の文章

おもひやる心は海をわたれども、ふみしなれば、知らずあるらむ。

更科日記の一節（菅原孝標の女）

にしとみといふ所の山、繪よく書きたらむ屏風の立てならべたらむやうなり。片つ方は、海濱のさまも、よせ返る浪の氣色も、いみじうおもしろし。もろこし河原といふ所も、すなごのいみじう白さを、二三日ゆく。夏は、大和撫子の濃く薄く錦をひけるやうになむ咲きたる。これは秋の末なれば、見えぬといふに、なほ所々はうちこぼれつゝ、哀げに咲さわたり。もろこし河原に大和撫子の咲きけむこそなど、人々をかしがる。足柄山といふは、四五日かねて、恐ろしげにくらがりわたれり。やうやう入りたつ麓のほどだに、空の氣色は、かゝしくも見えず。えもいはず茂りわたりて、いととあそろしげなり。麓にやどりたるに、月もなく暗き夜の闇にまよふやうなるに、遊び三人、いづくよりとなく出て來たり。五十ばかりなる一人、井ばかりなる、十四五なるとあり。庵の前に、からかさをして、すゑたり。をのことも、火をともして見れば、昔こはたと云ひけむが孫といふ。髪いと長く、額いと

かゝりて、色白く、きたなげ無くて、さてもありぬべき、下仕などにもありぬべしなど、人々あはれがるに、聲すべて似るものなく、空にすみのぼりて、めでたく歌をうたふ。人々いみじうあはれがりて、けぢかくて、人々もて興ずるに、西國のあそびは、えかゝらじなどいふを聞きて、難波わたりにくらぶればと、めてたく歌ひたり。見る目の、いときなげなきに、聲さへ似るものなく、歌ひて、さばかり恐しげなる山中にたちてゆくを、人々あかず思ひて、みな泣くを、幼き心地には、まして、この宿をたゞむことさへ飽かず覺ゆ。

小説としては、竹取物語が進んで源氏物語となり、日記的自叙傳としては、伊勢物語が進んで和泉式部日記となり、紀行としては、土佐日記が進んで更科日記となりたるを見て、以て平安朝前後の文章の變遷を見るべし。竹取や、伊勢や、土佐や、なほ上古の文致を存して、簡勁也。源氏や、和泉や、更科や、所謂王朝文の代表者にして、字音を和化し、音便を多くして、軟かにし、句長くなり、細かになり、やさしくなりたるが、王朝文の特色也。而して前の三者は、作者は、いづれも男也。後の三者は、作者は、いづれも女也。その女性が、太平つゞきて優長さはまる世に生まれ

王朝文の代表者

漢文の影響する所、一方の漢文は、四六駢儷に、文字の美をきそひ、偶對を苦心するの風は、和歌にうつり、國文にもうつりて、歌は貫之一流の形式派勢力を得て、滔々として、滿朝を化し、文は、所謂優婉可憐をきはむる王朝文をつくり出したるは、蓋し自然の勢なるべし。

王朝文の代表として、源氏、和泉、更科を種類によりて取りたるが、文學者としては、紫式部がひとり群を抜く。なほ富士山が、箱根、愛鷹、十二ヶ嶽などの間に聳立するが如し。されど、なほ清少納言を逸し去るべからず。

憎きもの(清少納言)

急くことある折に、長ごとするまらうど。あなづらはし、人ならば、後になど云ひても追ひやりつべけれど、さすがに心耻しき人いと憎し。  
硯に髪の入りにてすられたる。又墨の中に石こもりて、ぎし／＼とさしみたる。俄に頬ふ人のあるに、驗者求むるに、例ある所には、あらで、外にある、尋ね歩く程に、待遠に久しきを辛うして、待ちつけて、喜びながら、加持祈禱せさするに、この頃物の化に、こうじけるにや、居るまゝに、即ち眠り聲になりたる

いと憎し。

なんてう事なき人の、すゞろにえがちに物いたう言ひたる。

火桶炭櫃などに手の裏うち返し、鍬のべなどして、あぶり居るもの。何時かは若やかなる人などの、然は爲たりし。

老いばみ、うたてあるものこそ、火桶の端に足をさへもたげて、物言ふまゝに、押しすりなどもするらめ。

さやらの者は、人のもとに來て、居んとする所を、先づ扉して、塵拂ひすて、居も定まらず、廣めきて、狩衣の前、下様に捲り入れて居るかし。

斯る事は、言ひ甲斐なきもの、際にやと思へど、少しよろしきもの、式部大夫駿河の前司など言ひしが、然爲し也。

又酒のみてあき、口をさぐり、髻あるものは、それを撫て、盃人に取らる程の景色、いみじく憎しと見ゆ。

又飲めなど言ふなるべし、身ぶるひをし、頭ふり、口わきをさへ引き垂れて、童部の國府殿へまゐりてなど、歌ふやうにする。

物羨みし、身上の嘆き、人の上云ひ、つゆばかりの事も、ゆかしがり聞かまほしが、りて云ひ知らぬをば、怨じ譏り、又わづかに聞きわたる事をば、我もとより知りたる事のやうに、他人にも語り調べいふもいとにくし。

物聞かむと思ふ程に泣くちご。  
鳥の集りて飛ちがひたる。

忍びて來る人見知りて、吠ゆる犬は、打ちも殺しつべし。

然るまじうあながちなる所に、隠しふせたる人のいびきたる。

又みそかに忍びてくる所に、なが鳥帽子して、さすがに入に見えじと、惑ひ出づるほどに、物につきさわりて、そよるといはせたるいみじう憎し。

ねぶたしとおもひてふしたるに、蚊の細聲に名のりて、かほのもとにとびありく。羽風さへ身にあるこそ、いとにくけれ。

物がたりなどするに、さし出て、我ひとりさいまぐるもの。すべてさし出は、わらはも、おとなも、いとにくし。

昔物語などするに、わが知たるは、ふと出て言ひ下しなどする、いと憎し。

あからさまに來たる子どもわらはべをらうたがりて、をかしきものなど取らするに、ならひて、常に來て、居入りて、調度や打ち散らしぬる、憎し。  
家にて、官在所にて、逢はてありなんと、思ふ人の來たるに、空寝をしたるを、我許にある者ども起し、寄り來ては、寢坊と思ひ、顔に、引き搖がしたる、いと憎し。  
今參りの差し越えて、物知り顔に、教へやうなる事云ひ、後見たる、いとにくし。  
わが知る人にてある程、早う見し女の事、褒め言ひ出しなどするも、過ぎて、程經にけれど、なほ憎し。況して、差し當りたらむこそ、思ひやられるれ。されど、それは、さしもあらぬやうも有りかし。  
蛋も、いと憎し。衣の下に、躍りありきて、掻ぐるやうにするも。  
をとこ、主など、悪くいふ、いと惡し。  
ことなることなき男の引き入れ、聲して、艶だちたる。  
曉に歸る人の、昨夜置きし扇、懐紙、求むとて、暗らければ、探りあてむくと、たゝきも渡し、怪しなど、打言ひ、求め出て、そよくと、ふところに、差し入れ、扇引

きひろけて、ふたくと、うちつかひて、罷り申したる、憎しとは、世の常、いと愛敬なし。  
同じ如、夜深く出づる人の、烏帽子を強く結びたる。さしも堅めずともありぬべし。やをら、其儘さし入れたりと、人の咎むべきことかは。甚じうしどけ無う固く爲し、直衣狩衣など曲みたりとも、誰かは見知りて、笑ひそしりもせむ。  
とする人は、なほ曉のさまこそ、をかしくもあるべけれ。  
わりなく、しぶしぶに起難げなるを、強ひてそゝのかし、明け過ぎぬ。あな見苦しなど、言はれて、打敷く景色も、げにあかず、物うきにしも、あらむかしと覺ゆ。  
指貫なども、居ながら着もやらず、先づさし寄りて、夜ひと夜云ひつる事の残り、を、女の耳にいひ入れ、何にわざすと、なけれど、帯などをば結ふやうなりかし。  
格子あけ、妻戸ある處は、やがて諸共に出て、ゆき、晝の程の覺束なからむ事なし。

清少納言と紫  
式部

ども云ひいてにすべり出なむは、見おくられて名残惜しかりぬべし。

清少納言の文は、枕草子一篇にましまれり。日記の系統をひきて、殊に批評を多くしたるもの也。當時の書名、物語と日記との外に出でざるに、清少納言の作ひとり草子の名あり。一種批評がおもになりたる隨筆也。觀察頗る鋭くして、筆も亦鋭く、自然を品し、人物を評し、感慨をのべ、見聞せし事を記し、經歷を語り、才氣迸りて、到る處趣味あり。その文、女ながらも、優婉よりは、むしろ、奇抜にして、勁く、天才の俦を見る。亦絶代の奇才也。「たゞに過ぐるものは、帆あげたる舟、人のよはひ、春夏秋冬」といふが如き、さまで奇抜ならぬ文もあれば、「遠くて近きものは、極樂舟の道、男女の中」といふが如き、穿てる文もあり。かゝる短文頗る多くして、ちよと、李義山の雜纂に似たれど、その雜纂に似たる處は、ほんの、枕草子の一小部分也。同一に論ずべきものに非ず。冒頭の四季の評、世に魁を爲し、長明の四季物語の如く、兼好の四季評の如く、後世流をくむもの多く、自然人事に關する短評、早く俳文の先鞭をつけたるもの少なからず。翁丸といふ犬の事を記せるあたり、清少納言に似合はず、殊勝げなるが、冷罵の氣、全篇にわたり、幾んど同情

の温を見ず。さればとて、深く人心の最奥に徹する眼識は無し。理性のみにては、ひと通りの理窟はわかりて、あらゆる人の心の奥までは、到底伺ふに由なし。清女は、理性ありあまりて、毫も涙なき人也。故に真に深きを得ず。清女は、また神経過敏にして、癪がつよく、自我一方の女にて、人を容るゝ能はず。故に其人、小也。殊に頓才、學才、辯才を鼻にかけて、生意氣にも、世を見下し、不平怨恨、心に絶えず。詩人とならむには、あまりに利口也、達觀せむには、あまりに小也。皮相の小理窟を解して、人生はわからざるべし。唯その過敏なる神経は、一方に善用せられて、觀察するどく、氣がきいたり。才氣は、文にあらはれて、王朝文中、獨得の奇抜の趣を見る。その氣質も、さつぱりして、いやみなく、陰險ならざるは、取柄にして、それも、筆にあらはれて、文自から精勁也。この點だけは、清女の文に尊げを見れども、概して、其文高からず、また大ならざる也。

紫女は、之に反して、涙ある人也。源氏物語の文中、讀者を感泣せしむる所少なからざるを以て、見るも、理性一方では、出來ざるわざ也。紫女の文は、弱けれども大也。奇抜ならざれども、高し。其面貌を想像するに、清女は、口は稍大にして、鼻

はや、小に、目はや、三角らしく、顔はむしろ平たく、髪は荒くして、赤つちやけ、氣眉頭にあつまりて、顴骨高く、聲小にして鋭かるらしく、紫女は、鼻は圓味を帯びて高く、口は小さく、しまり顔はや、長く、髪は細かにして黒く、目は細長く、目の玉は、さまで黒からざるべく思はる。當時飛ぶ鳥をも落す道長が、一寸その袖をひきたるると、紫女自から記せるを見て、美人ならむと斷じ、そのこばみたるを見て、節操堅き賢女なりともちあくるものあれど、これ道學先生的見解也。美人にはあきたる道長也、たましく物ずきに袂ひきたるまでにて、意を通さむとせざりしは、却つて紫女の才色の、深く道長の意を動かすに足らざりし證據にもなるべし、自から道長の好意をよそにしたるとを記せるも、謙遜なる紫女、自から道徳のかたきことを誇る意は、なかるべきも、さすがに、女に通有なる虚榮心は免れざるべく、われも全く花なき朽木にはあらず、人並に道長公の好意をうけたることもあるなりとの意をほのめかし、ひそかに自から榮としたるものなるかも知れず。もし紫女が道學先生の理想するが如き道徳高き女ならば、決して源氏物語の如きものを書くことは出来ざる也。

小説ならぬ物語

物語は、平安朝の流行なるが、その中には、小説ならぬものもあり。伊勢物語は、逸話をあつめたる自叙傳也。や、よく出て出でたる大和物語は、自己をはなれて、他の逸話をあつめたる一種の史傳也。更に下つて、平安朝の末には、今昔物語も出てたり。

大和物語の一節

大和物語の文

下野の國に、男女住みわたりけり。年比住みける程に、男、めをまうけて、心變りはて、この家になりける物どもを、今の女のがり、かき拂ひもてはこびゆく。心うしと思へど、なほさせて見り。座ばかりの物も残さず、みなもていぬ。唯残りたるものは、馬舟のみなむありける。それを、この男の、ずさまかちといひける童を使ひけるして、この舟をさへ取りにおこせたり。この童に、女の言ひける、さんぢも、今は、こゝに見えじかしとなど云ひければ、なでか、さぶらはざらむぬしおはせずとも、さぶらひなむなど言ひ立てり。女ぬしに消息聞えば申してむや。文は、よに見給はじ。唯詞にて申せよと云ひければ、いとよく申し候はむと云ひければ、かく云ひける。

船もいぬ、まかぢも見えじ、今日よりは、うき世の中をいかで渡らむ。と申せと言ひければ、男に云ひければ、物かさふるひいにし男なむ、しかながら、運びかへして、もとの如く、あからめもせて、添ひ居にける。

伊勢物語をさると、未だ遠からず。文躰も伊勢物語と大差なき也。

今昔物語の一節

今昔物語の文

今はむかし、百濟川成といふ繪師ありけり。世にあらびなきものにてぞありける。瀧殿の石も、この川成がたてたるなりけり。おなじき御堂の壁の繪も、この川成が書きたるなり。さるあひだ、川成従者の童のにげにける。東西をもとめけるにもとめ得ざりければ、或るかうけの下部を雇ひて、語らひて曰く、ちのれが年ごろ、つかひつる従者のわらは、すでに逃げにけり。これにたづねて、とり得させよと。下部の曰く、やすきことにはあれども、童の願を知りたらばこそ、からめいど、顔を知らずしては、いかでか、からめむと。川成げにさる事なりと云ひて、たう紙をとりいで、童のかほの限りをかきて、しもべにわたし、これに似たらむ、童をとるべきなり、東西の市は、人あつ

まる所なり。そのわたりにゆきて、うかゞふべきなりと云へば、しもべ、其顔の形をとりて、すなはち、市にゆきぬ。人きはめて多かりといへども、これに似たるわらは無し。しばらく居ても、しやと思ふ程に、これに似たる童いできぬ。その形をとり出て、くらぶるに、つゆ違ひたる所なし。是なりけりとからめて、川成がもとにゐてゆきぬ。川成これをえて、いみじく、よろこびけり。その頃、これを聞くひと、いみじき事になむ云ひける。

い◎◎とありて、とに結ぶ後世のかささまは、既にこの今昔物語の頃より起れり。伊勢、竹取の系統をひきて、所謂王朝文の範圍を脱し、今日の新聞雑誌の記事と大差なきものとなれり。之につきて、宇治拾遺物語出てたり。筆致ほゞ同じけれど、同人の作にあらざる由は、既に先輩の辨あり。余も、古來、二者とも同人の筆なりと言ひつたへたる説を取らざるもの也。

物語の流行は、一方に多くの小説となり、一方に逸話を集めたるものとなりしが、更に進んで歴史となりぬ。榮華物語、これ也。されど、筆致は、王朝文の脂粉の氣を脱せず、小説の物語にならへり。世繼物語一名、大鏡出づるに及びて、更にそ

國文の歴史

鏡華物語と大

の脂粉の氣を去り、且つ史記の躰を學びて、列傳躰の歴史をつくり出せり。これ列傳躰の國文の歴史の祖也。王朝文の如く、優弱ならずして、筆自づから剛健也。漢文の國史すたれて、こゝに、自から國文の國史出でたる也。

大鏡の一節

大鏡の文

このおとゞは、基經のおとゞの御太郎なり。御母四品彈正尹人康親王の御娘醍醐のみかどの御時、この大臣、左大臣の位にて、年いと若くて、おはします。菅原の大臣、右大臣の位にて坐します。その折、みかど、おほん年、いと若くおはします。左右大臣に、世の政行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、その折、左大臣御年廿八九ばかり、右大臣御年五十七八にや、おはしけむ。共に世の政をせしめ給ひし間、右大臣才も世にすぐれ、めてたくおはしますし、御心おさても、ことの外に、かしくおはしますし、左大臣は御年も若く、才も殊の外に劣りたまへるにより、右大臣御覺えことの外におはしましたるに、左大臣安からず、おぼしたる程に、さるべきにや、おはしけむ、右大臣の御爲めに、よからぬ事出できて、昌泰四年正月二十九日、太宰權帥になし奉りて、流され給ふ。

このおとゞの子ども、あまた、おはせしに、女君たちは、聳どりし、男君たちは、みな程々につけて、位どもおはせしを、これもみな、かたぐに流され給ひて、かなしきに、をさなくおはしける男君、女君たち、慕ひ泣きておはしければ、ちひさきは、あへなむと、おほやけも許さしめ給ひしかば、共にゐて下り給ひしぞかし。

みかどの御おきて、極めて、あやにくにおはしますせば、この御子どもを、同じ方にだに、遺さざりけり。かたがたに、いと悲しくおぼしめして、御前の花を御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ、梅の花、あるじなしとて、春な忘れそ。

又ていしの御門に聞えさせ給ふ。

流れゆくわれは、みくづとなりぬとも、君しがらみとなりてとゞめよ。なき事により、かく罪せられ給ふを、かしくおぼし歎きて、やがて山崎にて、出家せしめ給ひてけり。その程、きはめて悲しき事、おほかり。日ごろ經て、都遠くなるまゝに、あはれに心細くおぼされて、



君がすむ宿の梢をゆく／＼と、かくるゝまでも願みしはや。  
又播磨の國におはしつきて、明石のうまやといふ所に、御やどりせしめ給ひ  
て、うまやの長の、いみじう思へる氣色を御覽じて、作らしめ給へる詩、いと  
なし。

驛長無驚時變改、一榮一落是春秋、

かくて筑紫におはし着きて、あはれに心ぼそくおぼさるゝ夕、遠方に所々け  
ぶりたつを御覽じて、

夕ざれば野にも山にもたつ烟、なけきよりこそ、もえそめにけれ。

又雲の浮きて深ふを御覽じても、

山わかれ飛びゆく雲のかへり來るかけ見る時ぞなほ頼まれぬる。

さりともと、世をおぼしめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずたゝよふ水のそこまでも、清き心は、月ぞ照らさむ。

これいと畏くあそばしたりかし。げに、月日よりこそは、照らし給はめとこそ  
はあめれ。誠にあどろ／＼しきことは、さるものにて、かくやらの歌や詩な

どさへいとなだらかに、ゆゑ／＼しう云ひつゞけ給ふと、見聞く人めも、あや  
にあさましく、哀にも守りゐたり。物の故知りたる人なども、むげに近く居  
よりて、ほかめせず、見聞くけしきどもを見て、いよ／＼はへて物をくり出す  
やうにいひ續くるほどぞ、まことにけうなるや。繁樹、涙をのごひつゝ、興じ  
居たり。

筑紫におはします所の御門も、かためておはします。大貳の居所は、はるか  
なれども、樓の上のかはらなどの心にもあらず、御覽じやられけるに、又いと  
近く観音寺といふ寺のありければ、鐘の聲をきこしめして、作らせ給ひし、詩  
ぞかし。

都府樓纒見瓦色、観音寺唯聽鐘聲、

これは文集、白居易、遺愛寺鐘欵枕聽香爐峰雪撥簾看といふ詩にも、さまたま  
に作らしめ給へりところを、むかしの博士どもの申しけれ。

又かの筑紫にて、九月十日、菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしま  
し、時、九月の今宵、内裏にて、菊の宴ありしに、このおとゞ作らしめ給へりけ

る詩を御門かしく感じたまひて御衣たまはり給へりしを筑紫にもてくだらしめ給へりければ御覽するにいとゞ其折おぼしめし出てゝ作らせ給ひける。

去年今夜侍清涼秋思詩篇獨斷腸恩賜御衣今在此捧持毎日拜餘香この詩いとかしく人々感じ申されき。この事ども唯ちりぢりなるにもあらずかの筑紫にて作りあつめさせ給へりけるを書きあつめ一卷とせしめ給ひて後集と名づけられたり。また折々の歌かきおかせ給へりけるをちのづから世にちり聞えしなり。

平安朝の國文のあらましと變遷とはほゞ以上説きたる所につきたるが和歌盛になるにつれて歌合おこり従つて批評も盛になり従つて歌學の書も多く世にいてたり。今藤原清輔の作れる奥儀抄の中より一節を摘出すべし。

奥儀抄の文

奥儀抄の一節(藤原清輔)

三千代經てなるてふ桃のことしより花さく春にあひぞしにける。漢の武帝は仙の法をならひてとげざりし人なり。七月夜漏に西王母とい

尺牘鉢の文

ふ仙人紫雲に乗りて武帝の承花殿にいたる。時に東方朔といふ者御前にあらし時隠れて屏風の後にをる。御門不死の薬を乞ふ。王母いまだ出ずべからずと云ひて桃七枚をとりて手づから二枚をくひつ。御門のたまはくこの桃香ばしくうまし。植ゑんと思ふ。王母わらひて曰くこれは三千年に一度なる桃なり。下土にうゝべきものにあらず。この屏風のうしろに侍る童ぞ三度ぬすみてたべたるものといふ。東方朔も仙人なり。かの仙宮の桃をよめり。王母來らむとするときまづ青鳥使に來る。これによせて使をば青鳥とは云ふ也。

これ國文の實用に供せられたるものにして漢語も入り書き方も放散にして今の世の通用文とさまでの大差なきを見る。されど漢文はなほ一般に實用に供せられたり。詔勅も多く漢文なれば下より奉る封事も亦漢文也。支那の尺牘鉢也。

尺牘鉢の書簡

忽辱恩賜驚欣正深心中含咲獨座稍開表裏不同相違何異推量所由率爾作策

歟、明知加言、豈有他意乎、凡貿易本物、其罪不輕、正殿倍臆、宜急并滿、今勸風雲發、遣徵使、早速返報、不須延回、

これ萬葉集にいてたる所なるが、この風は、平安朝につたはれり。平安朝の末にいたりて、往來躰の書簡起れり。明衝朝臣の作なる出雲消息、一名明衝往來、當時の書簡の模範を示せり。

往來躰の文

往來躰の書簡

臨時祭日可參事

右介入、舞人給之由、依行事藏人之說、承之、周瑜之能、能可令習給也、常陸二黒頗以陸梁、於、路頭、可爲壯觀、以彼可令騎給耳、御出立之所、最前參入可勤雜役侍、斷金之契、只如此之時也、謹言、

手本が既にこの通りなれば、一般に通用せしものは、なほ一層和臭ありしなるべし。この躰は、足利時代までもつゞけり。一方には、移りて、吾妻鑑の如き記録ともなりけるが、後世の候文と尺牘文との中間にあるもの也。されど、この往來躰と尺牘との間にも、なほ其中間に位する格式躰あり。朝廷より出てし格や式

消息躰の文

の文は、全く漢にもあらず、また往來躰ほどにも和化せざるもの也。王朝文は、一方に書簡に及びて、こゝに消息躰となりぬ。これおもに女子の用ゐしもの也。その例、多く物語にいてたり。ひいて、後世にも及べり。

消息躰の書簡落窪物語

いとうれしう、聞えさせたりし物を給はせたりしなむ、悦び聞えさする。又あやしとは、おぼさるべけれど、こよひもちひなん、いとあやしき様にてよう侍る。とりすぐすべきくだ物など侍りぬべくば、少したまはせよ、まらうとなむ、しばしと思ひ侍りしを、四十五日のかたゝがよるになむ侍りける。されば、このものどもは、しばし侍るべきを、いかゞたらひはさうのきよげならむを、しばしたまはらん、とりあつめて、いとかたはら痛けれど、たのみ聞えさするまゝに。

平安朝文章變遷の概要

之を要するに、書簡は、尺牘躰より、格式躰となり、更に和臭を加へて、往來躰となり、以て後世の以文躰の祖となれり。一方には、女子用として、所謂王朝文が書簡にうつりて、消息躰となりぬ。實用には、漢文が役立ち、而かもその漢文は六朝駢

平安朝の末の文章

儷の真似なりしが、歌學の書に見るが如き和文の躰、平安朝の末には、實用に供せらるゝにいたりぬ。國文は、もと文學上にのみ用ゐられたり。

物語と日記とが祖となりて、小説となり、紀行となり、自叙傳となり、隨筆となり、終に史傳となりぬ。作者は、男子のみならず、女子も多く出てたり。これ平安朝以前には無き所也。殊に優婉の趣をきはめたる所謂王朝文は、幾んど、女子の手に出でたるものなれば、美にして、よわくしきもの也。

竹取、伊勢、土佐を見て、所謂王朝文の源氏、和泉、更科にうつれば、松柏の林を出て、花の野にいるが如く、更に今昔物語、宇治拾遺物語、歌學の書、往來躰の文を見れば、花の野を去つて、大根畑に入りたる心地す。

時勢の變遷もあれども、一半は漢學の影響する所也。遣唐使、留學生なくなり、漢學の力減じ、こゝに自から和漢混交の文起り、書簡に及ぼし、記録に及ぼし、終に文學上の製作にも及ぼさむとする也。なほ一言すれば、天下太平、風俗淫靡の世の中、殊に女子の筆になりたるもの多ければ、日本男子固有の武健、快濶の氣風、平安朝の文章に乏しきも、亦自然の勢なるべし。

#### 第四 鎌倉時代の文章

殺閥の世と文章

平安朝は、太平の世なりしかども、後半は干戈起れり。内は皇位の争あり、藤原氏同士の政權の争あり、その皇位の争と藤原氏同士の争と相合して、之に源平二武門の兵力を借りて、保元の亂起り、都は一朝、修羅の巷となりぬ。ついで、平治の亂起れり。かくて、藤原氏の權、平氏にうつりしが、平家二十年の榮華、夢と消えて、幾處に、幾萬人の鮮血を流して、こゝに鎌倉に幕府起りぬ。ともかくも平安朝の後半より鎌倉時代にかけては、殺閥なる世の中なりし也。

和歌の隆盛

藤原氏の權力衰ふると共に、士大夫の學問も衰へ、漢詩漢文も衰へぬ。その藤原氏の權力は、武門にうつり、その學問文章は、僧侶にうつりて、今や、朝廷の貴紳は何をか有せる。曰く、唯一つの和歌のみ也。

後鳥羽天皇、藤原定家、藤原家隆、寂蓮、西行、長明、源實朝などの出でたる鎌倉の世は、實に和歌の技巧がその頂上に達したるの時也。新古今集一部、その痕跡を天下に印せり。平安朝の末の頼長の台記は、なほ立派なる漢文なりしが、以後の之

漢文の衰微

に類する記録たとへば、定家の明月記をはじめとして、いづれも、へんてこなる漢文也。

僧侶と文章

武士と文章

日本化する佛教

小説の餘脈

王朝の文章は、幾んど女子の文章なりしが鎌倉時代にいたりては、わづかに、その末派を阿佛尼の十六日夜日記などにとゞむるのみにて、文壇の立物は、今や、僧徒也。もしくは、一部の武士也。平家物語、撰集抄、方丈記など、當時の文章を代表するものは、すべて僧徒の手に成りたる也。弘法、傳教は、平安朝の精神界を支配したる二大教祖なりしが、鎌倉時代にいたりては、禪宗新に入りて、大に武士に歡迎せられたり。法然は、淨土宗を起し、親鸞は、眞宗を起し、日蓮は、日蓮宗を起して、佛教は、全く日本化しつくせり。これらの名僧は、一方に筆を執つて、俗に入りやすき文章を草して、國文、更に異彩を添へたり。

平安朝の文學に、最も勢力を占めたりし、小説としての物語は、この時代に入りて、わづかに餘脈を、鳴門中將物語、秋夜長夜物語など二三種にとゞめて、小説は、幾んど跡をたち、一方の小説ならぬ物語、即ち大和物語、今昔物語の流を汲みて、古今著聞集、十訓抄などいてたり。大鏡の如き歴史體のものをつぎて、水鏡、今鏡など

四鏡

日記草子の系統

戦記

出てたり。水鏡は大鏡の前の事を書き、今鏡は、大鏡の後を書き、更に足利時代にいたりて、増鏡は今鏡の後の事を書き、國文の歴史こゝに前後相一貫す。世、大鏡、水鏡、増鏡を稱して、三鏡といふ。されど、まことは、今鏡を加へて、四鏡といふべき也。なほ今昔物語の流をうけて、而かも、ほく西行に關することをかきて、伊勢物語の如く、自叙傳らしきものいなり。之を撰集抄となす。隨筆の流をつぎて、新生面をひらけるものもあり、鳴長明の方丈記、これ也。されど、この時代の特産物といふべきは、戦記也。その事實上より見れば、大鏡の如き歴史也。されど、こまかに甲冑のさまゝても描きて、事件を詳細に記し、且つ敷衍したるは、源氏物語の如き、小説としての物語の影響をうけたり。保元物語は、爲朝を主人公として、保元の亂を記し、平治物語は、悪源太を主人公として、平治の亂を記し、源平盛衰記は、その名の示すが如く、源氏平家の興亡を記し、平家物語も、其名の示すが如く、平氏の歴史を記し、義經記は、義經と辨慶とを傳し、曾我物語は、曾我兄弟仇討の顛末を記せり。これこの時代にあらはれ出てたる戦記也。今昔物語の如く、斷片的の事實をあつめたるものにあらずして、大鏡の如く、連続ある歴史也。而して

小説としての物語の如き細かき描寫ありて、言はず、小説と歴史との中間にあり、文學的にして、後世の歴史小説の祖となれるもの也。

言語の變遷

既に殺伐の世也。平安朝に出てたる物語の如く、おもに男女の情交をうつして、柔弱なるものとは異なりて、武士を描き、戦闘をうつして、戦記こゝに始めて日本男兒の性情を發揮せることは、その文の上にもあらはれたり。言語も柔かにする音便なくなりて、強くする切音の出でたるも、亦自然の數也。且つ當時の俗語多く加はり、漢語も多く入りて、今日の普通文の基礎は、この時に定まれり。文を學ばむとするの士、平安朝以上に溯らずとも、この時代の産物なる平家物語一部をよまば、大に資する所あるべき也。

和漢混交文

上古の文は、おもに耳に訴へたり。故に人の注意をひく方法として、枕詞も文章に用ゐられたり。對偶の句も用ゐられたり。假名起りては、目に訴へんとせしより、所謂王朝文には對偶幾んど無し。枕詞は、和歌のみのものとなれり。鎌倉時代にいたりては、また耳にも訴へむとして、王朝文に見える對偶また起れり。平家物語の如き朗讀せしものなるが、その冒頭を見るに、『祇園精舎の鐘の聲

耳に訴ふる文

對偶句の流行

諸行無常のひびきあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。おごれるもの久しからず、唯春の夜の夢の如し。たけき人も終には亡びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ』とありて、實に精妙なる對偶の句也。

散文と韻文との調和

七五調の文章

漢語多く入り、漢文脈漢入りて、巧に和漢を調和したること、この時代の國文の特長なるが、またよく韻文とも融合したり。謠物たる神樂、催馬樂は、朗詠となり、今様となりて、平安朝の末に行はれしが、その今様の七五調四句の調子は、文章にも入りて、既に源平盛衰記に、『秋も末に成りゆけば、稻葉を照す電の。有るか無きかも定めなく。萩の上風身にしみて、萩の下露袖ぬらす。海士の蓬屋に立つ烟。雲井に昇る面影。葦間をわけて漕ぐ船の。波路はるかに幽かなり。十市の里に搗く砧。旅寢の夢をさましけり。弱りゆく蟲の音。吹きしほる風の音。何事につけても。藻にすむ蟲の風情して。我から音をぞなかれける。更けゆく秋のあはれさは。何國もと言ひながら。旅の空こそ悲しけれ。冷えゆく月にあくがれて。各心をすましつゝ。歌をよみ。連歌せられけるにも。都の戀しさあながちなり』とありて、後世有名なる太平記の東下りの條は、之を學ん

日本男子固有の面目

武強と優美

で更に妙に、移つて謡曲となり、下つて近松の院本となり、馬琴の小説となれり。七五調は、やゝもすれば、浮華に陥り、單調となる。たゞ耳には快し。事件の變化を以て補はゞ、句調の上の單調は破らるべき也。かく、散文と韻文とを調和したるは、この頃の文章の特長也。従つて、文章は華麗也。王朝文は之に比して、優婉也。これ文句の上のみならず、事實亦然り。太平優柔の世の貴公子、貴女の爲す所、稜々たる男兒的氣骨うせて、月にあこがれ、花に迷ひ、その人既に優婉也、その男女間に起る事件も、亦優婉ならざるを得ず。平安朝の末造より、干戈都にも動き、貴公子、貴女の舞臺は、變じて武士の舞臺となるに及びて、こゝに再び日本男兒の固有の面目を露呈し來れり。されど、日本國民は、猛烈一方の國民に非ず、日本武士は、物のあはれを知れる武士也。箆に梅をはさみて、戦ふが如き、扇の的を射るが如き、世界の歴史にその比を見ざる風流は、ひとり日本の武士に見る所にして、ことに最もよく源平の際にあらはれたり。この時代の戦記は、實に詩篇也。武強と優美とを融和して、武士の性情も行爲も華麗也、この時代の文章も従つて華麗ならざるを得ず。日本武士の面目は、この頃の戦記に躍動し、その文章にも躍

古今著聞集と十訓抄

撰集抄の文

動する也。たゞ遺憾とするは、多くは、僧徒の手に成りたるを以て、やゝ拙劣なき也、少し陰氣くさき所もある也。

今古著聞集や、十訓抄や、今昔物語の後継者也、たゞ時代が時代だけに、漢語、漢文、脈多し。十訓抄、殊に甚し。訓の字あるを見ても、この道學的の趣あるを知るべし。二書とも、さまでの名文とも覺えざれば、文例を略す。撰集抄もこの類なるが、これには、文の見るべきものあり。殊に有名なるは、左の白峯詣の文也。

白峯の御陵(撰集抄)

過ぎにし仁安の頃、西國はるく修行仕つり侍りし序に、讃州みを阪の林といふ所に、暫時棲みはべりき。澤山邊のならの葉にて、庵結びて、つま木樵りたく山中のけしき、花の木末によわる風、誰れとへとてか呼ぶ子鳥、蓬の下うづら、終日にあはれならずといふことなし、長夜のあかつき、さびたる猿の聲をきくに、坐ろに腸を断ちはべり。斯かる栖み家は、後の世の爲めとしも、侍べらねども、心そゝるにすみて、覺ゆるにこそ、斯くても侍るべかりしに、浮き世の中には、思ひとゞめじと思ひ侍りしかば、立離れんとははべりし程に、

新院の御墓所を拜み奉らんとて、白峰といふ所に尋ね参り侍りしに、松の一  
むらしげりたるほとりに、釘ぬきしまはしたり。是なん御墓にやと、今更か  
きくらされて、物も覺えず。まのあたり見奉りし事をかき、清涼紫宸の間に、  
やすみし給うて、百官にいつかれさせ給うて、後宮後房の臺には、三千の翡翠  
の簪鮮やかにして、御まなじりにかゝらんとのみ、しあはせ給ひしぞかし。  
萬機のまつりごとを掌に握らせ給ふのみならず、春は花の宴を専らにし、秋  
は月の前の興つきせず侍りき。豈思ひさや、今かゝるべしとは。かけても  
計かりさや、他國一邊土の山中の、おどろの下に朽ち給ふべしとは。貝鐘の  
聲もせず、法華三昧つとむる僧一人もなき所に、只峰の松風のはげしさのみ  
にて、鳥だにかけらぬありさま見奉つるに、坐に涙を落し侍りき。  
始めあるもの終りありとは、聞侍りしかども、未だかゝるためしをば、承はり  
侍らず。されば思ひをとむまじきは、此の世なり。一天の君、萬乗のあるじ  
もしかのことくの苦しみを離れまし、侍らねば、せつりもしゆだも變ら  
ず、宮も藁屋も共に果てしなきものなれば、高位もねがはしきにあらず、我れ

等も幾度か彼の國王ともなり給ひけんなれども、隔生即忘して、凡べて覺え  
侍らず、只往いて、とまりはつべき、佛果圓滿の位のみぞ床しくはべる。兎に  
も角にも思ひ續くるまゝに、泪の洩れいて侍りしかば、

よしや君むかしの玉の床とて

かゝらん後はなにゝかはせん

と、打眺められて侍りき。

盛衰は今にはじめぬわざなれども、殊更に驚かれぬるに侍り。扱ても過ぎ  
ぬる保元の初の年、秋七月の頃、ほひ、鳥羽の法皇、果敢なくならせ給ひしかば、  
一天村雲迷ひて、花の都くれふたがり侍りて、合識のたぐひ、うつも侍らず、  
嘆げき身の上につみ、積りぬる心地どもにて、おはしまし、中に、僅かに十日  
の内に、主上上皇の御國あらそひありて、上を下にかへし、天を響かし、地を動  
かすまで、亂れたゝかひ侍りて、夕に及んで、大炊殿に火かゝりて、黒煙おほへ  
りしに、御方の軍勝に乗り、新院の御方は軍破れて、上皇、宇治の左府、御馬に召  
して、いづちともなく落ちさせ給ひしを、兵共追つかけ奉りて、いさゝかも恐



れ奉らず射まゐらせ侍りしを見たてまつりしに、よしなき都にいて、心う  
く侍り。さて後にこそ承りしか、新院は或山の中より、求め出し奉りて仁和  
寺へうつらせ給ふ。宇治左府は矢に當らせ給うて、御命終らせ給ひぬれば、  
奈良の京芳野の五三昧に土葬し奉りけるを、勅使立ちて、死骸實檢の爲に、堀  
りおこし奉りけると承りしに、あはれ六つかしき世の中かな。誰れか知ら  
ざる、浮世はかゝるべしとは。こゝに危ふく果敢なき身もちて、したり顔  
にのみ侍りて、空しく明けくれ過ぎて、無常の鬼にとらるゝ時、聲をあげて叫  
べども、叶はずして、惡趣にのみ、經めぐり侍らんは、いと悲しかるべし。盛  
衰もなく、無常も放れ侍らん世なりとも、佛の位めてたきと、聞き奉れば、など  
か願はざるべき。況んや盛衰甚だしきをや。無常速やかなるをや。たゞ  
心を静めて、往事を思ひ給へ。すこしも夢にやかはり侍らぬ、悦びも嘆げ  
さも、盛も衰も、みな偽りのまへのかまへなるべし。

この一文、あまりに有名にして、ありふれたれども、名文は、いつまでも名文也。

従來撰集抄は、西行の作と稱せられたれども、後人の書加へありて、全くは西行の

撰集抄と西行  
法師

作にあらずと説くものあり、またこの書は、全く西行の作にあらずと説くものあ  
り。されど、思ふに、西行は、世間名利の上に超脱したれども、其性の好む所、歌には、  
うき身をやつしたり。東國の旅にありて、千載集をらばれたりと聞き、心動きて、  
京にひきかへし、途にて、知れる人に逢ひて、わが心なき身にもあはれは知られけ  
り、鳴立つ澤の秋の夕暮の吟は、入りたりやと問へば、入らずといふに、さらば往き  
ても詮なしとて、また東に向ひたりとの一事にても、その和歌に執着することの  
深さを知るべし。従つて、代々の勅選集には、重きを置きて、この上もなき尊さも  
のと思ひしこと必せり。撰集抄とて、いろ／＼撰集中の作者、和歌に關すること  
をかき集むるは、西行には、ありさうな事也。殊にこの白峯の一文は、いかにも人  
を動かす。その氣格の高さを見る。よしや、西行ならずとも、西行のやうな高僧  
の作なるべし。この一段、あまりに人を動かしかければ、上田秋成は、雨月物語に之  
を敷衍して書き、馬琴は、弓張月に、西行を爲朝にかへて、同じ趣向をかき、明治の世  
になりては、露伴といふ小説の大家、二日物語と題して、これをかけり。されど、世  
くだるに従つて、文品ますます下れり。以上の四者をならべて、品評すれば、面白

かるべけれど、そは紙幅の許さざる所也。

一方の戦記には、保元物語、平治物語、義経記、曾我物語、源平盛衰記、平家物語など出てたるが、その中にて、平家物語が傑出したること、源氏物語が平安朝の物語に於けるが如くには行かずとも、ともかくも、白眉といふべし。作者は、未だ一定せず。余は、涙ある高僧の作なるべしと、想像するだけにて、満足せむ。

保元物語は、主人公が日本歴史上の一大快男子なるだけ、通篇一誦すべし。

保元物語の文

爲朝の弓(保元物語)

さるほどに、夜も漸明け行くに、主もなき放れ馬、源氏の陣へ駆け入つたり。鎌田次郎是れを取らせて見るに、鞍蓋に血溜り、前輪は破れて、尻輪に鑿の如くなる、鏃留れり。是れを大將軍に見せ奉りて、今夜筑紫の御曹司の遊ばされてありげに候ふ。あないかめしの御弓勢やと申しければ、義朝、八郎は今年十八九の者にてこそあれ。いまだ力も固まらじ。それは敵をおどさむとて作りてこそ放しけめ。夫れには慮すべからず。汝向つて一當て當て、見よと宣へば、さ承り候ふとて、正清、百騎計にて押し寄せて、下野守の郎等

に、相模國の住人鎌田次郎正清と名のりければ、扱は一家の郎従ござんなれ。大將軍の矢面をば引き退けと宣へば、元は一家の主君なれども、今は八逆の兇徒なり。遠勅の人々撃ち取つて功名せよや、者共と云ひも果さず、能つ引いて放す矢が御曹司の半頭にからりと中つて、兜の鍔口射附けたり。爲朝餘りに腹を立て、此の矢を搔いかなぐつて投げ捨て、己れ程の者をば矢たふなに手取りにせむとて、驅け給へば、須藤九郎家末、悪七、別當以下例の廿八騎續きたり。正清かなはじとや思ひけむ、百騎の勢を引き具して、河原を下りに、五町計振ひく、逃げたりけり。御曹司は弓をば脇に搔い挟み、大手を廣げて、何處までもと追はれけるが、さのみ長追ひなせそ、判官殿は心こそ武くおはしませども、年老い給ひぬ。残りの人々は、口はさく給へども、さのみ心にくからず、小勢にて門破らるな返せやとて引き返す。鎌田は河原の西へ引けば、大將軍の前敵の追ひ懸けんもあしかりなむと思ひて、真下りに逃げたりけるが、敵引つ返すと見てければ、河を直違ひに馳せ渡して、遁れ參つて候ふ。坂東にて多くの軍に逢うて候へども、是れ程軍立

ち烈しき敵にいま逢はず候ふ。雷電などの落ちかゝらんは事の數にも候はじと申しければ、義朝それは聞ゆる者と思ひて怖づればこそあらめ。八郎は筑紫そだちにて舟の中にて遠矢を射徒立などは知らず、馬上の業は坂東武者にはいかて及ばむ。馳せ並べて組めや者共と下知せられければ、相摸國の住人須藤刑部丞俊通、其の子瀧口俊綱、海老名源八季定、秦野次郎延景等を始として、二百餘騎にて追つ懸けたり。爲朝、寶莊嚴院の西裏に返し合はせて、火出づる程ぞ戦うたる。大將は赤地の錦の直垂に、黒糸威の鎧に、鍬形打つたる兜をき、黒馬に黒鞍置いて、乗つたりけり。鎧踏張り突立ち上り、大音揚げて、清和天皇九代の後胤、下野守源義朝、大將軍の勅令を蒙つて罷り向ふ。もし一家の氏族ならば、速に陣を開いて退散すべしとぞ宣ひける。爲朝聞きも敢へず、嚴親判官殿、院宣を蒙り給ひて、御方の大將軍たる其の代官として、鎮西八郎爲朝一陣を承て堅めたりとぞ答へける。義朝重ねて、さては逢の弟ござんなれ。汝兄に向つて弓引かんこと、冥加なきに非ずや。且は宣旨の御使なり。禮儀を存せば、弓を伏せて降参仕れとぞ申されける。

爲朝又兄に向つて弓引かんが冥加なしとは理なり。正しく院宣を蒙つたる父に向つて弓引き給ふは、いかにと申されければ、義朝道理にや詰められけむ。其の後は音もせず。武藏相摸のはやりをの者どもが幕地に撃つて懸かるを、爲朝しばし支へて防ぎけるが、敵は大勢なり、驅け隔てられては、判官のためあしかりなむと思ひて、門の中へ引き退く。敵是を見て、防ぎかねて引くとや思ひけむ、勝つに乗つて門の際まで攻め附けて、入れ替へ入れ替へ揉うだりけり。爰に爲朝、敵の勢越しに見れば、大將義朝大の男の大きな馬には乗つたり。人に勝れて軍の下知せむとて、突立ち上りたる内兜誠に射よげに見えければ、願ふ所の幸得たりと悦んで、件の大矢を打ちつがひ、只一矢に射落さんと打ち擧げけるが、待てしばし、弓矢取る身のはかりごと、汝は内の御方へ參れ、我れは院方へ參らむ。汝負けば、憑め助けむ。我れ負けば、汝を憑まむなど、約束して、父子立ち別れてかゝはすらむと思案して、つがひたる矢をさしはづす。遠慮の程こそ神妙なれ。都べて、八郎の矢に中る者、助る者ぞなかりける。されば、罪作りとや思はれ

けむ、名のつて出づる者ならでは、さうなく射給はざりけり。

十五歳にして、既に九州を平らげられたる絶代の勇將、わが爲めに、父が朝廷の勘氣をうけしと聞き、さらば身を殺しても、父の身をすくはむとて、上京すれば、正にこれ保元の亂の起らむとするの時也、詮議沙汰にも及ばずして、そのまゝ、父に従ひて、上皇の軍に加はり、良策を献ずれども、用ゐられず、怒つて用を爲さぬ事もあらむ、藏人をとほ、己れを推して、人をはかる小人の小策畧、われは、鎮西八郎にて足れり、唯守り難き所を守らんとて、わづかに手勢二十八騎にて守りけるが、先づ向ひたる臆病者の平清盛を、唯一箭にて、にげて去らしめ、次に向ひたる實兄の義朝、わざと軽く胃のみを射て、すこしも傷けざりし其心と云ひ、其弓術と云ひ、實に日本の武將也。その琉球に渡りしことは、この書に記さるは、惜しけれども、唯一箭に押せ來る敵の一般をしづめて、心しづかに自害して、大島の露と消えたる最期まで記して、文も亦力あり。平治物語は、血氣のみの義平が主人公にて、舞臺がさほどの事もなければ、文も亦引つたゝず。

義經記と曾我物語とは、室町時代の作とも稱せらる。義經記は後半、誦すべし。

義經記

佐藤忠信が、義經の身代となりて、ひとり吉野山中に残り、雪中に、覺範と闘ふの一條、事實既に痛快也。筆力また雄大也。日本の戦記中、最も人の心を快くする者の一也。馬琴の八犬傳に、信乃現八の二勇士が、芳流閣上に闘ひたるは、趣向をこゝに取りたるものなるべし。なほこの義經記の義經が、奥州落の條は、一字一涙、最も人を動かす。後世數十の院本、この書より出でたり。

曾我物語は、後世盛に行はれて、日本國民の一性格をあらはせる仇討小説の祖となれる者にて、これも幾多の院本に取られたり。この物語の中にて、仇討ちてのち、五郎ひとり頼朝の幕にうち入るの條、最も痛快也。

曾我五郎の膽勇(曾我物語)

五郎丸と云ふ童の有りけるが、大力也。元は京の者なりける。比叡山に仕へて、十六歳にて、主の敵を討つて後、京に出てたりけるが、甲斐國の住人、一條次郎忠頼に仕へて、名高し、太刀打の究竟、馬乗上手なりけるが、忠頼討つて後、鎌倉殿、能奴哉と思し召して、召し仕はれける程に、随分御氣色よしなり。夜、討入りたると聞き、御屋形の口にて、敵を伺ひつゝ、女の姿にて立ちたりしを、

曾我物語の文

五郎曾てしらず。案もなく入る所を、小臂を加へて、あいやつといたさつ、我身に引つかけて、伏んとする所を、五郎少しもためらはず。うちへ二三間斗り引いて入る。五郎丸時はよしと思ひけん。敵をば、かくこそ懐け。曳や／＼と呼ばりければ、五郎之を聞いて、腰の刀を探りけれども、運の盡ぬる上は、いつの戦に落しけん。腰になかりける程に、力およばす組み合ふ所に、相模國の住人加胡太郎、遁すな洩すなど、取り付く程に、手取り足取りたぶさ取り、大庭へ提てぞ出てにける。

以ての外の騒動なれば、早鎌倉殿、聞し召し、無下なる侍共かな。如何に箇様に、我前近く、狼藉をさするぞとて、御腹巻に御帶刀を取つて、出でんとし給ふ所に、大友左近將監義直とて、きりものにて候ひけるが、取り留め奉り、君は居ながら、日本國を隨へさせ給ひ候ぞかし。云ひ甲斐もなき私事に、争てか、御手を下させ給ふべきと申しも、果てぬに、御麻の小平太つと參つて、夜討の奴等、曾我の者をば取つて候。十郎は討たれ。五郎をば搦取て候と申ければ、鎌倉殿、聞し召し、其冠者、汝に預るぞと仰られければ、御麻の下部の國光に預

けられにける。國光是を受け取つて、御麻の柱に、縛り付てぞ守りける。夜も明け、れば、五郎に召し問はるべき事有り、引いて參れと仰下されければ、則ち小平太繩取にて引いて參る。爰に伊豆國の住人尾河小次郎、是を見て、如何に侍程の者に繩を付られ候ぞ。さして山賊海賊をばせざりけるに、むげに情なき事かなと云ければ、五郎打ち笑みて、何條和殿、詮なき事を宣ふな。縁あればとて、芳心し給ふな。中々人に聞きて、方人せしと云れ給ふな。左様に云たればとて、千筋の繩は、免されましくぞ。繩を付くればとて、何か苦しきぞ。父の爲に付たる繩なれば、孝養報恩の名聞にてこそあるらめと、語りて通りければ、心有人々は、あれや／＼とて、聲々に感じける。則ち御坪の内へ、引きいれられて、やがて參りたる由を申しければ、鹿野介新貝荒次郎、仰を承つて、子細を召し聞かんとする所に、荒次郎は、五郎に目を見合て、後縁の有ければ、哀にや思ひけん。如何にあの繩、只今計、免され候ばやと申しければ、五郎是を聞き、荒次郎をばたと睨みて、由なき和殿の申狀かな。時致に縁有ることは、皆人のしる所なり。其口入、詮なし。此繩を、善の繩とは思ひ

給はぬか。生年三歳と申志し時、父に別れて後、七歳と申し、秋の比より心に懸けて狙ひしに、甲斐有つて、敵助經を討ちすまして付たる所の繩なきは、全く恥とは思はぬものを、其上何條、殿原の申すやらん。流石に時致が申さじと思はん事をば、殿原の分際にて召落し給はんや。又申さんと思ふ事は、如何に制し給ふとも申さずしてあるべきや。種姓人に劣らぬなれば、參らん所につまづきも有るまじ。御前近ければ、奏者も入るまじ。直に聞こし召せよかし。其事叶ふまじくば、扱こそ候はめと、少も憚らず申しければ、鎌倉殿此由を聞こし召し、あれ程まで、癪の様なる者に、悪口せられては詮なしと思ほし召しけれども、御出有りけり。鹿野介も荒次郎も、赤面してぞ居たりける。

鎌倉殿は、御前の翠簾を半に巻き上げて、御坐下にある鹿野介五郎が詞を聞き、て、理りかなと思ひけん。側へ退にけり。新貝荒次郎は、猶しひて居たりけり。五郎是を見て、目をいらゝけて、退けや、物申さんとするに、和殿それ候へば、御身に問はれて、物申すに似たり。又外の人の思はん事も、心地悪し。

そこ退き候へと云ひければ、新貝も、座席を立て退にけり。今こそ心安かれと小笑しけり、五郎少も悪びれたる事もなく、唇をなめて候ひける。鎌倉殿、五郎が有様を御覽じて仰せけるは、此事は年來の存知か、但し、此度俄に思ひ出でけるか、と問はせ給へば、五郎承り、事淺くも承り候ふもの哉。心に懸けて狙候事は、十郎九歳、某七歳の時より、長大の今に至るまで、思ひ忘れたる日も候はず。されば、君の一年、都上洛ましませし時も、忍び忍びに御供仕り、佐川宿より初めて、夜は宿の隙を伺ひ、晝は便宜を狙ひ候へども、間なく、京中へ入るまで、少の隙も候はざりしかば、力あよばず。四辻町へ罷り出て、金吉に太刀を買ひ取り、年來日來身を放さず、持つて候ひつる意趣は、唯此爲め計にてこそ候しが。其甲斐有つて、思ひのごとく、本意を遂げ候ひぬ。唯一の遺恨には、互に目を見合はせ、詞をかはし、尋常に矢をも一つ射、又一刀成りとも、能き所を刺さんと思ひ候つれども、云ひ甲斐なく、ねおびれたる者の、手向一もせぬを、討つて候事こそ、心に掛つて覺え候へ。但本意を遂げ候ふ上は、一寸の頭を、千段に召され候ふとも、全く恨とも存ずまじく候ふ也、と申ける。

此内に、京上りの時の事は、實にはせざりけれども、師匠の手より得たりける、太刀のことを、隠さん爲めに申しける。重ねて仰せ下されけるは、助經伊豆より鎌倉へ通る事、一月に四五度、十度も有りつらんなど討たざりけるぞ。時致承はりさん候。此五六年が間、足柄箱根、佐川、古宇津、大磯、小磯、平塚、由井、小坪、み候ひて、日夜朝暮に狙ひ候へども、敵は大勢にて、或は七八十騎、百騎計、又は五六十騎にて歩き候。我々は只二人、左なき時は一人にて、行合事のみ候し。流石、心ばかり、猛勇候へども、なまじひなる事をなして、敵にも心を付け、人にも笑はれじと存ずる故、年來ためらひつるなり。信濃國淺間の腰、長原、三原、離山、上野伊賀保、赤城、下野那須野に至るまで、所々の狩場に付け廻はり伺ひしかども、運盡ざる程は、少の隙も候はざりき。一日片時も、世に有らせて見んとは、存ぜず候ひしと申しける。鎌倉殿、それは左と聞ゆ。助經こそ、恨ある敵なれば、子細におよばず。させる罪科もなき、多くの侍共を何條過ちたるぞ。五郎承り、御内へ参つて、かゝる謀叛を起し候ふ程にては、千萬騎の侍共を、一人も遁さずとこそ存じ候ひしかども、多くは皆不覺人

にて太刀影を見て、先づ遁足を踏みつる間に、僅に追様に切りて候つる間、尋常に振り廻つて出づる者、一人も候はず。白杵八郎より外、誰かは一人も候ひつる。只今召出され、御覽候へ。向ふ疵を蒙る者は、少く候ひぬ。又向ふ様にあふ者ならば、いかに一人も遁し候はんずらん。凡君は大臆病の侍の限りを、召仕はれ候ふ者哉。是躰にては、自今以後も、何事に付けても、危く見えて候ふもの、かなとぞ申ける。

鎌倉殿重ねて仰せには、何として、五郎丸には、懐かれけるぞ。さん候、重一人見を候ひつるを、當番の者共か、杵をとる奴にてこそ有らめと存じ候ふ程に、召捕はれ候ひぬ。是は偏に、運の盡ぬる所にて候へば、力およばず候ふが、五郎丸とだに存じ候は、太刀のむねにて、一番あて候はんずるものを、今は後悔益なき事にて候とぞ申ける。又仰には、何事を存じて、御前近くは参りけるぞ。五郎これを承りて、其敵をつれてこそ参つて候へ。傳へ承はり候へば、保元の合戦の時は、主の御方へ、敵を引く事を憚りて、鎌田兵衛政清は、筑紫八郎御曹司殿に追ひ立てられ、遁げ候ひけるに、左馬頭殿陣頭へは、参らずし

て、能く道をかへ、平家の陣頭へ遁げたることを承り候へ。能兵は、かくこそ振り廻り候へ。是は夫には相違して、敵を後に立て、御主の方へ遁げ通り候ひけり。意趣をば堀の藤次にこそ、御尋ね候へかしと申ければ、鎌倉殿聞召し、實に此事は、忠家が返すくも奇怪也。抑頼朝に於ては、別の恨は、存ぜざりける。五郎承りもあへず、いかでその儀なくて候ふべき。其故は、祖父伊藤入道は、君より御勸氣を蒙り、既に誅せられ参らせ候。其上敵助經は、御氣色能く、大名になして召仕はれしかば、かたくも以て遺憾深く候ふ上に、助成が最後の詞に、便宜よくば、御前近く打ち上げて、見にも入るべしと申し候ひしかば、千萬人の侍共を討たんよりは、君御一人を汚し奉りて、名は後代に止め候はんと存じ、忠家に付いて参り候ふ處、君の御果報や、めでたくおはしけん。又時致が運や盡き候ひぬらん。甲斐なく召捕はれぬと申ければ、鎌倉殿この由を聞こし召し、あれ聞けや人々、天晴れ、男子の手本哉。是程の男は、末代に有るべしとも覺えぬもの哉。頼朝に於ては、是程の意趣をば存せざれども、唯今召し問はれて、わるびれたる色も見せず、申したる詞誠に殊勝

なり。種姓高貴にして心猛き者も敵の爲めに擒と成りては、心も替り、諷ふ詞も有るものなるに、此者に於ては、聊左様の色もなし。是を關東武士の手にすべし。慮したる者千人より、か様の者一人をこそ召し仕ふべけれ。助けばやと仰られければ、梶原承り、御説は、さる事にて候へども、是を御免し候はゞ、左衛門尉が嫡子犬房とて候、其弟金法師とて、伊東の庄に候ふ也。彼等成長仕り候て、自分以後も、また狼藉絶ゆべからず。されば向後の爲めに御沙汰候へかしと申しければ、扱こそ時致は切らるべきに定まりけれ。鎌倉殿重ねて仰せられけるは、汝此事を思ひ立ちしに、東國の内にて、誰をか語らひし、正實に申せと有ければ、五郎打笑みて、我々程の貧賤の者に、何者か組し、身を徒になさんと思ふ者、何國にか候ふべき。但一腹の兄にて候ふ京の小次郎に語りて候ひしかども、君を恐れ奉り、耻をも顧みず引き退ぬ。又従弟にて候ふ三浦與市に申し合はせしも、頻に制し候ふ間、戯に申なして止みぬ。斯く親しき者共さへ、頼むに頼まれ候はず。何事やらん聞出して、御氣色に入らんと思ふ者どものみ多く候ふ世の中にかゝる人非人の身が、廣



量に他人を語らひ候はんは、手をかして縛られ、首を延べて、是を切れと申すにてこそ候へと申ければ、鎌倉殿打點かせ給ひ、此事をば聞きつ。扱母には知らせしかと仰せければ、恐れ覺え候ふものかな、さばかりの大將軍の仰とも覺え候はず、是程に静ならざりし昔だに、謀叛を起し、敵を打ちに出でんと仕り候ふ者が、母に知られて暇を乞ひ候はんに、其子に免す親の世の中に候ふべきや。山野のけだもの、江河の鱗までも、子を思ふ母の恵は深く候。況てや、廿餘年撫育せられし子共の、永き別れを慕はぬ親や候ふべきとて、只今まで世に心よげに何事をも申しけるが、伏目に成つて、兩眼に泪を含みければ、皆人袖をぞ顔に當てにける。鎌倉殿も涙ぐませ給ひつゝ、扇を以て、打拂ひくし給ふぞ忝き。

平家物語と源平盛衰記とは、材料ほと同じ。或は曰く、源平盛衰記、さきに出來たり。或は曰く、平家物語、さきに出來たりと。されど、強ひて、前後を争ふ必要なし。盛衰記の方は、華瞻にして、才氣煥發すれども、なほ斧鑿の痕あり、つくりたり、稚氣あり、俗氣あり、なほ田舎役者の域也。平家物語にいたりて、垢ぬけがして、渾

平家物語と源平盛衰記

然として玲瓏也。

左の一節を見ても、如何に情をつくし、景をつくして、文品高く、筆力精をきはめて、さながら珠玉の盤上に走るが如きかを知るべし。物語としては、源氏物語、戦記としては、平家物語、これ前後相對比すべき國文上の双壁也。

平家物語の文

小督の局平家物語

頃は八月十日あまりのことなれば、さしもくまなき空なれども、主上は御涙にくもらせ給ひて、月の光も朧にして、御覽せられける。や、深更におよびて、人やある人やあると召されけれども、御いらへ申すものもなし。や、ありて、彈正の大弼仲國、その夜しも、御とのゐに参りて遙に遠く候ひけるが、仲國と御いらへ申す。汝近うまゐれ。仰せ下さるべきむねありと仰せければ、何事やらんと思ひ、御前近うぞ参じたる。汝もし小督が行方や知ると仰せければ、いかてか知りまゐらせ候ふべきと申す。まことや、小督は嵯峨のほとり、片折戸とかやしたる内にあると申す者のあるぞとよ。あるじが名をば知らずとも、尋ねて参らせてんやと仰せければ、仲國あるじが名を知り

候はて、いかてかたづねあひまゐらせ候ふべきと申しければ、主上げにもとて、御涙せきあへさせまします。仲國つくくものを案ずるに、まことや、小督の殿は琴彈き給ひしぞかし。この月のあかさ、君の御事思ひ出てまゐらせて、琴ひき給はぬ事よもあらじ。内裏にて、琴ひき給ひし時、仲國笛の役にめされまゐらせしかば、その琴の音はいづくにても聞き知らんずるものを、嵯峨の在家いくほどかあらん。うち廻りて尋ねんに、なか聞き出ださてあるべきと思ひ、さ候はとあるじが名は知らず候ふとも、たづねまゐらせ候ふべき。たとひ尋ねあひまゐらせて候ふとも、御書など候はずは、うはの空とやあぼしめされ候はんずらん。御書を賜りて参り候はんと申しければ、主上げにもとて、やがて御書あそばしてぞ下されける。

寮の御馬に乗りて行けとあほせられければ、仲國寮の御馬賜はりて、明月に鞭をあげ、西をさしてぞあゆませける。小鹿鳴くこの山里と詠じけん、嵯峨のあたりの秋のころ、さこそあはれにも覺えけめ。片折戸したる屋を見つけては、この内にもやあはすらんと、ひかへく聞きけれども、琴ひく所はなかりけり。御堂などへも参り給へる事もやと、釋迦堂をはじめ堂々見まはれども、小督の殿に似たる女房だにもなかりけり。むなしう歸り参りたらんは、参らざらんより中中あしかるべし。これよりいづちへも迷ひ行かばやとは思へども、何處か玉地ならぬ。身をかくすべき宿もなしいかゞはせんと案じ煩ふ。まことや、法輪は、ほど近ければ、月の光にさそはれて、まゐり給へることもやと、そなたへ向きてぞあくがれける。

龜山のあたり近く松のある方にかすかに琴ぞきこえける。峯のあらしか松風か、たづぬる人の琴の音か、あぼつかなくは思へども、駒をはやめて行く程に、片折戸したる内に、琴をぞひきすまされたる。ひかへてこれを聞きければ、さしもまがふべくもなく、小督の殿の爪音なり。樂は何ぞとき、ければ、夫を想ひて戀ふとよむ、想夫戀といふ樂なりけり。仲國さればこそ、君の御事思ひ出てまゐらせて、樂こそあほけれ、この樂を弾き給ふ事のやさしきよと思ひ、腰よりやうてうぬき出だし、ちとならいて、門をほとくとたければ、琴をばやがて弾きやみ給ひぬ。これは内裏より仲國が御使に参りて候

ふ。あけさせ給へとて、たゞけどもくゝとがむるものもなかりけり。やゝありて、内より人の出づる音しけり。うれしく思ひて待つところに、錠をばづし門を細目にあけ、いたいけしたる小女房の顔ばかりさし出て、これはさやうに内裏より御使など賜はるべき所にも候はず。もし門遣へにてぞ候ふらんといひければ、仲國返事せば門たてられ、錠さゝれなんずとや思ひけん。是非なくおし明けてぞいりにける。妻戸のきはなる様にゐて、何とてかやうの所に御渡り候ふやらん。君は御故に思しめししづませ給ひて、御命もすてにあやふくこそ見えさせましゝ候へ。かやうに申さば、うはのそらとやおぼしめされ候ふらん。御書を賜りて参りて候ふとて、取り出でて奉る。ありつる女房とりついで、小督の殿にぞまゐらせける。これをあけて見給ふにまことに君の御書にてぞありける。やがて御返事かきて引き結び、女房の装束一かさねそへてぞ出だされける。

仲國御返事のうへは、とかう申すにおよび候はねども、別の御使にても候はゞこそ。直の御返事うけ給らては、いかてか歸り参り候ふべきと申されけ

れば、小督の殿げにもとや思はれけん、みづから返事賜ひけり。そこにも聞き給ひつらんやうに、入道あまりにおそろしき事をのみ申すと聞きしがあさましさに、ある夜ひそかに忍びつゝ、内裏をばまぎれ出て、今はかゝる所の住居なれば、琴ひくこともなかりしが、明日より大原の奥へ思ひたつ事の候へば、あるじの女房、今宵ばかりの名残を惜しみ、今は夜もふけぬ。たち聞く人もあらじなどすゝむる間、さぞな昔の名残もさすがゆかしくて、手なれし琴をひく程に、やすうも聞き出だされけりなとて、御涙せきあへ給はねば、仲國もそゞろに袖をぞ絞りける。やゝありて、仲國涙をおさへて申しけるは、明日より大原の奥へおぼしめし立つ事候ふは、さだめて御さまなどもやかへさせ給ひ候はんずらん。しかるべうも候はず。さて君をば何とかしまゐらせ給ふべき。ゆめくゝかなひ候ふまじ。あひかまへてこの女房出だしまゐらすなとて、共に召し具したる馬部吉上などといめあき、その屋を守護せさせ、我身は寮の御馬にうち騎りて、内裏へ歸り参りたれば、夜はほのくゝとぞ明けにける。仲國やがて寮の御馬つながせ、女房の装束をばはね

馬の障子に打かけて、今は定めて御寝にもなりつらん。たれしてか申すべきと思ひ、南をさして參るほどに、主上はいまだ夕の御座にぞましましける。南にかけり北にむかふ、寒温を秋の雁につげがたし、東に出て西に流る、たゞ膽望を曉の月によすと、御心ほそげにうちながめさせ給ふところに、仲國つとまゐりつゝ、小督の殿の御返事をこそまゐらせけれ。

源平盛衰記とても、その才華は見るべし。左の一節、あまりに有名なれど、以て華麗なる盛衰記の文を代表すべし。

源平盛衰記の文

扇の的源平盛衰記

沖より粧ひたる船一艘、渚に向けて漕ぎ寄す。二月二十日のことなるに、柳の五重に紅の袴着て、袖笠かづける女房あり。皆紅の扇に日の出てたるを杖に挿みて、船の舳先に立て、是を射よとて、源氏の方をぞ招きたる。この女房は、玉蟲前ともいひ、舞の前とも申す。この扇といふは、故高倉院殿鳥へ御幸の時、三十本切り立て、明神に進奉あり。皆紅に日出だしたる扇なり。平家都を落ち給ひし時、殿鳥へ社參あり。神主佐伯京廣この扇を取り出だ

して、是は一人の御施入、明神の御秘藏なり。日は故院の御情、帝業の御守たるべし。さればこの扇を持たせ給ひたらば、敵の矢も却りてその身に當り候ふべしと、祝言してまゐらせたりけるを、此を源氏射はづしたらば、當家軍に勝つべし。射おほせたらば、源氏が勝利なるべしとて、軍の占形にぞ立てられたる。かくして女房は入りてけり。

源氏は遙にこを見て、當座の景色の面白さに、目を驚かし、心を迷はす者もあり。この扇誰にか射よと仰せられんと、肝膽を作り、かたづをのめる者もあり。判官はさて誰かあるべきと尋ね給へば、畠山いふ、當時味方には下野國の住人那須太郎助宗が子に、十郎兄弟こそ、かやうの小物はかしこく仕り候へ。さらば十郎とて召されたり。かちんの直垂に、洗革の鎧に、片白の冑、二十四指したる白羽の矢に、滋藤の弓の塗り籠めたる真中取つて、渚を下りにさしくつろげてぞ參りたる。判官かの扇仕れと仰す。御誑の上は仔細申すに及ばねども、一谷の岩石を落ちし時、馬弱くして弓手の臂を沙につかせ、侍りしが、灸治もいまだ癒えず、小振ひして定の矢仕りぬとも存ぜず。弟

與一冠者は、小兵にて侍れども、かけ鳥的などはづるゝは稀なり。定の矢仕るべしと存ず。仰せ下さるべしと、弟に譲りて控へたり。さらば與一と召されたり。その日の装束は、紺むらごの直垂に、緋威の鎧、鷹角反つたる冑を猪頭に着なし、二十四指したる中黒の箭負ひ、滋藤の弓に、赤銅造の太刀をはき、宿赫白馬の太く選しきに、洲崎に千鳥の飛び散りたる貝鞍置きて乗つたりけるが、進み出て、判官の前に弓取り直して畏まれり。あの扇仕れ。晴の所作ぞ。不覺すなと宣ふ。與一仰承り、仔細申さんとする所に、伊勢三郎義盛、後藤兵衛實基等與一を判官の前にひき据ゑて、面々の故障に目すてに暮れなんとす。兄十郎指し申す上は仔細やあるべき。とくゝ急ぎ給へ。海上暗くなりなば、ゆゝしき御方の大事なり。はやゝと云ひければ、與一まこと、思ひ、冑をばぬぎ、重に持たせ、採鳥帽子ひき立て、薄紅梅の鉢巻締め、手綱かいくり扇の方へぞうち向けゝる。生年十七歳、色白く小髭生ひ、弓の取様馬の乗方優なる男にぞ見えたりける。波打際にうち寄せて、弓手の沖を見渡せば、主上をはじめ奉り、國母建禮門院、北政所方々の女房達、御船共

その數、漕ぎ並べ、屋形々々の前後には、御簾も几帳もさゝめきけり。袴揚卷の坐までも揚梅桃李と飾られたり。沙風に誘ふ空燒は吾妻の袖にぞ通ふらし。馬手の沖を見渡せば、平家の軍將屋島大臣をはじめ奉り、皆冑を帶して、數百艘の兵船を漕ぎ並べて是を見る。水主楫取に至るまで、今日を晴とぞ振舞ひたる。うしろの陸を見れば、源氏大將軍大夫判官を始めて、源氏大勢にて轡を並べて是を見る。定の當りを知らざれば、源氏の兵各手をぞ握りける。されば沖も渚も押しなべて、何所も晴と思ひけり。底しも遠淺なり。鞍爪鎧の菱縫板の浸るまで、打入りたれども、沛艾の馬なれば、海の中にてはやりけり。手綱をやり据ゑ、鎮むれども、寄する小波に物怖れして、足を止めず狂ひけり。扇の方をきつと見れば、折節西風吹き來て、船は艦舳も動きつゝ、扇杖にもたまらねば、くるりゝと廻りけり。何所を射るべしとも覺えず。與一運の窮めと悲しくて、眼を塞ぎ心を鎮めて、歸命頂禮入幡大菩薩、日本國中大小神祇、別きて、下野國日光宇都宮氏御神、那須大明神、弓矢の冥加あるべくば、扇を坐席に定めて給へ。源氏の運極り家の果報も盡

さば、矢を放たぬ前に深く海中に沈め給へと祈念して、目を開きて見たりければ、扇は坐にぞ静まれる。さすがに物の射にくきは、夏山の茂き緑の木の間より僅に見ゆる小鳥を殺さず射るこそ大事なれ。挟みて立てたる扇なり。神力既に指副せられたれば、手の下なりと思ひつゝ、十二束二伏の鏑矢を抜き出だし、爪やりつゝ、滋藤の弓握太なるに打食め、よつ引き暫し固めたり。源氏の方より、今少し打ち入り給へやといふ。七段ばかりをへだてたり。扇の紙には目を出だしたれば、恐れあり。かなめの程をと心ざして、ひやうと放つ。うら響くまでに鳴り渡り、かなめより上一寸置きて、ふつと射さりたりければ、かなめは船に留まりて、扇は空に上りつつ、暫し中にひらめきて、海へ颯とぞ入りにける。折節夕日に輝きて、波に漂ふ有様は、龍田山の秋の暮、河瀬の紅葉に似たりけり。鳴矢は抜けて潮にあり。漆の浮洲と覺えたり。平家は舷を叩いて、女房も男房もあゝ射たりと感じけり。源氏は鞍の前輪箆を叩きて、射たりと響めければ、舟にもどよみてぞありける。紅の扇の水に漂ふも、しるさに、玉蟲は、

水鏡と今鏡

文士としての  
鴨長明

時ならず花や紅葉を見つるかな、芳野初瀬の麓ならねど。  
判官大に感じて、白總馬に黒鞍置きて與一にたまふ。弓矢とる身の面目を屋島の浦に極めたり。  
なほ歴史として、水鏡今鏡あれども、力あることは、大鏡に及ばず、美はしきことは、後の増鏡に及ばざるもの也。  
余輩は、茲に鎌倉時代、散文の名家として、鴨長明をあげざるべからず。方丈記一篇、長明の人となりを代表し、かねて鎌倉時代の隨筆と自叙傳的日記とを代表す。而して前後一貫せる一大美文也。

方丈記其一(鴨長明)

行く川の流れば絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、且つ消え且つ結びて、久しくとどまることなし。——世の中にある人となすみかともた此の如し。  
玉敷の都のうちに棟をならべ、葺を争へる、たかきいやしき人のすまひは、代々を経て盡きせぬものなど、これをまことかと尋ねれば、むかしありし家は

稀れ也。あるは去年焼け、今年は作り、あるは大家ほろびて、小家となる。住む人も、これにおなじ。處もかはらず人もおほかなれど、いにしへ見し人は、二三十人が中には、づかに一人二人なり。あしたに死し、ゆふべに生るゝ習ひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。

知らず、生れ死ぬる人、づい方よりきたりて、いづ方へか去る。又知らず、かりのやどり、誰が爲めにか心をなやまし、何によりてか目をよろこばしむる。そのあるじと住み家と、無情を争ひ去る様いは、朝顔の露にことならず。あるは露おちて、花残れり。残るといへども、朝日にかれぬ。あるは花はしほみて、露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つことなし。

これ冒頭の一節也。短句をならべて、接續詞を用ゐず、而かも相連續して、さながら珠を聯ねたるが如し。これより進んで、大火を記し、大風を記し、飢饉を記し、地震を記し、おそろしかりし事の限を記して、つくづく世の無常をさとす。

方丈記其二(鴨長明)

あよそ物の心を知れりしこのかた、四十あまりの春秋を送れるあひだに、世

のありにくきこと、わが身とすみかとの、果敢なく、あだなるさまを見ること、やゝたびたびになりぬ、いはんや、所により、身のほどに従ひて、心をなやますことは、あけて數ふべからず。

もしおのづから身かずならずして、權門のかたはらに居るものは、深く喜ぶ事はあれども、大に樂しむと能はず、歎ある時も、聲をあげて、泣くとなし。進退やすからず、起居につけて、恐れをのくさま、たとへば、雀の鷹の巢にちかづけるが如し。もし貧しくして、富める家の隣に居るものは、朝夕すぼき姿を耻ぢて、へつらひつゝ、出て入り、妻子僮僕のうらやめるさま見るにも、富める家の人の、ないがしろなるけしきを聞くにも、心念々に動き、時としてやすらかならず。もし狭き地であれば、近く炎上する時、その害をのがるゝ事なし。もし邊地であれば、往反わづらひ多く、盜賊の難はなれ難し。又勢あるものは、貪慾ふかく、獨り身なるものは、人に輕しめらる。寶あれば、恐多く、貧しければ、なげき切也。人を頼めば、身他の奴となり、人をはごくめば、心恩愛につかはる。世に従へば、身苦し。又従はねば、狂へるに似たり。いづれ

の所を占め、いかなる業をなしてか、しばしもこの身をやどし、玉ゆらも心を慰むべき。

と、悲觀的に悟りたる感慨をのべ、更に進んで、一身上の逆境上、止むを得ず、隠栖して、方丈の小庵を結べる事を記し、その庵のさま、景色のさまを記せり。

方丈記其三(鴨長明)

いま日野山のおくに跡をかくす。南に麓あり。岩をたゝみて、水をためたり。林の木近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。まじきのかつら、跡を埋めたり。谷しげゝれど、西ははれたり、觀念の便りなきにしもあらず。春は、藤浪を見る。紫雲の如くして西の方に匂ふ。夏は、時鳥を聞く。語らふ毎に死出の山路を契る。秋は、日ぐらしの聲耳に充てり。空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は、雪を憐む。積み消ゆるさま、罪障に譬へつべし。若し念佛怖く、讀經まめならざる時は、みづから休み、自から怠るに妨ぐる人もなく、又耻づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、獨り居れば、口業をさめつべし。かならず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ、

ば、何につけてか戒を破らむ。

もし跡のしら浪に身を寄する朝には、岡の屋に行きかよふ船をながめて、滿誓沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉をならず夕には、潯陽の江をおもひやりて、源都督のながれを傲ふ。もしあまりの興あれば、しばし松のひびきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙ければ、人の耳を悦ばしむともあらず。獨しらべ、獨詠じて、みづから心を養ふばかり也。

これより進みて、童子を相手になどして、無邪氣に山中に遊息するさまを記し、遯世の樂しきことの限りをのべ、終に

方丈記第四(鴨長明)

すべて、かやうのこと、たのしく富める人に對して云ふにはあらず。たゞわが身ひとつにとりて、昔と今とをたくらぶるばかり也。大かた、世を通れ捨てしより、うらみも無く、おそれもなし。命は天運に任せて惜まざいとせず。身をば浮雲になすらへて頼まず、まだしとせず、一期の樂は、うたゝねの枕の



上にきはまり生涯の望は、をりくゝの美景に残れり。それ三界は、たゞ心ひとの也。心もし安からずば牛馬七珍も由なく、宮殿樓閣も望みなし。今さびしきすまひ、一間の庵みづからは是を愛す。おのづから都に出で、は乞食となれることを耻づと云へども、かへりて茲に居るときは、他の俗塵に着することをあはれぶ。

もし、人この言へることを疑はゞ魚鳥の分野を見よ。魚は水にあかず、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざれば其心を知らず。閑居の氣味も、亦斯の如し。住まずして、誰か悟らむ。

そもくゝ、一期の月影傾きて、餘算山の端にちかし。忽に三途の闇に向はむ時、何のわざをか歎かむとする。佛の人を教へ給ふおもひきは、事にふれて、執心なかれと也。今草の庵を愛するも、科とす。閑居に着するも、障なるべし。いかゞ用なき樂を述べて、空しくあたら時をすぐさむ。静かなる曉、このことわりを思ひつゞけて、みづから心に問ひていはく、世を遁れて、山林にまじはるは、心を修めて道を行はむため也。しかるを、汝が姿は、ひじりに似

て、心は濁りにしめり。住家はすなはち、淨名居士の跡をけがせりといへども、たもつ所は、わづかに周梨般特が行だにも及ばず。もしこれ貧賤の報のみづから惱ますか。はた又妄心の至りてくるはせるか。其時、心更に答ふることなし。たゞ傍に舌根をやとひて、不請の念佛、雨三遍を申して止みぬ。時に建歴の二とせ、彌生の晦日ごろ、桑門蓮胤、外山の庵にして之をしるす。

月かげは入る山の端もつらかりき、絶えぬ光を見るよしもがな。

と結べり。全文を録するに由なければ、處々、摘録し、説明を加へて、その大要を知らしむ。當時佛教の影響をうけて、穢土を厭離する顛末を記して、條理たち、始終相連環して長篇の文をなし、草子躰、日記躰に、生面をひらけり。文も亦和漢を調和して、新機軸を出せり。その清くすなほに、さとりすませる心は、到る處にあらはれて、不平なく、愚痴なく、怨恨なく、殊に尊くして、氣高し。長明は、もと賀茂の詞官の子、而して其世職をつぐ能はざるを慨して、僧となれりとの事なるが、當時歌人としても名あり。逐世の原因、小也、其心胸、世を容れむには、餘りにせまし。せまけれども、清し。従つて悟り易し。長明は、一代の高士也、この文、陶淵明の歸去

紀行の文

東關紀行

來辭と同工異曲也。鎌倉時代の花也。日本有數の名文也。  
 紀行は、十六日夜日記あれど、子の爲めに遙々鎌倉まで訴へゆくといへば、殊勝のやうなるも、實は、繼兒を訴ふるにて、察するに、阿佛尼は、理性の勝ちたる女なるべく、さばかりの詩趣もなし。紀行としては、東關紀行もそつとすぐれたり。土佐日記に比すれば、ともかくも、出藍也。  
 漢文の力すたれて、漢文にして漢文にあらざるもの、この以前よりありしが、この時代にいたりて、更に甚しくなれり。吾妻鑑は、幕府の記録なるが、この時代の漢文を代表せり。

吾妻鑑の文

吾妻鑑の文例

一日庚申、蒲冠者範頼、主蒙御氣色、是去年冬、爲征木曾上洛之時、於尾張墨俣渡、依相爭先陣、與御家人等鬪亂之故也、其事今日聞食之間、朝敵追討以前、好私合戰、太不穩便之由被仰書簡の例としては、

書簡  
義經の腰越狀

義經の腰越狀(吾妻鑑)

左衛門少尉源義經、乍恐申上候意趣者、被撰御代官其一、爲勅宣之御使、傾朝敵顯累代弓箭之藝、雪會稽耻辱、可被抽賞之處、思外依虎口讒言、被默止莫大之勤功、義經無犯而蒙咎、有功雖無誤蒙御勅氣之間、空沈紅淚、倩案事意、良藥苦口、忠言逆耳、先言也、因茲不被糺讒者、實否不被入鎌倉中之間、不能述素意、徒送數日、當于此時、永不奉拜恩顏、骨肉同胞之義、既似空宿運之極處、歎將又感先世之業、因歎悲哉、此條故亡父尊靈不再、誕給者、誰人中、被愚意之悲歎、何輩垂哀憐哉、事新申狀、雖似述懷、義經受身體髮膚於父母、不經幾時節、故頭殿御他界之間、成孫被抱母之懷中、赴大和國宇多郡龍門之牧、以來、一日片時、不住安堵之思、雖存無甲斐之命、京都之經廻難治之間、合流行諸國、隱身於在々所々、爲栖邊土遠國、被服仕士民百姓等、然而幸慶忽純熟、而爲平家一族追討、令上洛之手合、誅戮木曾義仲之後、爲責傾平氏、或時峨々巖石策駿馬、不顧爲敵亡命、或時漫々大海凌風波之難、不痛沈身於海底、懸體於鯨鯢之腮、加之爲甲冑於枕、爲弓箭於業、本意併奉休亡魂憤、欲遂年來宿望之外、無他事、剩義經補任五位尉之條、當家之面目、希代之重職、何事加之哉、雖然、今愁深歎切、自非佛神御助之外者、爭達愁訴、因茲以

諸神諸社牛王寶印之裏、不挿野心之旨奉請、驚日本國中大小神祇冥道、雖書進數通起請文、猶以無御宥免我國神國也、神不可稟非禮、所憑非于他、偏仰貴殿廣大之御慈悲、伺便宜、令達高聞、被廻秘計、被優無誤之旨、預芳免者、及積善之餘慶於家門、永傳榮華於子孫、仍開年來之愁眉、得一期之安寧、不書盡愚詞、併令省略候畢、欲被垂賢察、義經恐惶謹言、

なほ普通の私信にいたりては、漢文より更に遠さがりて、候の字多く、後世の候文の基礎は、この際に出來たり。西行が定家に贈りし手紙は、漢文の躰をはなれて、

歌合返し參らせ候、勝負とくつけおはしまして、參らせおはしまして、これをまたせ給うて、未だ調ひめされ候はず、御裳濯宮河に急披露し候ふべしと、人も待入りて候よし、度々申遣し候。云々。

阿佛尼の乳母の文

といふやうなる言ひ方をなし、阿佛尼は、乳母の文に、骨をば埋むとも、名をば埋むまじと申す事の候へば、今の嘆よりも勝りて、心憂かるべき事と思し召し候へ。御手などかまへて、美しく書かせ給ひ

西行の手紙

候へ。手の筋は、心々に好み、折に従ふ事にて候へば、ともかくも定め申し難う覺え候ふ。云々。

などありて、男女の手紙のかきぶり、相接近するに至れり。

鎌倉時代は、日本化したる佛教の起りたる時代也。淨土宗に於ける法然、眞宗に於ける親鸞、日蓮宗に於ける日蓮、いづれも、みな百代の傑也。僧が法を説くのに、この頃より假名文が出てたり。法然は、淨土宗の教祖也、藤原兼實に詣して歸りけるが、兼實人に謂つて曰く、空公の頭上に、金色の圓光あり、汝等之を見るかと。かく法然は、後光がさすまでの聖徳の偉人也。兼實の奏請によりて、圓光大師の號を賜はりたる名僧也。親鸞は、之が弟子にして、眞宗を起したる人なるが、これも聖徳の偉人也。されど、思ひ切つて、新に肉食妻帯の宗風を起したるを以て見るも、霸氣の豪傑肌もありたるべし。日蓮に至りては、意力猛烈なる偉人也。この三傑僧は、一方には、文をよくせり。今は、それ／＼全集あり。各その人となりてをあらはせり。法然の集は、漢文多けれども、國文も少なからず。親鸞も然り。親鸞には、七五調の和讃多し。日蓮にいたりて、漢文減じて國文多し。殊に大半

は、書簡也。

法然上人の文章

浄土門法然上人

浄土門といふは、この娑婆世界をいとひすて、いそぎて極樂にむまるゝ也。かの國にむまるゝ事は、阿彌陀佛のちかひにて、人の善惡をえらばず、たゞほとけの誓をたのみ、たのまざるに由る也。このゆゑに、道緯は、浄土の一門のみありて、通入すべき道なりとの給へり。されば、このごろ生死をはなれむと思はむ人は、證しがたき聖道をすて、行きやすき浄土をねがふべき也。この聖道浄土をば、難行道、易行道となづけたり。たとへを取りて、これをいふに、難行道は、けはしき道を徒歩にてゆくが如し。易行道は、海路を船にてゆくが如しといへり。あしなえ、目しむたらむ人は、かゝる路には向ふべからず。たゞ舟にのりてのみ向ひの岸にはつくなり。しかるに、このごろの我等は、智慧の眼しむ、行法の足なへたるともがら也。聖道難行のけはしき道には、總じて、望を斷つべし。たゞ彌陀の本願の舟にのりて、生死の海をわたり、極樂の岸につくべき也。今、この舟は、すなはち、彌陀の本願にたとふる

也。その本願といふは、彌陀のむかし、はじめて道心を起して、國王の位をすて、出家して、ほとけになりて、衆生をすくはむと誓ひしめし、時、浄土をまうけむ爲めに、四十八願を起し給ひし中に、第十八の願に、白く、もしわれ佛にならむに、十方の衆生、わが國に生れむと願ひて、わが名號をとなふる事、下十聲にいたるまで、わが願力に乗じて、もし生れずは、われ佛にならじと誓ひたまひて、その願を行ひあらはして、いますでに、ほとけに成りて、十劫を経給へり。されば、善導の釋には、かのほとけ、いま現に世にましまして、成佛し給へり。まさにしるべし、本誓重願むしからず、衆生稱念すれば、かならず往生することを得とのたまへり。このことわりを思ふに、彌陀の本願を信じて、念佛申さむ人は、往生疑ふべからず。よくよくこのことわりを思ひときて、いかさまにも、まづ阿彌陀佛の誓をたのみて、ひとすぢに念佛を申して、ことさとの人の、とかく言ひ妨げむにつきて、佛の誓を疑ふ心ゆめくあるべからず。かやうに心得て、さきの聖道門は、わが分にあらずと思ひすて、二の浄土門にいりて、ひと筋に佛の誓を仰ぎて、名號をとなふるを、浄土門の行

者とは申す也。

これ法然の淨土宗略抄の一節をとりたるもの也。又元久法語の中には、

元久法語の一節(法然上人)

かくの如くにして、昨日もいたづらに暮れぬ。今日もまた空しく明けぬ。今いくたびか暮らし、いくたびか明かさむとする。それ朝にひらく榮花は、ゆふべの風に散りやすく、ゆふべに結ぶ命露は、あしたの日に消え易し。これを知らずして、常に榮えむことを思ひ、是をさとらずして、常にあらむことをおもふ。しかる間、無常の風、一たび吹きて、有爲の露長く消えぬれば、これを曠野に棄て、之を遠き山におくる。かばねは、つひに苔の下にうづもれ、魂はひとり旅の空に迷ふ。妻子眷屬は、家にあれども、ともなはず、七珍萬寶は、藏にみつれども、益なし。たゞ身に從ふものは、後悔の涙也。

かの『御文章』の中にて、今日もよく葬式の際によまるゝ一文、これより出てたり。真宗八代目の人傑、蓮如の作にかゝりて、足利時代の事なれども、こゝに録して對照に便にせむ。

御文章の一節

御文章の一節

夫れ人間の浮生なる相をつら／＼觀ずるに、凡そ果敢なきものは、この世の中の始中終まぼろしの如くなる一期なり。されば未だ萬歳の人身をうけたりといふことを聞かず。一生過ぎやすし。今にいたりて、誰か百年の形跡をたもつべきや。我やさき人やさき、今日とも知らず、明日とも知らず。おくれ、さきだつ人は、本のしづく、末の露よりも、しげしといへり。されば朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり。既に無情の風きたりぬれば、乃ちふたつの眼、たちまちにとぢ、一つの息ながく絶えぬれば、紅顔むなしく變じて桃李の粧を失ひぬるときは、六親眷屬集りて、なげき悲めども、更にその甲斐あるべからず。さてしもあるべきとならねばとて、野外におくりにて、夜半の烟りとなしはてぬれば、たゞ白骨のみ残り。あはれといふとも、中々あるかなり。されば、人間の果敢なきことは、老少不定のさかひなれば、たれの人も早く後生の一大事を心にかけて、阿彌陀佛をふかく頼みまゐらせ、念佛申すべきものなり。

いづれも、對偶多きは、耳に訴ふる文章上の技巧なり。なほ一つ法然上人の手紙を録すべし。

熊谷直實に贈る書(法然上人)

御文くはしく受け給はり候ぬ。か様にまめやかにおぼしめし候らむ。近々ありがたく候。まことにこの度かまへて往生しなむとおぼしめさるべく候。うけがたき人身すてに受けたり。あひがたき念佛往生の法門にあひたり。娑婆をいとふ心あり。極樂を願ふ心ありたり。彌陀の本願ふかし。往生は、たなごゝろに在る也。ゆめ／＼御念佛をこたらず、決定、往生のよしを存せさせ給ふべく候。何事もとゞめ候ぬ。

親鸞上人は、和讃をおほく作れり。元來和讃は、平安朝のはじめに起りけるが、その七五調は、今様を起し、更に七五調の文章を起したる一因となりたるもの也。親鸞の作は、むしろ拙なれども、今左に一例として、

彌陀經の意五首(親鸞上人)

十方微塵世界の 念佛の衆生をみそなはし

攝取して棄てざれば 阿彌陀と名づけ奉る』

恒沙塵數の如來は 萬行の少善ひらさつゝ

名號不思議の信心を ひとしくひとへに勧めしむ』

十方恒沙の諸佛は 極難信ののりを説き

五濁惡世の爲にとて 證誠護念せしめたり』

諸佛の護念證誠は 非願成就の故なれば

金剛心を心む人は 彌陀の大恩報すべし』

五濁惡時惡世界 濁惡邪見の衆生には

彌陀の名號あたへてぞ 恒沙の諸佛すゝめたる』

なほ親鸞の文章の一例として、血脈文集の中より摘出すべし。

金剛信心(親鸞上人)

信心を得たる人は、必ず正定聚の位に住するが故に、等正覺の位と申すなり。今の大無量壽經には、攝取不捨の利益に定まれるものを正定聚と名づけ、無量壽如來會には、等正覺と説き給へり。其名こそかはりぬれども、正定聚等

親鸞の文章

正覺は、一つ心、一つ位なり。等正覺と申す位は、補處の彌勒と同じ位なり。彌勒と同じくこのたび無上覺にいたるべき故に、彌勒におなじきものと、のたまへり。さて大經には、次如彌勒とは申すなり。彌勒は既に佛に近くましませば、彌勒佛と諸宗のならひは申すなり。しかれば、彌勒におなじ位なれば、正定聚の人は如來とひとしとも申すなり。淨土の眞實信心の人は、この身こそ、あさましき不淨惡造の身なれども、心はすてに如來とひとしければ、如來と申すこともあるべしと知らせ給へ。彌勒すでに、無上覺にその心さだまりて、あかつきにならせ給ふによりて、三會の曉と申すなり。淨土眞宗の人もこの心を心得べきなり。光明寺の和尚は、般舟讚には、信心の人は、その心既に常に淨土に居すと釋したまへり。居すといふは、淨土に信心の人の心常に至るといふ心なり。これは、彌勒と同じといふことを申すなり。これは、等正覺を彌勒とおなじと申す心なり。ゆめく外見あるべからざるもの也。

溫雅にして、方あり。なりと云ひ切りて、いくつ重りても、いとはず、文氣自から

日蓮の文章

重厚也。日蓮上人の文章の例としては、

佐渡御書の一節(日蓮上人)

世間に人の恐るゝ者は、火炎の中と、刀劍の影と、この身の死するとなるべし。牛馬なほ身を惜む、況んや人身をや。癩人なほ命を惜む、何ぞ況んや壯人をや。佛説いて云く、以七寶布滿三千大千世界、不如以手小指供養佛經。雪山童子の身をなげし、樂法梵志が身の皮をはぎし、身命に過ぎたる惜しき者のなければ、これを布施として、佛法を習へば、必ず佛となる。身命を捨る人、他の寶を佛法に惜むべしや。又財寶を佛法におしまむもの、まさる身命を捨つべきや。世間の法にも、重恩には、命を捨て、報ずるなるべし。又主君の爲に命を捨る人は、すくなきやうなれども、その數多し。男子は耻に命をすて、女子は男の爲に命をすつ。魚は命を惜む故に池に栖むに、池の淺きことを歎きて、池の底に穴をほりて栖む。しかれども、餌にばかされて、釣を吞む。鳥は木に栖む。木の低き事をおぢて、木の上枝にすむ。然れども、餌にばかされて、網にかゝる。人も亦如是。世間の淺き事には、身命を失へども、大事

の佛法などには捨る事難し。故に佛になる人もなかるべし。佛法は、攝受折伏時によるべし。譬へば、世間の文武二道の如し。されば、昔の大聖は時によりて法を行す。雪山童子、薩埵王子は、身を布施とせば、法を教へむ菩薩の行となるべしと責めしかば、身をすつ。肉をほしがらざる時、身を可捨乎。紙なからむ世には、身の皮を紙とし、筆なからむ時は、骨を筆とすべし。破戒無戒を毀り、持戒正法を用ん世には、諸戒を堅く持つべし。儒教道教を以て、釋教を制止せむ日には、道安法師、慧遠法師、法道三藏等の如く、王と論じて、命を輕うすべし。釋教の中に、小乘、大乘、權經、實經雜亂して、明珠と瓦礫と牛驢の二乳を辨へざる時は、天台大師、傳教大師等の如く、大小權實顯密を強盛に分別すべし。畜生の心は、弱さをおどし、強さを恐る。當世の學者等は、畜生の如し。智者の弱さをあなづり、王法の邪をおそる、諛臣と申すは、是也。強敵を伏して、始めて力士を知る。惡王の正法を破るに、邪法の僧等が方人をなして、智者を失はむ時は、獅子王の如くなる心をもてる者、必ず佛になるべし。例せば、日蓮が如し。これおごれるには、非ず、正法を惜む

心の強盛なるべし。おごれる者は、必ず強敵に値て、おそるゝ心出來する也。例せば、修羅のおごり帝釋にせめられて、無熱池の蓮の中に小身と成て、隠れしが如し。正法は、一字一句なれども、時機に叶ひぬれば、必ず得道なるべし。千經萬論を習學すれども、時機に相違すれば、不可叶。寶治の合戦、すてに二十六年、今年二月十一日、十七日、又合戦あり。外道惡人は、如來の正法を破り難し。佛弟子等、必ず佛法を破るべし。獅子身中の蟲の獅子を食む等云々。大果報の人をば、他の敵やぶり難し。親しみより破るべし。藥師經に云く、自界叛逆難、是也。仁王經に曰く、聖人去時、七難必起云々。金光明經に曰く、三十六天、各生瞋恨、由其國王縱惡不治等云々。日蓮は、聖人にあらざれども、法華經を如説受持すれば、聖人の如し。又世間の作法兼て知るに、よて、注し置くこと、是不可違。現世に云ひおく言の、違はざらむをもて、後生の疑をなすべからず。日蓮は此關東の御一門の棟梁也、日月也、龜鏡也、眼目也、日蓮捨て去る時、七難必ず起るべしと、去年九月十二日、蒙御勘氣之時、大音聲を放て、よばゝりし事、これなるべし。纒に六十日乃至百五十日に、此事起る歟。是



は華報なるべし。實果の成ぜむ時、いかゞなげかはしからんずらん。世間の愚者の思ひに曰く、日蓮智者ならば、何ぞ王難に値哉なんと申す。日蓮かねての存知也。父母をうつ子あり。阿闍世王なり。佛阿羅漢を殺し、血を出す者あり、提婆達多是也。六臣是をほめ、瞿伽利等、これを悦ぶ。日蓮當世には、此御一門の父母也、佛阿羅漢の如し。然るを流罪して、主従共に悦びぬる、あはれに無慚なる者也。謗法の法師等が、自から禍の既に顯るゝを歎きしが、斯くなるを一旦は悦ぶなるべし。後には、彼等が歎き、日蓮が一門に劣るべからず。例せば、泰衡がせうとを討ち、九郎判官を討て、悦びしが如し。既に一門を亡す、大鬼の此國に入るなるべし。法華經に曰く、惡鬼入其身、是也。

日蓮も又かく責めらるゝも、先業なきにあらず、不輕品に云く、其罪畢已等云々。不輕菩薩の無量の謗法の者に、罵詈打擲せられしも、先業の所感なるべし。何に況んや、日蓮今生には、貧窮下賤の者と生れ、旃陀羅が家より出てたり。心こそすこし法華經を信じたるやうなれども、身は人身に似て、畜身也。

魚鳥を混丸して、赤白二諦とせり。其中に、識神をやどす。濁水に月のうつれるが如し。糞囊に金をつゝめるなるべし。心は法華經を信ずる故に、梵天帝釋をも猶恐しと思はず、身は畜生の身也、色心不相應の故に、愚者のあなづる道理也。心も亦身に對すればこそ、月金にもたとふれ。

又過去の謗法を案ずるに、誰か知る、勝意比丘が魂にもや、大天が神にもや、不輕輕毀の流類歟、失心の餘殘歟、五千上慢の眷屬歟、大通第三の餘流にもやあるらん。宿業はかり難し。鐵は炎打てば劍となる、賢聖は罵詈して試みるなるべし。我今度の御勸氣は、世間の失一分も無し。偏に先業の重罪を今生に消して、後生の三惡を脱れんずるなるべし。盤泥洹經に云く、有當來之世、假被袈裟於我法中出家學道、懶惰懈怠、誹謗此等方等契經、當知此等皆是今日諸異道輩等云々。此經文を見ん者、自身を耻づべし。今我等が出家して、袈裟をかけ、懶惰懈怠なるは、是れ佛在世の六師外道が弟子也と、佛記し給へり。法然が一類、大日が一類、念佛宗、禪宗と號して、法華經に捨閉闍抛の四字を副へて、制止を加へて、權經の彌陀稱名ばかりを取立て、教外別傳と號して、

法華經を月をさす指、只文字をかぞふるなど笑ふ者は、六師が末流の佛教の中に出来せるなるべし。うれへなる哉や。涅槃經に、佛、光明を放て、地の下、一百三十六地獄を照し給ふに、罪人一人もなかるべし。法華經の壽量品にして、みな成佛せる故也。但し一闍提人と申て、謗法の者ばかり地獄守りに留められたりき。彼等が生みひろげて、今の世の日本國の一切衆生とされる也。日蓮も、過去の種子既に謗法の者なれば、今生に念佛者にて數年が間、法華經の行者を見ては、未有一人得者、千中無一等と笑ひし也。今、謗法の間、法華經の行者を見ては、未有一人得者、千中無一等と笑ひし也。今、謗法の醉、さめて見れば、酒に酔る者、父母を打て悦びしが、酔さめて後歎きしが如し。歎けども、甲斐なし。此罪消えがたし。何に況んや、過去の謗法の心中にそみけんをや。

經文を見候へば、烏の黒さも、鷲の白さも、先業のつよく染みけるなるべし。外道は知らずして自然と云ひ、今の人は謗法を顯して扶けむとすれば、我身に謗法なき由をあながちに陳答して、法華經の門を閉ぢよと、法然が書けるをとかく争ひなんどす。念佛者は、さておきぬ。天台、真言等の人々、彼が方

人をあながちにする也。今年正月十六日、十七日に佐渡國の念佛者等數百人、印性房と申すは、念佛者の棟梁也。日蓮が許に來て云く、法然上人は、法華經を擲てよとかいせ給ふには非ず。一切衆生に念佛を申させ給ひて候。此大功德に御往生疑なしと、書付けて候ふを、山僧等の流されたる、並に寺法師等善哉々々とほめ候を、いかゞこれを破し給ふと申しき。鎌倉の念佛者よりも遙に果敢なく候ぞ、無慚とも申すばかり無し。いよ／＼日蓮が先生、今生、先日の謗法をそろし。かゝりける者の弟子となりけん、かゝる國に生れけむ。如何になるべしとも覺えず。盤泥洹經に云く、善男子、過去作無量諸罪種々惡業、是諸罪報、或被輕易、或形狀醜陋、衣服不足、飲食粗疎、求財不利、生貧賤家、及邪見家、或遭王難等云々。又云く、及餘種々人間苦報、現世輕受、斯由護法功德力故等云々。此經文は、日蓮が身なくば、殆んど佛の妄語となりぬべし。一或被輕易、二或形狀醜陋、三衣服不足、四飲食粗疎、五求財不利、六生貧賤家、七及邪見家、八或遭王難等云々。この八句は、唯日蓮一人が身に感ぜり。高山に登る者は、必ず下り、我、人を輕めば、還て、我、身に輕易せられん。形狀

端嚴をそしれば醜陋の報を得。人の衣服飲食を奪へば必ず餓鬼となる。持戒尊貴を笑へば貧賤の家に生ず。正法の家をそしれば邪見の家に生ず。善戒を笑へば國土の民となり王難に値ふ。是は常の因果の定れる法也。日蓮はこの因果にはあらず。法華經の行者を過去に輕易せし故に、法華經は月と月とをならべ、星と星とをつらね、華山に華山をかさね、玉と玉とをつらねたるが如くなる御經を、或は上げ、或は下して、嘲哂せし故に、此八種の大難に値る也。

此八種は、盡未來際が間、一づゝこそ現すべかりしを、日蓮つよく法華經の敵を責るによつて、一時に聚り起せる也。譬ば、民の郷郡などにあるには、いかなる利錢を地頭等におぼせられたれども、いたく責めず、年々にのべゆく。其所を出る時に、競ひ起るが如し。斯由護法功德力故等は、是也。法華經には、有諸無智人、惡口罵詈等、加刀杖瓦石乃至向國王大臣婆羅門居士乃至數々見擯出等云々。獄卒が罪人を責めずば、地獄を出る者かたかりなん。當世の王臣なくば、日蓮が過去謗法の重罪消し難し。日蓮は、過去の不輕の如く、當

世の人々は、彼輕毀の四衆の如し。人は替れども、因は是れ一也。父母を殺せる人異なれども、同じ無間地獄に落つ。いかなれば、不輕の因を行じて、日蓮一人釋迦佛とならざるべき。又彼諸人は跋陀婆羅と云はれざらむや。但千劫阿鼻地獄にて責められん事こそ不便には覺ゆれ。是をいかんとすべき。彼輕毀の衆は、始は謗せしかども、後には、信伏隨從せりき。罪多分は滅して、少分有りしが、父母千人殺したる程の大苦を受く。當世の諸人は、翫す心無し。譬諭品の如く無數劫をや輕んずらん。三五の塵點をやあくらんずらん。これはさて置きぬ。日蓮を信ずるやうなりし者どもが、日蓮が斯くなれば、疑を起して、法華經を棄つるのみならず、かへりて、日蓮を教訓して、我れ賢しと思はむ僻人等が、念佛者よりも久しく阿鼻地獄にあらむこと、不便とも申すばかり無し。修羅が佛は、十八界、我は十九界と云ひ、外道が云く、佛は一究竟道、我は九十九究竟道と云ふが如く、日蓮御房は、師匠にてはあはせども、餘りにこはし、我等はやはらかに法華經をひろむべしと云はんは、螢火が日月をわらひ、塚蟻が華山を下し、井河が河海をあなづり、烏鵲が鸞鳳

をわらふなるべし。南無妙法蓮華經。

あまり長々しけれども、割愛するに忍びずして、全篇をのせたり。追白あれど、さまでとはとて略せり。嗚呼これ百代の豪傑日蓮流されて佐渡にありし時、その弟子信者をはげまざむとてはる／＼送れるもの也。飛ぶ鳥をも落す鎌倉の執權をも眼中におかず、あらゆる宗派を敵として、法華經を天下に呼號せし偉人の面目風采、この書の中に躍動す。意氣壯烈、語句力あり、一氣呵成に筆を走らして、熱血紙表に迸り、經をひき、譬をひき、滾々として盡さず、大瀑の天を劈いて下るが如し。長明の方丈記を籠に囀るの譬とすれば、これは野に吼ゆる獅子也。區々たる是非善惡、氣取る、えらがる、氣焔を吐くの域を脱して、直に豪傑の肺肝を披瀝したる、宇宙間有數の快文字也。偉大なる文とは、この事也。かゝる熱烈なる文字、前に比なく、後にも比なし。偉大なる日蓮の人格と殘虐なるその境遇とにあらずんば、また得べからざるの大文字也。之を支那に求むるに、胡濬菴の封事や、痛快なりといへども、この文に比すれば、日蓮の所謂日月の前の螢火也、華山の前の蟻塚也、河海の前の井江也、鸞鳳の前の烏鵲也。

身延山御書の一節(日蓮上人)

誠に、身延山の栖は、ちはやぶる神も惠を垂れ、天下りましますすらむ、心なき賤の男、しづの女までも心を留めぬべし。哀を催す秋の暮には、草の菴に露深く、檐にすだくさゝがにの糸、玉をつらぬき、紅葉いつしか色深うして、斷え／＼に傳ふ懸樋の水に影をうつせば、名にし負ふ龍田河の水上も、かくやと疑はれぬ。又後には、蛾々たる深山聳えて、梢に一乗の果を結び、下枝に鳴く蟬の聲しげく、前には湯々たる流水湛へて、實相真如の月うかび、無明深重の闇はれて、法性の空に、雲もなし。かゝる、砌なれば、庵の内には、晝は終日に、一乗妙典の御法を論破し、夜は竟夜、要文誦持のみす。傳へ聞く、釋尊の住み給ひけん、鸞峰を、我朝此砌に移し置きぬ。霧立ちて、嵐はげしき折々も、山に入りて、薪をこり、露深き草を分けて、深谷に下りて、芹をつみ、山河の流もはやき巖瀬に菜をすゝぎ、袂しほれて干しわぶる思ひは、昔し人丸が詠じける、和歌の浦にもしほ垂れつゝ、世を渡る海士も、かくやとぞ思ひやる。云々。多く對偶を用ゐて、流麗宛轉の趣をさはめたり。以て日蓮の文藻を見るべし。

これは獅子が牡丹の前に眠れる也。

### 第五 室町時代の文章

鎌倉時代去りて、江戸時代来るまでには、建武中興あり、南北朝あり、戦國時代ありて、まことの室町時代といふ時代は、少なけれども、しばらく、總稱して、室町時代といふ。義満までは南北朝の戦亂あり、義政の應仁の大亂以後は、所謂戦國時代にて、戦亂相つゞきたれば、文章上にも、まづ暗黒時代也。されど、全くの暗黒にはあらず。五山文學は、直接に支那の詩文を傳へて、その手腕、却つて、平安朝をしのぐものあり。謠曲は、この時代の生産物也。狂言も、亦此時代の生産物也。北畠親房、兼好法師、一條兼良等、前後、室町時代の文壇をかざれり。神皇正統記、徒然草、太平記、増鏡、吉野拾遺等の書は、今に世に讀まれて、この時代の文章を代表する者也。

五山文學

五山とは、禪宗の五大寺の事也。天龍、相國、建仁、東福、萬壽、これ也。その上に南禪寺あり。以上は、京都にあるもの也。鎌倉にも、五山あり、建長、圓覺、壽福、淨智、淨

妙、これ也。五山の僧徒の中に、學才あるもの多く、詩文の才あるもの多く、直接に支那に學べるものも少なからず。佛籍以外、漢學に長じて、程朱の學を講ぜしものもありき。之を稱して、五山文學といふ。平安朝に於ける公卿の學問文章は、今や僧侶の手にうつりたる也。其中にて、絶海の詩、義堂の文、尤も卓立す。齋藤拙堂、その文話に記して曰く、室町氏の時、文章なし。然れども、余、僧義堂の空華集を觀るに、頗る誦すべきものあり。尤も其の深耕説を喜ぶ。文字癡疵なきにあらず、されども、理を説くこと、核實、意、筆先に在り。近世の文章家、よく愧づる無からんやと。かくてその深耕説をもかゝげたり。

#### 深耕説(義堂)

僧義堂の漢文

空華叟、郊居、無事、出遊、泛觀、田野、桑柘、之間、有大麥、同畝、而異熟、者、質諸老農、曰、情農爲也、問其所以、曰、凡地耕而淺者、所種之物、必早熟、而不茂、耕而深者、所種之物、必晚成、而肥碩、是以善學稼者、患乎耕之淺、不患成之晚也、而彼惰者、用力弗專、所以耕有深淺、而熟有早晚也、嗟呼、今吾徒也、耕道不深、而患名之晚者、豈無愧於老農之言也耶、余竊有感於中、遂書以告同學、端介然、端介然、深耕者之徒也。

五山文學の外には、漢詩漢文は見るべきもの無し。僧徒は更に和歌にも、その力をのべたり。この時代、和歌四天王の稱あり、即ち頓阿、兼好、淨辨、慶運にして、みな僧徒也。謠曲は、この時代の特産物なるが、これも多くは、僧徒の手に成りたり。半は韻文にして、半は散文なれば、純粹の文章とは云ひ難し。むしろ、文章の部類よりは、詩歌の部類に入るゝが、至當なれども、純粹の韻文にもあらず。自から一種の文章也。まことに、空前の文牀にして、後世の院本の先驅となりたるもの也。而して、演伎と相待ちたるものにて、その演伎の能は、後世の演劇の祖となりたるもの也。謠ひて謠曲となり、演じて能樂となる。この時代、盛に行はれ、徳川時代にも盛にして、今の世も、なほ謠はれ、演ぜらる。謠や、能や、優長なる中に、凜としたる處あり。日本武士的にして、佛臭の加はれる者也。猿樂、田猿より出て、新に舞曲を起し、今様、平家琵琶より出て、新に歌曲を起し、こゝに、謠成り、能成りたるが、これ、足利義滿の時にして、義滿の寵をうけたる、觀阿彌、世阿彌の父子、實に之を大成したる者也。文の作者は、多く傳はらず。古句を多く補綴して、言はゞ、錦をつゞりあはたるが如し。讀むを主とせず、歌ひ、舞ふを主として、暗黒時代につれ

謠曲の文章

て、浮華なる文藻を弄したるもの也。余は、文章として、さばかりの價値を認めず。されど、院本の先驅として、歴史的價値は、永遠に存すべし。こゝに、一例として、鉢木の中より、摘出せむに、

謠曲の一節

信濃なる淺間の嶽に立つ烟、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井川、捨つる身に  
なき友の里、今ぞ浮世を離れ坂、墨の衣の碓氷川、下す筏の板鼻や、佐野の渡に  
着きにけり。

旅僧「急ぎ候ふほどに、上野國佐野の渡に着きて候ふ。あら笑止や、又雪の降  
り來りて候ふ。此所に宿を借らばやと思ひ候ふ。いかに、此屋の内に、案  
内申し候ふ。」

家婦「誰にてわたり候ふぞ。」

旅僧「これは修行者にて候ふ。一夜の宿を御かし候へ。」

家婦「安き御事にて候へども、主の御留守にて候ふ程に、御宿は叶ふまじ。」

旅僧「さらば、御歸りまで、是に待ち申さうするにて候ふ。」

地の文、對話と交錯し、對話が全く地の文よりはなれたるは、謡曲以前の文章には見ざる所也。この例に引きたる浮世離れ坂、筏の板鼻の如き所謂懸け言葉は、もと短歌にのみ用ゐられたるものなるが、謡曲にいたりて盛に之を用ゐて、浮華厭ふべし。後世にいたりては、院本、馬琴の小説などに、益多く之を用ゐるやうになれり。一種の修辭法なれども、文章には、好ましからぬもの也。

謡曲と相對して、狂言あり。これは、滑稽を主としたるもの也。輕快なる日本國民は、謡曲の如く、陰氣くさり、眞面目くさりたるものゝみに満足すること能はざるものと見えて、別に狂言が起りたるなるべし。詞も、足利時代の實社會と觸接したるもの也。殊に地文は無くして、對話のみにて一篇を爲したるは、後世の脚本の祖といふべし。之を演ずるに、能は舞に近けれども、狂言は、後世の芝居に近し。謡曲と對立して室町時代の文壇を飾るもの也。

狂言の文章

狂言の一節

大名「かくれもない大名、藤六居るか」。藤六「お前に」。大名「下六は」。藤六「兩人これに詰めて居りまする」。大名「念なう早かつた。汝等呼び出す、別義で

室町時代第一の文豪

ない。明日は正月元日、出仕にあがらうと思ふが、何とあらうぞ。」藤六「まことに國元に御ざりましてなりとも、御禮にあがらつしやれませいで、叶はぬ事、御座りまするに、あがらつしやれたらば、よう御ざりませう。」大名「よからうな。」藤六「は」大名「やい、して、それがしが烏帽子が、はげたが、何とした物であらうぞ。」下六「こゝろえまして、此中ぬりにやつて御坐りまする。」大名「一段ういやつぢや。いそいで取つてまゐれ。」下六「畏つて御坐りまする。」大名「いそげ、ゑい。」下六「はあ。」

謡曲と狂言とは、文章史上よりは、文學史上に價値あるもの也。文章上には地の文と對話とを別にし、若しくは、全く對話のみを用ゐて、後世の脚本、小説の文藝の先驅を爲したるもの也。

室町時代第一の文豪としては、余は北畠親房を推さむと欲す。日本の文學史上には、さばかりの關係なし。されど、日本の文章史上には、粲然として異彩を放てる一大偉人也。親房は、單に筆先を以て文章を書きたるものに非ず。實に一身を以て、一大文章を乾坤の間に書きたるもの也。或は、今の世の所謂政治家

にはあらざるべし。されど、宮内大臣、樞密院顧問官としては傑出せる人也。時勢が時勢なら、昔の太政大臣にはなり得べき有徳有能の大器也。その博洽なる點に於て、藤原宣房、源定房と共に、後の三房と稱せられたり。元享年間には、大納言に上り、五朝に歴仕し來りて、世良親王の傅となりしが、元徳二年、親王薨す。親房、哀悼に堪へず、官を辭じて剃髮す。舉朝之を惜まざる無し。この一舉以て、其涙ある人なるを知るべし。後醍醐天皇、隱岐より還り給ふや、また出て、仕へ、從一位に叙し、大臣に准ぜらる。尊氏の叛亂起り、天皇終に叡山を下りて、尊氏に就き給ふや、親房は、伊勢に出奔す。以て其氣骨を見るべし。延元三年、子の顯信、陸奥介鎮守府將軍となり、親房之が輔となりて、共に任に赴きしに、海路颶風に逢ひ、親房は、常陸に漂着す。阿波崎、神宮寺の二城に據りしが、賊に攻めて落さる。小田治久をたよみて、小田城に據る。高師冬來り攻む。治久叛して、師冬に降る。親房、關城に據る。師冬また大兵を以て來り攻む。親房書を以て、結城親朝を諭して、南朝に與みせしめむとす。有名なる關城書、これ也。その關城書は、群書類從の中に收められたり。義を説き、情を説き、滔々數千言、肺肝を瀝披す。千古不

關城書

磨の名文也。されど、親朝從はず。城陥りて、親房、吉野にかへる。正平六年、三宮に准ぜられ、輦にて宮に入るを許さる。七年には、南朝の兵、京師を陥れ、親房子の顯能と共に、先づ京師に入りて、諸事を總決せしが、九年にいたりて、病死せり。以上は、親房が一生の大概也。その志節、古今に卓絶す。洵に國家の棟梁也。而かも學博く、佛教にも通じて、文才大也。關城書は、萬古儒夫を起たしむ。神皇正統記と職原鈔とが、その著述の中にて有名なるが、なほ古今集註、東家秘傳、元々集、二十一社記等あり。實に兵馬の間の一大操觚者也。神皇正統記は、南朝の正統たるを明かさむとて、神武天皇以來の事蹟を書きて、南北朝の際に及べるもの也。佛教に偏する處もあれど、識見高く、議論正大也。之を在來の國史の書に比すれば、婦女の中の丈夫也。この時代に史傳の書としては、太平記ありて、源平盛衰記の流をくめり、増鏡ありて、大鏡の流をくめり。吉野拾遺ありて、平家物語に近し。されど、いづれも、正統記に比すれば、女文字也。物語の遺風を脱する能はず。親房の偉なる人物は、正統記にあらはれて、國史の文、こゝに男性的文字を見る。軟文學の方面より見れば、親房は、存在せず。されど、一種の硬文學として、文章の方



北畠親房の文章

面より見れば、親房は、生面をひらきて、範を後世に垂れたり。新井白石の藩翰譜、讀史餘論の如きも、正統記の範圍以内のもの也。

大日本は、神國なり。天祖は、始めて基をひらき、日神ながく統をつたへ給ふ。我國のみ、此事あり。異朝には、そのたぐひ無し。この故に神國といふなり。天地開闢のはじめより、この名あり。天照大神、天孫の尊に譲りましまし、にも、この名あれば、根本の號なりとは知りぬべし。又大八洲國といへり。これは、陽神陰神この國を生み給ひしが、八の島なりしによりて、名づけられにけり。又は耶麻土と云へり。これは、大八洲の中津國の名なり。第八にあたるたぐひ、天御虛空豊秋津根別といふ神を生み給ひき。これを大日本豊秋洲と名づけぬ。今は四十八箇國にわかたり。中洲たりし上に、神武天皇、東征より、代々の皇都なり。依りて、その名をとりて、餘の七州をも、すべて耶麻止といふなるべし。唐にも、周の國より出てたりしかば、天下を周と云ひ、漢の地より興りたれば、海内を漢と名づけしが如し。これ正統記の冒頭也。莊重にして堂々、和漢調を和して、運筆自在なること、實

神皇正統記

に空前也。

泰時論(北畠親房)

大方泰時、心正しく、政すなほにして、人をはぐみ、物におごらず。公家の御事を重くし、本所のわづらひをとめしかば、風の前に塵なくして、天の下、すなはち静まりき。かくて、年代をかさねし事、ひとへに泰時が力ぞと申し傳ふめる。陪臣として、久しく權をとる事は、和漢兩朝に先例なし。其の主たりし頼朝すら、二世をば過ぎず。義時、いかなる果報にか、はからざる家業をはじめ、兵馬の權をとれりき。ためし稀なる事にや。されど、殊なる才徳は、きこえず。又大名の下に、矜る心やありけむ。中二とせば、かりぞありし。身まかりしかど、彼の泰時相續して、徳政を先とし、法式をかたくし、己が分をはかるのみならず、親族ならびにあらゆる武士までも、戒めて、高官高位を望む者なかりき。其の政、次第のまゝに衰へ、つひに滅びぬるは、天命の終る姿なり。七代まで保てるこそ、かれが餘薫なれば、恨むる所なしといふべし。凡そ、保元、平治よりこのかたの亂りがはしきに、頼朝といふ人もなく、泰時と

いふ者もなからましかば、日本國の人民、いかゞなりなまし。此のいはれをよく知らぬ人は、故もなく、皇威のおとろへ、武備のかちにけると思へるは、あやまりなり。所々に申せる事なれど、天日嗣は、御讓にまかせ、正統にかへらせ給ふにとりて、用意あるべき事のあるなり。神は、人を安くするを本誓とす。天下の萬民は、みな神物なり。君は尊くましませど、一人を樂ましめ、萬民を苦しむる事は、天も許さず、神もさいはひせぬいはれなれば、政の可否に隨ひて、御運の通塞あるべしとぞ覺ゆる。

まして、人臣としては、君をたふとび、民を憐み、天にせぐゝまり、地にぬき足し、日月の照すを仰ぎても、心のきたなくして、光にあたらざらむ事をあぢ、雨露の施すを見ても、身の正しからずして、恵にもれむことを願ふべし。朝夕に、長田、狹田の稻の穂をくふも、皇恩なり。晝夜、生井、榮井の水のながれを飲むも、神徳なり。これを思ひいれず、あるにまかせて、欲を恣にし、私を先として、公を忘るゝ心あるならば、世に久しき理ならじ。いはんや、國柄をとる仁にあたり、兵權を預かる人として、正路をふまざらむにあきては、いかでか、其運

を全くすべき。秦時が昔を思ふには、よく誠ある所ありけむかし。子孫は、さほどの心あらじなれど、かたくしける法のまゝに行ひければ、及ばずながら、世をもかさねしにこそ。

異朝の事は、亂逆にして、紀なきためし多ければ、例とするにたらず。我が國は、神明の誓いちじるくして、上下の分定まれり。しかも、善惡の報あきらかに、因果のことわり空しからず。且つは、遠からぬ事どもなれば、近代の得失を見て、將來の鑒識とせらるべき也。

この一篇、識高く、理至れり。正統記出て、國文はじめて、議論あり。これ以前の國文には、無かりし處也。徳川氏の世を終はるまで、この範圍以外に出でたる史論の文は、あらず。嗚呼親房は、日本政治史上の一大偉人なると共に、亦日本文章史上の一大偉人なる哉。

この時代、歴史に關する書物は、可成り多し。増鏡は、作者わからず。多くは、世に一條兼良の子、冬良の作と稱せらるゝものなるが、後鳥羽天皇より後醍醐天皇までの事を記せり。大鏡、水鏡と共に、三鏡と稱せらる。大鏡に似て、更に華やか

也。而して、物語の餘脈をうけて、鎌倉以後の文牒よりは、王朝の文牒に近し。其文、見るべし。太平記も、作者判然せず。この書は、今も多く世によまれて、精しく紹介せむには、餘りに有名也。これは、戦記の系統をついで、文牒は、増鏡とは異なりて、鎌倉以後の文牒也。即ち源平盛衰記に似て、更に華麗也。その中に、俊基朝臣の道行の條、燦爛として、花の如くなれども、さまで浮いては居らず、流麗なる七五調にて、前に其比なく、而して後世の院本の道行の祖となれるものなれば、茲に録す。

太平記の文章

俊基朝臣の東下、太平記

落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻狩、紅葉の錦着てかへる、嵐の山の秋の暮、一夜を明かす程だにも、旅ねとなれば、物うさに、恩愛の契淺からぬ、わが故郷の妻子とばゆくへも知らず、ちもひ置き、年久しくも、住みなれし、九重の都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅にいて給ふ、心の中ぞあはれなる。憂をばとめぬ逢坂の關の清水に袖ぬれて、末は山路をうちての濱、沖を遙に見わたせば、鹽ならぬ海にこがれゆく、身は浮船の浮沈み、駒もとどろと踏みならず、潮

田の長橋うち渡り、行さかふ人に、近江路や、世のうねの野になく、鶴も、子を思ふかとあはれなり。時雨もいたく、森山の木下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠わくる路を過ぎ行けば、鏡の山はありととも、涙にくもりて見えわかず、物を思へば、夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒をとどめて顧る、故郷を雲やへだつらひ。番場醒井柏原、不破の關屋は荒れはてし、なほもるものは、秋雨、いつか我身の尾張なる、熱田の八劍伏し拜み、鹽干に今や鳴海、傾く月に道見えて、明けぬくれぬと行く路の、ずるはいづくと、遠江濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき、捨小舟しづみはてたる身にしあれば、誰かあはれと夕暮の、入相なれば、今はとて、池田の宿に着き給ふ。元暦元年の頃か、とよ、重衡中將の東夷の爲めに囚はれて、此宿につき給ひしに、東路の丹生の小屋のいぶせきに、故郷いかに戀しかるらんと、長者の娘が讀みたりし、其古の哀れまでも、思ひ残さぬ涙なり。旅館の燈幽かにして、雞鳴曉を催せば、匹馬風に嘶きて、天龍河をうち渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が命なりけりと詠じつゝ、二度越え

しあとまでも羨しくぞ思はれける。隙ゆく駒の足はやみ、日すてに亭午にのぼれば、餉進らする程とて、輿を庭前にかきとむ。轅を叩いて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなりと答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし答に依りて、光親卿關東へ召下されしが、この宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水、 汲下流而延齡

今東海道菊河、 宿西岸而終命

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我身の上になり、哀れやいとまさらけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞかゝれける。

古もかゝるためしを菊川の同じ流に身をや沈めむ。

大井河を過ぎ給へば、都にありし名を聞いて、龜山殿の行幸の嵐の山の花盛り、龍頭鷁首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は二度見ぬ夜の夢と成りぬと思ひつゞけ給ふ。島田藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うらかれて物かなしき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、葛楓いと茂りて道も無し。昔

業平の中將の住所もとむとて、東の方に下るとて、夢にも人のあはぬなりけりと讀みたりしも、斯くやとおもひしられたり。清見瀉を過ぎ給へば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の關守に、いと涙を催され、向は、いづこ三穗が崎、奥津蒲原うち過ぎて、富士の高根を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思に、くらべつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、潮干や淺き舟うきて、をり立つ田子の自からも、浮世をめぐる車返し、竹の下路ゆきなやむ、足柄山の峠より大磯小磯見下して、袖にも浪は小綾の、いそぐとしもは無けれど、も、日數つもれば、七月二十六日の暮程に鎌倉にこそつき給ひけれ。

物語の餘脈をつげる増鏡、戦記の餘脈をつげる太平記、いづれもその粹を得たるもの也。この外、松翁の作なる吉野拾遺物語は、物語の流をくみて、文章見るべき節もあり。熊王發心の條、武夫のあはれをとめ、兼好法師來談の條、自からの經をかきて、字々涙をふくめり。梅松論は、大鏡に擬すれども、文は戦記體のやゝ粗なるもの也。されど、面白き事實あり。伯耆の卷は、後醍醐天皇配流の顛末を記せる者なるが、これは、戦記物に、吾妻鑑を加味したるもの也。中に後醍醐天皇

吉野拾遺物語

梅松論

伯耆卷